雲南市埋蔵文化財調査報告書4

万場Ⅰ遺跡

MANBA I SITE

市道新市坂本口線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

※文土器文様イメージ

Excavation Report

2009年3月

雲南市教育委員会

Z(0770)
島根大学附属図書館蔵書

雲南市埋蔵文化財調査報告書４

万場Ⅰ遺跡　正誤表

ページ	誤	正
4	原口墳丘墓群	原口墳墓群
5	原口墳丘墓群	原口墳墓群
７０	元木次中学校造成地遺跡	元日登中学校造成地遺跡
	原口墳丘墓群	原口墳墓群
図版８	元木次中学校造成地遺跡	元日登中学校造成地遺跡
	原口墳丘墓群	原口墳墓群

彩文土器 （第 22 図 1）

彩文土器 （第 22 図 2）

ほぼ原寸大

巻頭図版２

彩文土器出土状況

縄文晩期水路跡

木製品出土状況 1

木製品出土状況 2

序

兼ねてより地域の皆様からご要望のありました、市道新市坂本口線の道路改良工事が雲南市となって着工されることとなり、これを受けて雲南市教育委員会では工事予定地内に所在する、万場Ⅰ遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施いたしました。

今回の調査では、雲南市木次町地内で、これまで斐伊川の本流沿いでしか確認されていなかった縄文時代の遺物が出土し、久野川流域でも縄文時代の生活があったことがわかりました。

出土遺物のなかで特筆されるのは、東北日本の縄文文化を伝える彩色土器の出土であります。東北日本で生まれた文様が赤と黒の漆で施された縄文時代の彩色土器の出土は県内でも数少なく、雲南の地と、遠く離れた東北日本とのつながりを考えるうえで貴重な資料となりました。また、同時に私たちにとってはこの距離の隔たりがはるか古代のロマンを掻き立ててくれます。

本報告書が地域の歴史を考える資料として広く活用していただければ幸いです。

終わりに、本発掘調査にあたり、懇切に指導していただいた島根県教育庁文化財課をはじめ、現地調査から報告書の発刊にかけてご指導、御協力をいただいた皆様方に衷心よりお礼申し上げます。

平成21年3月

雲南市教育委員会

教育長　土江博昭

例　言

1．本書は、雲南市教育委員会が、平成18・19年度に実施した市道新市坂本口線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査の対象となった遺跡は次のとおりである。

万場Ⅰ遺跡　　島根県雲南市木次町東日登314-9番地外

3．発掘調査は、雲南市建設部建設工務課から委託を受けて、雲南市教育委員会が平成18年8月2日から平成19年7月31日にかけて実施した。

4．調査組織は次のとおりである。

調査主体　　雲南市教育委員会　　教育長　土江博昭

事務局〔平成18年度〕

藤井信弘（雲南市教育委員会教育部長）、杉原桂林（同教育部次長）、稲岡恵子（同生涯学習課長）

板垣　旭（同生涯学習課文化財・文化振興グループ統括主幹）

事務局〔平成19年度〕

藤井信弘（雲南市教育委員会教育部長）、稲岡恵子（同教育部次長）、湯村　茂（同生涯学習課長）

板垣　旭（同生涯学習課文化財グループ統括主幹）

調査員〔平成18年度〕（8月2日～翌年3月31日）

坂本論司（生涯学習課主査）、田浪文雄（同文化財・文化振興グループ副主幹）

調査員〔平成19年度〕（7月14日～7月31日）

坂本論司（生涯学習課主査）、堀江篤史（同文化財グループ主任主事）

調査指導　（敬称略）

田中義昭（島根県考古学協会会長）蓮岡法暲（雲南市文化財保護審議会会長）濱田竜彦（鳥取県教育委員会事務局文化課文化財主事）山田康弘（島根大学法文学部准教授）**中村唯史**（島根県立三瓶自然館サヒメル主任学芸員）　島根県教育庁文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター

整理作業

青木裕美子（臨時職員）、安川賢太（株式会社トーワエンジニアリング文化財課主任）

5．挿図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標X軸の方向を指す。また、平面直角座標系XY座標は世界測地系による。高さは海抜高を示す。

6．現地調査及び報告書作成にあたっては、次の方々からご指導、ご協力を賜った。特に、亀ヶ岡系土器、彩文土器、木質遺物等に関して貴重な資料を提供していただいたことに、改めて深く感謝の意を表したい。

鈴木克彦・工藤　大（青森県埋蔵文化財調査センター）、斎藤　岳（青森県立郷土館）、山田　央（七飯町歴史館）、荒牧宏行、片多雅樹（福岡市教育委員会埋蔵文化財センター）、成瀬正勝（財団法人岐阜県文化財保護センター）（敬称略）

7．資料の自然科学的分析は次の機関に依頼した。

万場Ⅰ遺跡漆塗り土器の分析・・・・・・・・・・・・・・・財団法人　元興寺文化財研究所

万場Ⅰ遺跡出土木製品樹種同定及びAMS年代測定・・・文化財調査コンサルタント株式会社
なお、濱田竜彦氏のご配慮により、国立歴史民俗博物館年代測定研究グループ〔小林謙一(中央大学文学部)・坂本稔・藤尾慎一郎(国立歴史民俗博物館研究部)〕の方々に、万場Ⅰ遺跡出土試料の ^{14}C年代測定を行っていただいた。記して感謝いたします。
これらの分析結果報告については、編集によるものを除き原則としてそのままを掲載した。したがって、挿図及び表、写真については、それぞれ独立して付番しており、本書の目次に記した挿図番号、表番号、図版番号とは連続していない。

8．本書に掲載した図面は、調査員・整理担当者が分担して作成した。出土遺物の実測については、その一部を文化財調査室いなか舎に委託して行った。また、写真の撮影については、調査員が行った。遺構及び遺物のトレースはAdobe社製のIllustratorを使用して行い、それをもとに各図版を作成した。また写真図版についてはデジタルカメラで撮影したものやフィルムからデジタル画像に変換したデータをPhotoshopにて修正して使用した。最終的な編集はAdobe社のInDesign を使用して行った。

9．本書掲載の第2図・第3図は、国土地理院発行の1／25,000地形図を使用して作成した。

10．本書の執筆は坂本論司・山崎修・安川賢太が行い、編集は安川賢太が行った。

11．本報告書掲載の出土遺物、実測図、写真などの資料は、雲南市教育委員会で保管している。

発掘調査に参加していただいた人々

本文目次

MANBA I SITE

第1章 遺跡の位置と環境　坂本諭司

第1節　地理的環境 ―― 1
第2節　歴史的環境 ―― 1

第2章 発掘調査の経緯と経過　坂本諭司　山崎　修

第1節　調査に至る経緯 ―― 7
第2節　発掘調査の経過 ―― 8

第3章 調査の方法と成果　坂本諭司

第1節　発掘調査の方法と概要 ―― 10
第2節　層 序 ―― 12
第3節　検出した遺構と出土遺物 ―― 15

第4章 自然科学分析　諸分析機関

第1節　万場Ⅰ遺跡出土土器^{14}C年代測定 ―― 53
第2節　万場Ⅰ遺跡漆塗土器の分析 ―― 56
第3節　万場Ⅰ遺跡出土木製品樹種同定及びAMS年代測定 ―― 59

第5章 まとめ　坂本諭司　安川賢太

第1節　周辺の遺跡 ―― 69
第2節　東日本系の土器について ―― 71
第3節　夜臼系壺形土器について ―― 75
第4節　木質部材について ―― 77

本文挿図目次

第１図　万場Ｉ遺跡の位置 ―― 1
第２図　調査区配置図 ―― 2
第３図　万場Ｉ遺跡と周辺の遺跡地図 ―― 4-5
第４図　遺跡周辺の地形 ―― 7
第５図　１区調査グリッド設定図 ―― 9
第６図　19 年調査区Ｅ－Ｆ土層断面図 ―― 9
第７図　１区全体図（１／３００） ―― 11
第８図　柱状図 ―― 11
第９図　１区Ａ－Ａ'土層断面図 ―― 12
第 10 図　１区Ｃ－Ｄ・Ｇ－Ｈ土層断面図 ―― 13
第 11 図　２区平面図とＡ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'土層断面図 ―― 14
第 12 図　12 グリッド土器溜り平面図 ―― 16
第 13 図　12 グリッド土器溜り平面図 ―― 17
第 14 図　層位別縄文土器出土の割合 ―― 18
第 15 図　１区出土縄文土器（有文・粗製土器）実測図１　Ｓ＝１／３ ―― 19
第 16 図　１区出土縄文土器（突帯文土器）実測図　Ａ類（1）　Ｓ＝１／３ ―― 20
第 17 図　１区出土縄文土器（突帯文土器）実測図　Ａ類（2）　Ｓ＝１／３ ―― 21
第 18 図　１区出土縄文土器（突帯文土器）実測図　Ｂ類　Ｓ＝１／３ ―― 22
第 19 図　１区出土縄文土器（突帯文土器）実測図　Ｃ．Ｄ．Ｅ．Ｆ類　Ｓ＝１／３ ―― 23
第 20 図　１区出土縄文土器（口縁に刻み目を持つ）土器実測図　Ｓ＝１／３ ―― 23
第 21 図　１区出土縄文土器（孔列土器実測図）　Ｓ＝１／３ ―― 24
第 22 図　彩文土器実測図 ―― 25
第 23 図　１区出土その他の縄文土器実測図　Ｓ＝１／３ ―― 26
第 24 図　１区出土石錘実測図　Ｓ＝１／３ ―― 30
第 25 図　１区出土石製品・木器実測図　Ｓ＝１／３ ―― 31
第 26 図　１区出土木質遺物実測図　Ｓ＝１／３ ―― 32
第 27 図　１区出土弥生土器実測図１　Ｓ＝１／３ ―― 33
第 27 図　１区出土弥生土器実測図２　Ｓ＝１／３ ―― 34
第 39 図　１区出土土師器（複合口縁）実測図１　Ｓ＝１／３ ―― 35
第 30 図　１区出土土師器（複合口縁）実測図２　Ｓ＝１／３ ―― 36
第 31 図　１区出土土師器（単純口縁）実測図　Ｓ＝１／３ ―― 37
第 32 図　１区出土土師器実測図　Ｓ＝１／３ ―― 38
第 33 図　１区出土鼓型器台・高坏・低脚坏実測図　Ｓ＝１／３ ―― 39
第 34 図　１区出土須恵器実測図　Ｓ＝１／３ ―― 40
第 35 図　１区出土土製品実測図　Ｓ＝１／３ ―― 41
第 36 図　１区出土その他の遺物実測図　Ｓ＝１／３ ―― 42
第 37 図　万場Ｉ遺跡周辺の遺跡 ―― 70
第 38 図　山陰地方の東日本系土器出土遺跡 ―― 71
第 39 図　島根県内の三田谷文様の土器　Ｓ＝１/3 ―― 72
第 40 図　東日本系土器の分布と展開 ―― 72

第 41 図　山陰及地方出土の東日本系土器　S＝1/3 ―― 73
第 42 図　北部九州出土彩文土器実測図 ―― 74
第 43 図　万場Ⅰ遺跡出土彩文土器の成立過程 ―― 74
第 44 図　島根県内の夜臼系壺形土器実測図　S＝1/3 ―― 75
第 45 図　万場Ⅰ遺跡出土縄文晩期土器の変遷と広域編年対応表 ―― 76
第 46 図　全国各地の縄文時代の水さらし場遺構 ―― 77
第 47 図　水さらし場遺構検出遺跡とその年代 ―― 78

自然科学分析挿図目次

万場Ⅰ遺跡出土土器 ^{14}C 年代測定
第 1 図　万場Ⅰ遺跡測定資料の較正年代確率分布 ―― 55
万場Ⅰ遺跡漆塗土器の分析
第 1 図　黒色塗膜のＸＲＦ分析グラフ ―― 57
第 2 図　赤色塗膜のＸＲＦ分析グラフ ―― 57
第 3 図　黒色塗膜のＡＴＲ－ＦＴＩＲスペクトル ―― 58
第 4 図　赤色塗膜のＡＴＲ－ＦＴＩＲスペクトル ―― 58
万場Ⅰ遺跡出土木製品樹種同定及びＡＭＳ年代測定
第 1 図　万場Ⅰ遺跡の位置 ―― 59
第 2 図　試料採取層準 ―― 60
第 3 図　フローチャート ―― 62
第 4 図　年代測定値の分布 ―― 64

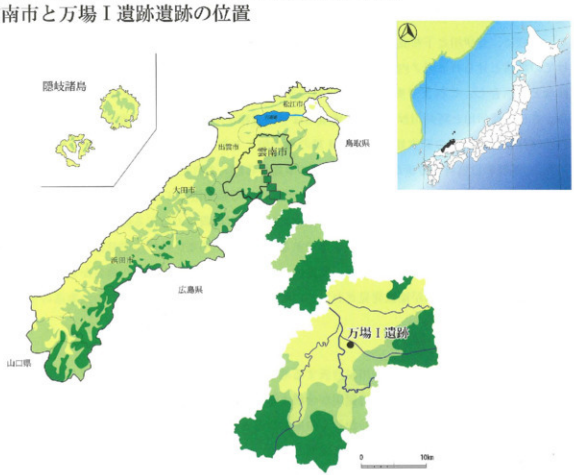
写真図版目次

巻頭図版 1　万場Ⅰ遺跡出土彩文土器 1・2
巻頭図版 2　彩文土器出土状況・縄文晩期水路跡
巻頭図版 3　木製品出土状況 1・2
図版 1　①万場Ⅰ遺跡遠景久野川下流より撮影　②万場Ⅰ遺跡遠景久野上流より撮影
図版 2　① 1 区調査前風景　② 2 区調査前風景
図版 3　① 19 年度調査区近景南東より撮影　②粗製縄文土器出土状況
図版 4　① 9 グリッド東壁土層堆積状況　② 11 グリッド東壁土層堆積状況
図版 5　① 10 グリッド土器出土状況　② 14 グリッド土器出土状況
図版 6　① 12 グリッド土器溜り　その 1　② 12 グリッド土器溜り　その 2
図版 7　① 13 グリッド土器溜り　その 1　② 13 グリッド土器溜り　その 2
図版 8　①万場Ⅰ遺跡と周辺の遺跡　②周辺遺跡の出土遺物
図版 9　第 15・16 図掲載遺物
図版 10　第 17・18 図掲載遺物
図版 11　第 19・20 図掲載遺物
図版 12　第 21 図掲載遺物
図版 13　第 22 図掲載遺物
図版 14　第 23 図掲載遺物
図版 15　第 24・25 図掲載遺物
図版 16　第 26 図掲載遺物
図版 17　第 26 部分拡大写真図
図版 18　第 27 図掲載遺物
図版 19　第 28・29 図 1 ～ 5 掲載遺物
図版 20　第 29 図 6/ 第 30 図 1・2 掲載遺物
図版 21　第 30 図 3 ～ 5/ 第 31 図 1 ～ 10 掲載遺物
図版 22　第 31 図 1 ～ 7 掲載遺物
図版 23　第 32 図 8 ～ 14 掲載遺物
図版 24　第 33 図掲載遺物
図版 25　第 34 図 20/ 第 35 図 1 ～ 9 掲載遺物
図版 26　第 34 図 1 ～ 19・21・22 掲載遺物
図版 27　第 35 図 10 ～ 12/ 第 36 図掲載遺物

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

万場Ⅰ遺跡は、斐伊川の支流である久野川に形成された低位河岸段丘に位置している。中でも本遺跡の南東よりに広がる河岸段丘は特に広く発達し、伝木次銅鐸出土地をはじめとした弥生遺跡が点在する地域となっている。後述するように本遺跡が所在するこの河岸段丘地帯は、古代には大原郡の木次郷から佐世郷、また、木次郷から仁多郡への往還の起点に位置している。さらに、本遺跡から南に山越えすると北原本郷遺跡や垣ノ内遺跡など縄文、弥生遺跡が集まる斐伊川につきあたる。歴史的環境については以下、各時代ごとに周辺の遺跡を概観する。



第１図　万場Ⅰ遺跡の位置

第２節　歴史的環境

縄文時代

斐伊川中・上流域の縄文遺跡は、多くが横田盆地周辺と斐伊川に阿井川、下布施川が合流する地域及び三刀屋川と飯石川が合流する地域に分布している。特に斐伊川と下布施川が合流する地域では尾原ダム建設に伴う発掘調査によって縄文早期の押し型文土器が出土した北原Ⅰ遺跡や後・晩期の北原本郷遺跡などが相次いで確認されている。斐伊川と阿井川の合流地点に所在する平田遺跡では石器の製作跡とみられる場所から240点に及ぶ石錘、石斧が検出され、後期から晩期にかけての縄文集落の拠点の可能性が考えられている。この他、三刀屋川と飯石川が合流する地域に所在する宮田遺跡をはじめ、斐伊川本流沿いに所在する暮地遺跡、前田遺跡、北原本郷遺跡などでは後期から晩期にかけての土器埋設遺構が検出され、暮地遺跡や北原本郷遺跡では土偶も出土している。

これらの遺跡から出土する遺物には漁労に用いる石錘が多く見られ、斐伊川本支流の縁辺に営まれた集落では、食糧の確保に川の漁業資源が大きな比重を占めていたことが窺われる。

弥生時代

弥生時代になると、これまで斐伊川本支流の縁辺部に多く営まれた集落がさらにその周辺に広がるようになる。また、縄文遺跡が希薄な地域であった赤川沿いにも加茂岩倉遺跡をはじめとした弥生遺跡が確認されるようになる。弥生中・後期の墳墓がまとまって築かれた神原正面北遺跡や、同時期の弥生土器が大量に出土した郡垣遺跡などから、中期にはすでに赤川沿いにも弥生集落が展開していたことを物語っている。横田盆地周辺では縄文時代から引き続き弥生遺跡の密度は高く、弥生中期から後期末の横田高校グランド遺跡、弥生中期の板状鉄斧が出土した国竹遺跡などが所在する。同様に、斐伊川と下布施川が合流する地域でも縄文時代に続いて弥生中期後半から後期末にかけての集落と見られる逗ノ内遺跡、また、中期前葉から後期中葉の集落跡が検出された北原本郷遺跡などが所在し、これまで奥出雲郡で資料の乏しかった弥生集落の様相が徐々に解明されつつある。さらに斐伊川と阿井川が合流する地域には平田遺跡が所在する。平田遺跡では弥生後期末から古墳時代初頭の大型の竪穴建物跡から4基の鍛冶炉とともに鉄鏃の未製品や鉄片、鞴などが出土した。 鉄器の自然科学分析からこの建物が、半島から搬入された鉄素材を鞴で切断、成形した後、鍛冶炉で炙って曲げ加工や砥石での研磨作業が行われた原始鍛冶工房跡であることがわかっている。なお、万場Ⅰ遺跡が所在する寺領本郷地内には、低河岸段丘の広がる好適な地形のためか伝木次銅鐸出土地や弥生後期後半の土器散布地である欠戸遺跡、あるいは原口墳墓群などの弥生遺跡がまとまって所在している。さらに近年、同地内の中央部に位置する山丘から弥生から古墳時代にかけての墓と見られる墳墓が複数発見され、この時期における久野川水系の中の一大集落の様相を呈している。

古墳時代

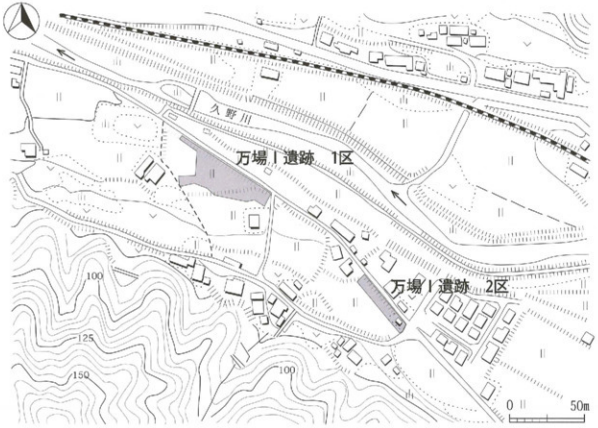
古墳時代前期には、斐伊川と赤川が合流する地域に、景初三年銘の三角縁神獣鏡が副葬された神原神社古墳が、また、斐伊川と三刀屋川が合流する地域には松本古墳3号墳や斐伊中山古墳群2号墳といった前期古墳が築かれる。しかし、中期になると古墳の分布は極めて希薄となり、奥出雲町暮地に所在する丸子山古墳群が知られる程度となる。一方、後期に入ると出雲平野部や出雲東部と同様、横穴式石室や横穴墓が山間部まで浸透する。横穴式石室は、加茂町三代に所在する三代古墳や奥出雲町原田所在の原田古墳などのように斐伊川本流を眼前に望む場所に点在しており、被葬者は斐伊川を介在させた交易、流通に関わった首長である可能性を窺わせている。原田古墳からは、双龍環頭大刀、金銅製馬具、翡翠製勾玉やガラス玉などが出土している。この地域の横穴式石室の副葬品と比べるとその豪華さは際立っているものの、斐伊川中流域一帯をまとめるような大首長の存在は確認されていない。このことから、古墳時代後期、斐伊川の中流域においては、大首長を頂点とするピラミッド型の社会構造ではなく比較的均等な社会構造だったと考えられている。ところで、この原田古墳が含まれる奥出雲町の北西部は特に横穴式石室や横穴墓の分布密度が高く、人物埴輪が出土した常楽寺古墳や横穴墓では後背墳丘を伴った殿ヶ廻横穴墓など多くが所在する。横穴墓の中には下布施横穴墓群のように山間の谷奥にありながら金銀装の大刀が副葬されるものもある。この金銀装大刀は中央から下賜される性格の大刀とは趣が異い、材地で製作された可能性も含まれている。

本遺跡が所在する寺領本郷地内には、刀身、鞘、柄の全てに鍍金が施された金銅装刀子が出土した平ヶ廻横穴墓が所在する。

奈良・平安時代

既に述べたように寺領本郷地内では、弥生時代後期から古墳時代にかけて集落が大きく発達し、その結果『出雲国風土記』大原郡条の木次郷郷庁の推定地として発展したと考えられる。久野川が斐伊川と合流するあたりには、『出雲国風土記』によれば大原郡家、新造院、新造院尼寺があり、大原郡大領勝部臣蟲麻呂が造営したとされる新造院の礎石が現存する。また、川の左岸には三軍団のひとつ熊谷軍団の推定地が所在する。木次郷の郷庁は、大原郡家から仁多郡へ向かう街道の要地といえる。斐伊川の本流沿いでは比較的狭い範囲の中に古代の祭祀遺跡が３箇所確認されている。このうち家の上遺跡では、井泉のそばから祀り場と見られる配石遺構が検出され、その周囲からは土馬や手捏土器、土玉などが出土した。古墳時代終末から平安時代初頭にかけての水辺の祭祀跡とされている。『出雲国風土記』仁多郡条に記される阿遅須伎高日子命に纏わる伝承神話との関連が窺われ、注目されている。このほかの祭祀遺跡として奥出雲町の円満寺遺跡、家ノ脇Ⅱ遺跡があり、いずれも川べりに所在する。

木次町尾原から奥出雲町林原地内は斐伊川が著しく蛇行している。この地域では尾原ダム建設に伴う発掘調査によって鉄に関連する遺跡が相次いで確認されることとなった。寺田Ⅰ遺跡や原田遺跡では奈良時代後半の鍛冶炉が検出され、寺田Ⅰ遺跡では鉄鉗や鉄床石などの鍛冶道具も出土し、生産物と見られる剖鉄も出土している。また、横ヶ峠遺跡、上垣内たたら跡、家ノ前鉄跡など平安時代と見られる野たたら跡も所在する。さらに、三刀屋川流域でも三刀屋町鉄穴内遺跡から奈良時代後半から平安時代初頭と見られる鍛冶炉が複数発見され、鍛冶道具や鉄製の巡方が出土してい



第２図　調査区配置図

古墳・横穴以外の遺跡の性格

万場Ⅰ遺跡	本報告遺跡
原口墳丘墓群	弥生後期墳丘墓群
伝木次銅鐸出土地	銅鐸出土地（推定地）
妙見山遺跡	中世祭祀遺跡
斐伊新造院跡	古代新造院跡
斐伊新造院尼跡	古代新造尼寺跡
早稲田遺跡	遺物散布地
寺田Ⅰ遺跡	製鉄関連遺跡・遺物散布地
垣ノ内遺跡	集落跡・遺物散布地
川平Ⅰ遺跡	集遺物散布地
宮ノ脇遺跡	集落跡・遺物散布地
北原本郷遺跡	集落跡・遺物散布地
家の後Ⅰ遺跡	遺物散布地
家の上遺跡	古代祭祀遺跡
平田遺跡	集落跡・製鉄関連遺跡
原田遺跡	集落跡・製鉄関連遺跡
前田遺跡	集落跡・遺物散布地
林原遺跡	集落跡・遺物散布地
家ノ脇遺跡	遺物散布地
下鴨倉遺跡	遺物散布地
暮地遺跡	集落跡・遺物散布地
郡垣遺跡	遺物散布地・建物跡
大原郡家推定地	旧大原郡家推定範囲
角田遺跡	遺物散布地
大東高校グラウンド遺跡	玉造関連遺跡・遺物散布地
織部石斧出土地	石斧出土地
神原正面遺跡	弥生墳丘墓・古墳・横穴群
土井・砂遺跡	古墳・横穴群
羽森第2・3遺跡	古墳時代製鉄関連遺跡
大志戸鉄跡	製鉄関連遺跡
鉄穴内遺跡	古代鍛冶遺跡
宮田遺跡	遺物散布地・埋葬遺構
森谷川遺跡	遺物散布地
京殿遺跡	遺物散布地
古殿遺跡	遺物散布地
横原遺跡	遺物散布地
浜遺跡	遺物散布地
宮内遺跡	遺物散布地
馬場遺跡	遺物散布地・中世埋葬遺構

第3図 万場Ⅰ遺跡と周辺の主要な遺跡

湯後遺跡
湯後横穴墓群 横穴墓
高麻城跡
岩根元宮古墳 後期古墳
神原神社古墳 後期古墳
神原正面遺跡 弥生～古代
土井・砂遺跡 前期古墳・横穴
郡垣遺跡 弥生～古代
大原郡家推定地 古代
角田遺跡 縄文～古墳
縄部石斧出土 新石器
大東高校グラウンド遺跡 古墳～古代
赤川
妙見山遺跡 中世
斐伊中山古墳群 前期古墳
馬場遺跡 縄文～弥生
斐伊郷新造院尼跡
斐伊郷新造院跡
叶坂古墳 後期古墳
案内横穴墓群 横穴墓
万場Ⅰ遺跡
平ヶ迫横穴墓 横穴墓
原口塩丘墓群 弥生
伝木次銅鐸出土地 弥生
久野川
小谷横穴墓群 横穴墓
岩佐古墳 後期古墳
岩広古墳 後期古墳
寺谷尻古墳 後期古墳
斐伊川
寺田Ⅰ遺跡 縄文～中世
下布施横穴墓群 横穴墓
堪ノ内遺跡 縄文～中世
宮ノ脇遺跡 縄文～弥生
化原本郷遺跡 縄文～近世
川平Ⅰ遺跡 縄文～弥生
家の後Ⅰ遺跡 縄文～古代
早稲田遺跡 弥生～古代
原田遺跡 縄文～中世
前田遺跡 縄文
家の上遺跡 古代
林原遺跡 縄文～中世
家ノ脇遺跡 縄文～中世
平田遺跡 縄文～中世
下熊倉遺 縄文～古代
墓地遺跡 縄文～弥生

る。前述の『出う発掘調査によって鉄に関連する遺跡が相次いで確認されることとなった。寺田Ⅰ遺跡や原田遺跡では奈良時代後半の鍛冶炉が検出され、寺田Ⅰ遺跡では鉄鋌や鉄床石などの鍛冶道具も出土し、生産物と見られる割鉄も出土している。また、横ヶ峠遺跡、上垣内たたら跡、家ノ前鉧跡など平安時代と見られる野たたら跡も所在する。さらに、三刀屋川流域でも三刀屋町鉄穴内遺跡から奈良時代後半から平安時代初頭と見られる鍛冶炉が複数発見され、鍛冶道具や鉄製の巡方が出土している。前述の『出雲国風土記』には飯石郡条に川砂鉄を表す「鐵」が、また、仁多郡条にも鉄に関する記述があり、これらの鉄関連遺跡との関わりが注目される。

鎌倉・室町時代

中世初期における本遺跡近辺の荘園には広田荘、来次荘、福武荘の３箇所が挙げられている。承久３年(1221)に起こった承久の乱により、今まで貴族、寺社などの公家領であった荘園に東国の御家人が地頭として配置された。大原郡海潮郷の諏訪中沢氏、佐世郷の佐世氏、飯石郡三刀屋郷の諏訪部(三刀屋)氏、仁多郡三沢郷の三沢氏などであるが、そんな中で斐伊郷の有力者であった比伊又太郎が福竹荘の地頭に任じられている。信州から移り住んだ三沢氏は豊富な製鉄資源を背景に鉄生産によって経済基盤を築いた。本遺跡が含まれる寺領地内には、尼子方の家臣宇山飛弾守久信の砦とされる城址が所在する。木次町地内には地玉峠や固屋畦など尼子方と毛利方の合戦地が見受けられる。

三刀屋川流域では吉田町堂々ノ内Ⅰ・Ⅱ遺跡、大志戸Ⅱたたら跡など、鎌倉から戦国時代の製鉄遺跡が確認されている。製鉄炉の一部は中国地方にのみ見られる鉄アレイ型の炉床をもち、中世の製鉄炉が狭い範囲からまとまって発見されており、この地域が独自の製鉄技術を持った一大中心地と考えられている。

江戸時代

本遺跡が所在する木次町は、江戸時代、仁多郡方面からの米や物資が馬によって運ばれてくる馬運と、木次からこれらの物資を舟で斐伊川を下り、出雲平野部に送る舟運の中継地点として大きな役割を果たしていた。江戸時代の始めごろには、木次に紙市が起こり、慶安２年(1649)には紙座が設けられ、その後出雲国内の紙製品の多くが木次で取引されるようになった。また、天保１０年(1839)にはじまった千歯の生産は木次千歯とよばれ、製紙とともに木次の重要な産業となった。

奥出雲郡での近世の主要な産業はたたら製鉄であるが膨大な鉄生産を可能とした砂鉄採取はかんな流しによって行われた。これにより斐伊川によって押し流された砂は下流域に運ばれ沖積平野を形成することになるが、近世初頭には斐伊川の天井川化はすでに始まっていたとされている。天井川による水害やかんな流しによる濁り水のため17世紀はじめには、松江藩によって一旦かんな流しが禁止されるが、その後再び再開され、江戸時代中頃から明治初頭までたたら製鉄は盛行する。

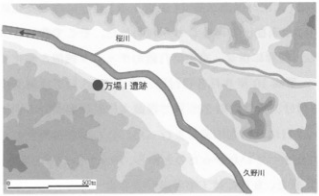
天和元年(1681)には重要民俗文化財である菅谷たたらが操業開始となる。この製鉄業は、松江藩によって支配統制され、享保１１年(1726)鉄方御法式の発令で藩内のたたらを１０箇所とし、鉄師は８人に限られた。斐伊川流域では櫻井、絲原、田部といった鉄師がたたら操業を行い、絲原、田部家が大正時代初頭に操業を終えている。

第２章　発掘調査の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

市道新市坂本口線は、斐伊川の支流・久野川の左岸に沿って、雲南市役所の南東直近に架かる学園橋から県道掛合大東線との合流地点に通じる総延長2.5kmの道路である。久野川の対岸には、国道54号から延びる県道安来木次線やＪＲ木次線が並行する併行する。

この市道新市坂本口線は、東日登方面から市内中心部へ向けての生活道路として、非常に大きな役割を果たしているが、幅員が狭く歩道も設けられていなかったことから、朝夕には通勤・通学に困難や危険が生じており、沿線住民からは合併以前より道路拡幅の要望が強かった。こうしたことから、旧木次町では町道新市坂本口線道路改良事業を計画し、計画路線の実施設計に伴って、木次町建設課から木次町教育委員会に対して埋蔵文化財の確認依頼がなされた（平成13年11月28日付、木建発第153号）。



第４図　遺跡周辺の地形

当該事業予定地は、そのほとんどが道路に沿って広がる水田で、それまで遺跡の存在は知られていなかった。しかし、当該地が久野川によって形成された河岸段丘上であることや、近くに伝木次銅鐸の出土推定地が存在することなどから、木次町教育委員会では、確認依頼を受けて埋蔵文化財の分布調査（踏査）を行った。この踏査では、土器等の遺物を表採することはできなかったが、地元の方からの聞き取りにより、昭和40年代に行われた圃場整備工事の際、事業予定地の一部で水田下より石段状の構造物や土器が出土したという情報を得た。

木次町教育委員会は、踏査と聞き取り調査の結果を踏まえ、計画どおり設計・工事を進めて差し支えない区域と、改めて埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を必要とする区域に区分した上で、木次町建設課へ調査結果の報告をした。

木次町教育委員会が試掘調査を必要と判断した範囲については、木次町建設課より試掘調査の依頼を受け（平成15年12月２日付、木建発第291号）、平成15年12月16日～18日にかけて当該区域内の試掘調査を実施することとなった。調査にあたっては、２ｍ×３ｍのトレンチを４か所設定し、遺構・遺物の有無を確認するとともに、堆積土層の観察を行った。この結果、２箇所のトレンチにおいて水田下約３ｍの深さから、砂を多く含む黒色砂質土や黒色シルト層を確認し、この土中より土器や石器が出土した。出土した土器は、弥生時代後半から古墳時代初頭のものが多く、次いで縄文土器であった。

こうして、当該地において縄文時代から中世にかけての遺物包含層を確認するに至り、木次町教育委員会は、木次町建設課に対して、工事を行う前には発掘調査が必要となる旨を通知した（平成15年12月22付、木教発第228号）。そして、木次町教育委員会では遺物が出土した範囲を万場Ⅰ遺跡と命名し、木次町建設課より島根県教育委員会へ遺跡の発見通知を提出するに至った（平成16年１月20日付、木建発327号）。

町道新市坂本口線道路改良事業は、埋蔵文化財の保護に影響のない部分から進められてきたが、

平成16年11月1日、木次町は、大東町・加茂町・三刀屋町・吉田村・掛合町と合併して雲南市となり、町道新市坂本口線道路改良事業は市道改良事業として引き継がれることとなった。これにより、本遺跡の発掘調査については、雲南市教育委員会が行うこととなった。

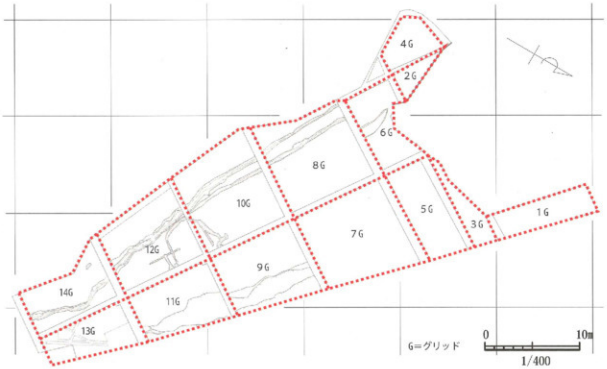
第２節　発掘調査の経過

平成18年度に入り、当該市道の改良事業が実施に向けて本格化したため、4月18日、事業主体側である建設工務課と発掘調査の打合せを行った。本遺跡は、新市坂本口線に沿って約200 mに渡る細長い調査区となっているため、中ほどの住宅地を挟んで下側を1区、上側を2区と称して平成18年度は1区の調査から行うこととした。現地調査は平成18年8月2日より開始した。18年度の調査が終了したところで新年度となり、これに伴せて現場の調査にあたった職員が異動となり、発掘調査を一時中断した。平成19年度に入って調査担当者が文化財保護法上の手続きについて確認したところ、埋蔵文化財発掘の通知(文化財保護法第94条第1項)並びに埋蔵文化財発掘調査の通知(文化財保護法第99条第1項)が未提出であることが判明した。そこで教育委員会では平成19年6月8日、県文化財課に対し、謝罪に併せ、文化財行政のチェック機能を強化することを確認した。県文化財課の指導により、平成19年6月8日付け、建事第88号で埋蔵文化財発掘の通知を、また、平成19年6月12日付け、雲教生第225号で埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、引き続いて調査を行うなか、6月21日には調査指導会を行った。この調査指導会において、試掘調査時に発見された縄文土器はまだ出土していなかったことから、再度トレンチを入れ、土器の有無の確認をするよう指導がなされた。また、6月には工事計画がまとまったことから同年7月3日、工事主体者である建設部建設事業課から地元住民への説明会が開かれ、その際に教育委員会からこれまでの調査の成果報告に併せ、調査の続行についての理解と協力を要請した。

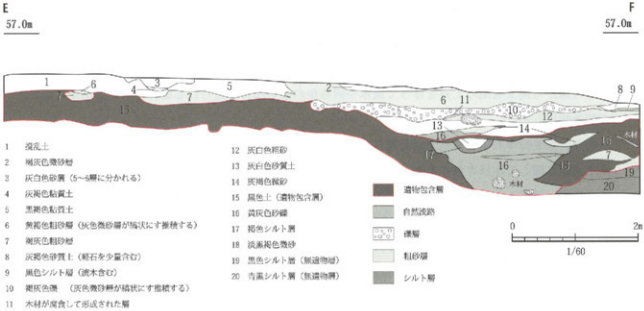
調査指導に基づき、1区を縦断するかたちでトレンチを入れたところ、掘削面から2.3 m下の黒色シルト層より縄文土器を検出した。この縄文土器は1区全体でなく上手側の道路際に限って出土したことから、道路際に沿って調査を進めることとした。下手の道路際の調査区を掘削したところ、湧水が発生して壁面が倒壊しだし、調査が危険になったため県文化財課と協議を行って、遺構、遺物がないことを確認し、下手側の調査を終えた。土器は上手の道路際から出土していたため、上手を中心に掘削し、水路跡を検出したほか、土器、木質遺物などを取上げた後、写真撮影をおこなって平成19年7月27日、1区の調査を終了した。現地調査終了の後、平成19年8月1日付けで島根県雲南警察署長に埋蔵文化財発見届を、また、島根県教育委員会に埋蔵文化財保管証を提出した。さらに平成19年8月14日付けで発掘調査概要報告書を提出するとともに、同日付け、雲教生第467号で1区の取り扱いについて協議を行い、島根県教育委員会より平成19年8月17日付けで回答がなされ、記録保存の措置がとられることとなった。

2区は、平成19年6月13日付けで発掘調査通知を提出して準備に取りかかり、1区と並行して平成19年7月24日から調査を開始した。調査区は、市道に並行する細長い水田の道路側で、耕作土を除去した後遺跡の分布範囲を確認するため3箇所にトレンチを設定して重機を使い掘下りげた。この結果、調査区中央よりのトレンチから流れ込みと見られる少量の土器を検出したもののこれ以外に遺物は確認されなかった。一方、トレンチ底面や壁面から大量の地下水が湧き出し、壁面が崩壊するなど発掘作業が困難となったため、7月30日には県文化財課と協議を行い、調査

の危険性を考慮して遺構、遺物がないことを確認したうえで７月 31 日現地調査を終了した。この後。さらに平成 19 年 10 月 10 日付けで発掘調査概要報告書を提出するとともに、同日付け、雲教生第 648 号で２区の取り扱いについて協議を行い、島根県教育委員会より平成 19 年 11 月８日付けで回答がなされ、記録保存の措置がとられることとなった。



第５図　１区調査グリッド設定図



第６図　19 年調査区Ｅ－Ｆ土層断面図

第３章　発掘調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法と概要

本遺跡の発掘調査は平成 18 年８月２日から開始した。調査範囲は市道に沿った延べ約 160m の範囲である。調査区はこの間の住宅部分を挟んで下流側を１区、上流側を２区とした。水田の現況は圃場整備によってそれぞれが１枚となっているが、以前は両区とも細長い水田が棚田状に作られていたといわれている。１区の調査グリッドは国土座標を用いず、市道に沿った細長い水田を任意で縦方向に二分し、中央の畦に直交する形で一部を除き 10m 間隔で小グリッドを設定した。グリッド名は下流側から１グリッドから 14 グリッドまで順次番号をつけることとした。（第５図参照）

調査はまず、耕作土を除去したのち区画された畦を残しながら掘り下げを行った。耕作土下の土層は、灰色から青灰色を呈する還元作用を受けた土質が混じった粘質土が何重にも重層し、ところどころに砂層が認められた。調査は、各グリッドごとに縦断及び横断の土層を記録し、この掘出土した遺物はグリッドごとに取上げ、主要な遺物出土地点については出土状況の図化を行った。また、２月７日には遺跡の空中写真撮影を行った。

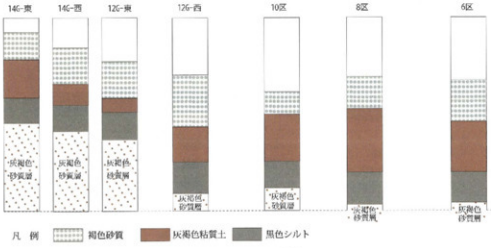
平成 19 年度に入り、年度当初、教育委員会の職員体制が変わったことから調査を一時中断していたが６月２１日には調査指導会を行った。この指導会において、現時点で遺跡の発見根拠となった縄文土器がほとんど出土していないことからトレンチ掘削による遺物包含層の有無の確認をすることとなった。そこで調査区の中央を縦断するようにトレンチを入れたところ、10、12、14 グリッドの黒色シルト層から縄文土器や石錘を検出し、改めて調査を進めることとした。なお、１区では調査区の上段にある水田を借地して排土置き場としていたため、移された排土はかなりの土量となっていた。このため排土置き場の直下に位置する調査区をさらに掘削することは極めて危険と判断し、県文化財課と協議を行い、右半の拡幅工事部分の調査にとどめることとなった。

調査区右半は同年７月１７日から調査を再開したが、掘下げるたびに湧水が発生し、水揚げポンプを使いながらの調査となった。このため壁面が崩落する恐れが生じ、結果として調査面積を縮小せざるを得なかった。精査を行ったところ、遺物は調査区の南半、11、13 グリッドに集中していることが分かった。特に 11 グリッドでは山側から緩やかに下降する自然流路を検出した。流路内やその縁から縄文晩期の土器を伴って流木や何らかの構築部材と見られる板材、トチ、クルミなどの殻を検出した。

また、東北日本の亀ヶ岡系土器と見られる漆塗りの彩文土器が２種出土しており、東北日本との文化交流に関して注目される遺物となった。調査区右半の下手側では黒色シルト層からも遺物は認められず、平成１９年７月２７日右半の完掘写真撮影を行って１区の現地調査を終了した。

２区は市道新市坂本口線に沿った細長い水田で、市道に面した水田のおよそ半分が調査対象となっている。調査は１区の現地調査が終盤に近づいた平成１９年７月２４日から開始した。まず道路拡張部分の水田耕作土を除去したのち、調査区の上手側から A、B、C 地点の三箇所にトレンチを設定し、層位と遺物有無の確認を行った。耕作土除去面から道路面までの比高差は上手側が約 1.0 m、下手が 2.1 m である。三箇所とも重機で掘削を行ったがトレンチ A では上面から 1.3 m、他のトレンチでは道路面から約 2.2 m のところで湧水が発生し、壁面が崩落しだした。トレンチ B、C では河川の堆積物と見られる砂層やシルト層を確認したが遺物はトレンチ B から流れ込みと見られる土師質の土器を数点検出したのみであった。この状況でさらに掘り下げた場合、壁面の崩落が予

第７図　１区全体図（1/300）



第８図　柱状図

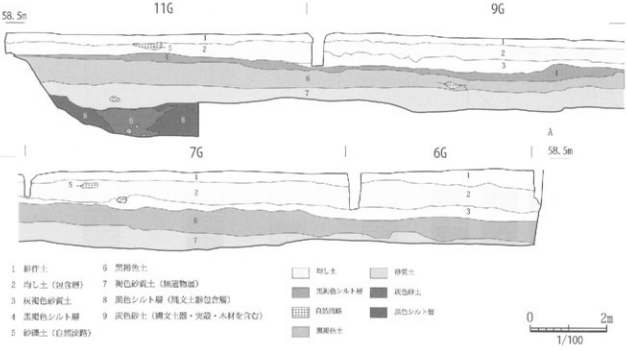
想されることから７月３０日、県文化財課と協議を行い、２区については遺構や遺構に伴う遺物がないことを確認し、トレンチの状況をデジタルカメラで記録して同年７月３１日調査を終了した。

なお、本遺跡の範囲外ではあるが、１区と２区の中間にある住宅部分についてもトレンチを設定した。この結果、相当量の客土によって盛り土されていることが確認された。従来の土との入れ替えが行われた可能性も考えられ、客土にはコンクリート材などの廃棄物とともに弥生時代前期の土器や器台の破片も混じっていた。おそらくごく近くから持ち込まれた客土かと思われる。この客土の下層では遺物は確認されなかったことを付記しておきたい。

第２節　層序

１区の層序

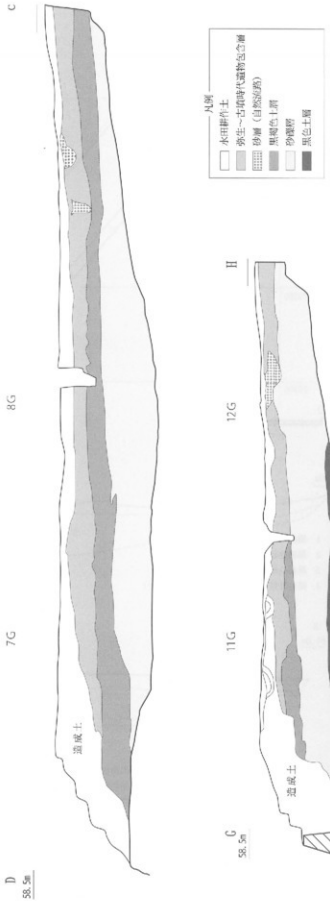
本調査区では面的に土壌の堆積状況に著しい変化が見られ、土層の区分には困難を極めた。調査時点では細分した土層図を作成していたが、結果として後述する水路跡以外は明確な遺構の存在は確認できなかったことから細分した土層の図化は省略することとした。基本層序は上層から１層が近代の水田耕作土、２層は圃場整備の際の均し土で、弥生時代中期から古代の遺物を含む包含層である。２層の上層では須恵器と陶磁器が入り混じって出土している。また、下層では土師器の壷が完形で出土した。遺物が包含された土質は粘質で土壌中の鉄分、マンガンの還元作用によって生じる青灰色のグライ土に、酸化作用を受けたと見られる黄橙色や灰色の土壌が斑点状に混じることから、停滞水の影響を受けたものと考えられた。また、この層中では、南東から南西に向かう帯状の砂層が幾筋か見られた。幅は一定でなく豪雨などの影響による自然流路と考えられるが、土層の重り具合から流路が形成された面に遺構が存在した可能性は低く、短期間に水が流れた跡と考えられた。３層は灰褐色砂質土。４層に黒褐色シルトが見られ、弥生中期以前に一帯が水の影響を受けたことが窺われる。６層の黒褐色粘質土、７層の褐色砂質土をはさんで。８層は縄文後期から晩期の遺物を含む黒色シルト層が堆積するが９グリッドから北よりの層には遺物の包含は確認されなかった。

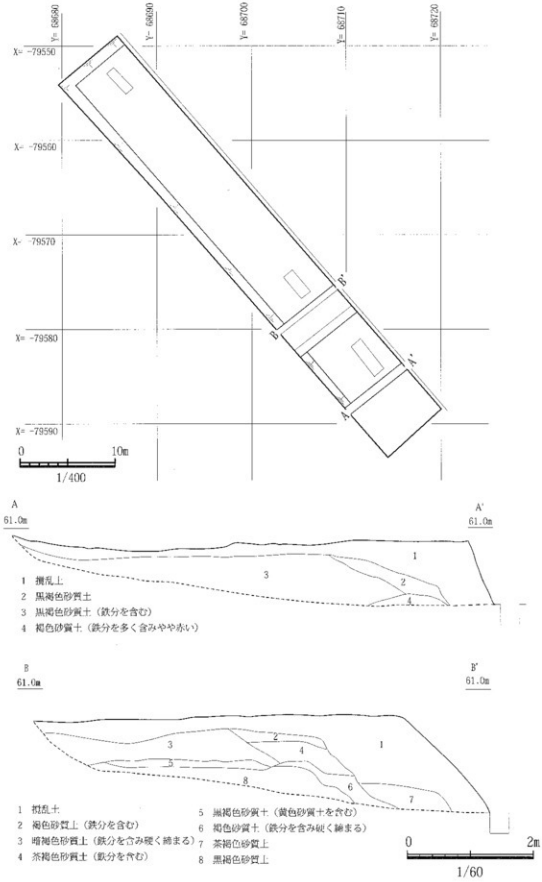


第９図　１区Ａ－Ａ'上層断面図

２区の層序

２区の基本層序は１区と状況が違い、耕作土の下から下層に向かって褐色粘質土→褐灰色砂質土→灰褐色砂質土→褐色粘質土→褐灰色砂質土に褐色粘質土が混じった土質→暗灰色～黒色シルト層の順となっている。平成１５年１２月に行った試掘調査では、湧水が少なく、このシルト層をおよそ４０ｃｍ掘り下げることができ、層中から流れ込みと見られる弥生中期から古墳時代初頭の土器と縄文土器の小片を若干検出した。一方、今回の調査では黒色シルト層に至る前から湧水が発生したため僅かに土師器を検出したのみであった。試掘調査の時点でも検出した土器には時期幅があり、いずれも小片であるため、遺構に伴う遺物ではないと判断して島根県文化財課と協議のうえ調査を終了した。





第１１図　２区平面図とＡ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'土層断面図

第3節　検出した遺構と出土遺物

1．遺構

平成18年度の調査では、落ち込みと溝跡、土器溜りを検出した。しかし、後述するように検出面の土質の性格を検討した結果、落ち込みについては断面状況が不明瞭であり、遺構と判断するには至らず図化は行わなかった。したがって遺構は土器溜りと平成19年度の調査から検出した水路跡のみとした。以下、その詳細について述べる。

平成18年度に行った調査で第2層を掘り下げたところ、12グリッドから1列に並ぶ3箇所の落ち込みを検出した。落ち込みには耕作土下約40cmあたりから黒褐色粘質土が充填されていた。平面形は不整円形で、径はいずれも約30cmを測る。落ち込みの間隔は85～95cmを測る。また、両端の落ち込みからほぼ直角の方向1.7 mの地点でも径48～70cmの落ち込みを検出した。一見するとコの字形となり、柱穴のようであるが土層状況で述べたように検出面があまりにも不均質な粘質土層中にあり、自然堆積した地形に掘り込まれたものとは考えにくい。この調査区が棚田状の水田を圃場整備した水田であることを考えるならばその際に生じた落ち込みと考えられる。

12グリッドでは、この落ち込み部の北よりからT字状と不整円形状の溝跡を検出した。T字状の溝跡は最大長3.5 m、最大幅0.26 m、深さは1.5～7.5cmを図る。一方、不整円形状の溝跡は片方が10グリッドに伸びていて長さ約10.2 m、幅15～55cmを測る。10グリッドでは溝が二又に分かれるなど企画性がほとんど見られなかった。溝の深さも6～22.3cmと幅があり、二つの溝跡にはいずれも黒褐色度が堆積していた。何らかの区画のための溝にしては浅く、不整円形状の溝跡については10グリッドで形状が乱れており、深さも一定でないため人為的に設けられた溝の可能性は低いと考えられ、性格は不明である。

自然流路については、調査区の南東端から南西に向かってほぼまっすぐに流れていたことが確認された。12グリッドのあたりで二筋に分かれ、流路の幅は25～85cm、深さは概ね5～40cmを測る。流路の堆積土には土師器や須恵器の小片が混じる。自然流路はいずれも第2層から検出しており、近世以降短期間のうちに形成されたものと考えられる。

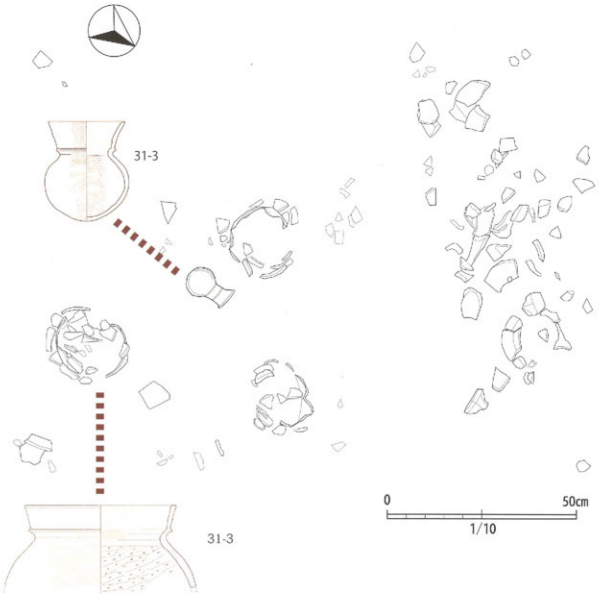
土器溜り

土器溜りは12グリッドの北端から検出した。層位は第2層にあたるが12、10グリッドから検出した溝よりわずかに下層に位置する。約5個体分の土師器の破片がまとまって集合し、さらに土師器の小型壺が1点完形で出土した。このような場合、何らかの遺構面あるいは土層観察用の壁面に生活面の痕跡が認められるが今回の調査では認められなかった。土器溜りの上層の土層に著しい乱れがあることと関連があると思われるが意図的に置かれた可能性は低いと考えられ、詳細は不明である。なお、13グリッドでも3.6×2.2 mの範囲で土器の分布面を確認した。土器の多くは小片で黒褐色土と褐灰色土が入り混じった攪乱土から出土している。圃場整備の際に近くから移動したものと考えられる。

水路跡

平成19年度に行った調査では、11グリッドの表土下約2.3 mから水路跡を検出した。調査面積が狭かったため確認した長さは3 mに留まったが検出状況からこの水路は山際から久野川の方向に流れることが推定される。水路の右岸側は縄文晩期の土器を含む黒色土、左岸側は黒色から青黒

色のシルト層で、上幅約 2.2 m、下幅 1.3 mで深さは約 90cmである。水路には黄灰色砂礫が堆積し、礫砂層にはクリの木と見られる径 17cmの幹や木の小枝、トチ、クルミの実殻が混じっていた。なお水路の左岸側は幾度かの氾濫を窺わせる貫入状の土層の乱れが認められた。



第 12 図　12 グリッド土器溜り平面図

写真 1　12 グリッド土器溜り近景

写真 2　13 グリッド土器溜り　北東より

第13図　13グリッド土器溜り平面図

2．遺物

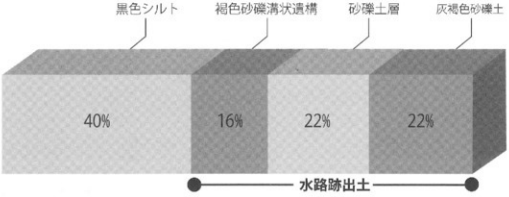
万場１遺跡では、耕作土を取り除いたのち、第２層の掘り下げを開始した。開始直後から弥生土器や土師器などが出土し出したが遺構に伴うものではなかったため、これらの土器は一括して取上げを行った。以下、２箇年に渡って行った調査より縄文土器から順次概要を記す。

縄文土器

縄文土器のほとんどは、平成19年度に１区の11、13グリッドを掘り下げた際に、検出した水路跡内（第６図16層）やその周辺の黒色の微砂及びシルト層（第６図15層）から出土した。水路跡内からは後期の有文土器もわずかに検出したが、出土土器は晩期を主体としたものである。

①有文・精製土器

第15図1,2は、縁帯文土器である。1は、波状口縁の深鉢で口縁端部の内外面の両端を肥厚させる。口唇部上面に２条の凹線を巡らせ、外面口端部に縄目様の文様を施す。２は、口縁波頭部を肥厚させ外面中ほどに凹線を巡らせて文様帯を区画している。下部には縄目様の文様を施す。1,2とも布勢式と考えられる。３は、深鉢の胴部を縦方向に細線を施し、幅広の細線の間に縄文が施される。4には、J字文が施される。中津Ⅱ式と考えられる。5は、深鉢と見られる。やや深めの沈線を入れた後により組の回転により縄文を施す。沈線の文様に類例が乏しく時期は不明である。6は、粗製深鉢の口縁端部を斜め下方に傾斜させてわずかに肥厚し、上面に２条の凹線を巡らせた後ナデを施している。彦崎ＫⅠ式と見られる。7は深鉢の肩部であるが縁帯文土器であろう。明瞭な３条凹線が施される。布勢式から崎ヶ鼻式の範疇と見られる。9も縁帯文土器で、肥厚した口縁端部の上面に逆Ｓ字状の文様を浮き彫り状に施す。内外面ともミガキが施された有文土器はこの１点のみである。権現山式と見られる。10、11には、結節縄文が施される。9と同様、権現山式と見られる。12は、口縁から肩部にかけての深鉢である。肩部から胴部にかけて縄文が施され、頸部はナデ調整で施文帯が区画される。崎ヶ鼻式併行であろう。13は、底の浅い壺であろうか。胴部外面に二枚貝の腹縁による施文が施される。14、15は、無文の精製土器で14が壺、15は浅鉢である。



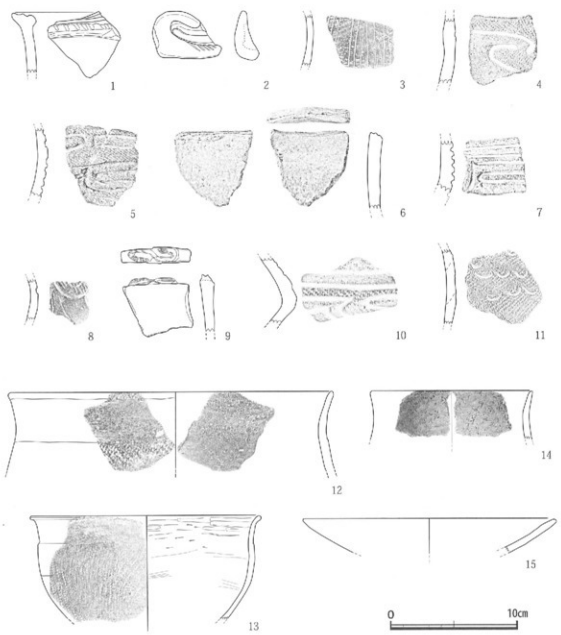
第14図　層位別縄文土器出土の割合

②突帯文土器

第16図～19図は突帯文土器である。土器のほとんどは14グリッドの水路跡及びその周辺の黒色シルト層から出土しているがわずかに1グリッドの灰褐色砂礫土からも出土している。なお、この2個所の土層や時期の前後関係については確認できなかった。出土した突帯文土器の突帯と刻み目の状況から次のように分類した。

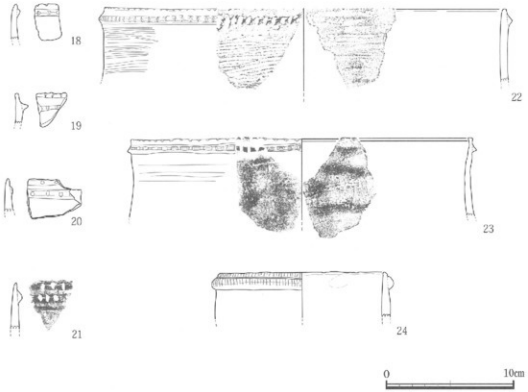
A類．口唇と突帯の両方に刻み目をもつもの。(第16・17図18～24)

口唇のわずか下方に突帯を貼付け、口唇と突帯の両方に刻みを入れる深鉢で、口唇の刻み目を上方から入れるタイプである。器形は1のみが肩部から緩やかに外反しながら口縁部が立ち上がるもので、他は全て砲弾型を呈する。2、11、12は内面がケズリのちナデ、外面には横方向のカキ目が施される。5は、器厚が4㎜と薄く、内面にはハケ目、外面にカキ目が施される。4、8、9、10の突帯下部には鋸歯文状の細線が刻まれる。



第15図　1区出土縄文土器（有文・粗製土器）実測図　S=1/3

第16図　1区出土縄文土器（突帯文土器）実測図　A類（1）　S=1/3



第 17 図　1 区出土縄文土器（突帯文土器）実測図　A 類（2）S=1/3

20、21 は口唇の刻み目を前方（横）から入れるもので、20 は刻み目でなく丸棒状の刺突を施す。22 ～ 24 は口唇の刻み目を斜め方向から入れる。24 は突帯を口縁の先端に貼り付けた後、口唇と突帯の突出部との間に線刻を施して突出部を区画している。

B 類．口唇の下部に突帯を貼り付け、突帯のみに刻み目をもつもの。（第 18 図 25 ～ 38）

小片が目立つが突帯を口唇の下部に貼付け、突帯のみに刻み目をもつものである。器形は 25、26 が、頸部がわずかに外傾して立ち上がるもので、他は砲弾型と見られる。26 の外面には煤が多量に付着する。29、32 ～ 34 は口縁端部を外方に屈曲させる。

C 類．胴部に突帯を貼り付けるもの。（第 19 図 39 ～ 41）

D 類．口唇の下部に突帯を貼り付けるが、口唇、突帯とも刻み目を持たないもの。（第 19 図 42）

E 類．刻み目の突帯が口縁端部に接して付けられるもの。（第 19 図 43、44）

43 は突帯を口唇の上端に貼付け、突帯の状面を口唇内面に沿って面取りをする。44 は突帯を口唇上にかぶせるように貼付け、口縁端部が屈曲する印象を受ける。

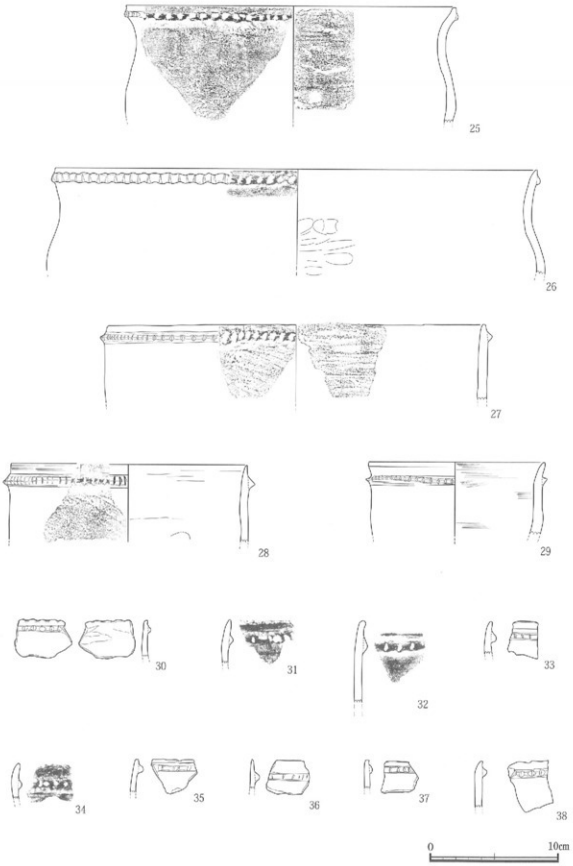
F 類．突帯が口縁端部に接して付けられ、無文のもの。（第 19 図 45、46）

45 は突帯の両端を内外に拡張し、端部を丸める。体部内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。46 も突帯の両端を内外に拡張するが突帯上面が平らに調整される。

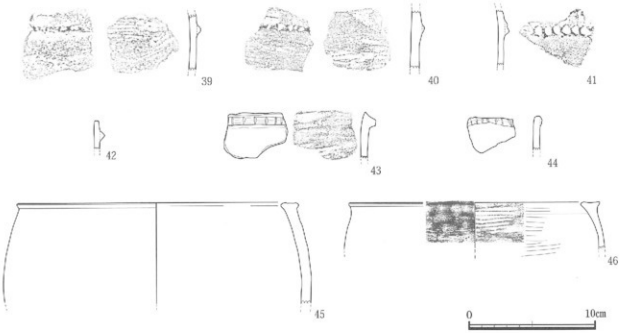
以上述べた突帯文土器のうち A 類は、晩期Ⅳ期。B、C、D 類については晩期Ⅴ期。E、F 類については晩期Ⅵ期の範疇に収まると考えられる。（晩期の編年は、「第 16 回中四国縄文研究会　縄文時代晩期の山陰地方」第 16 回中四国縄文研究会烏取実行委員会　2005 年による）

③口縁に刻み目を有するもの

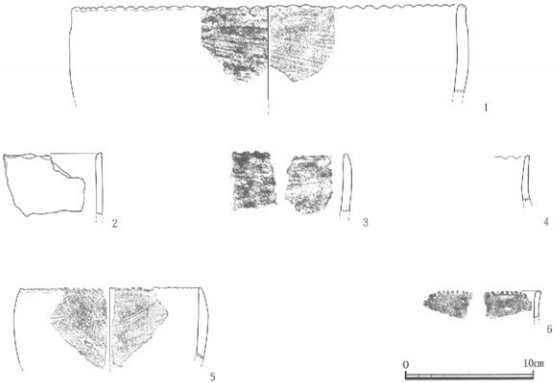
第 20 図 1 ～ 4 は粗製深鉢の口縁端部に刻み目をもつものである。1 ～ 4 は口縁端部の上方から施文され、O 字状を呈する刻み目を施す。この形の刻み目は、晩期Ⅲ期の古段階と考えられる。残りの 5・6 にはⅤ字状の刻み目が施され、晩期Ⅲ期の新段階と考えられる。



第18図　1区出土縄文土器（突帯文土器）実測図　B類　S=1/3



第19図　1区出土縄文土器（突帯文土器）実測図　C.D.E.F 類　S =1/3



1～4　0字状の刻み目　　5・6　V字状の刻み目

第20図　1区出土縄文土器（口縁に刻み目を持つ土器）実測図　S =1/3

④孔列土器

万場１遺跡から出土した孔列土器には様々なバリエーションが認められるが、遺物数が少ないため種類別に列挙するに留めたい。

a. 口縁端部内面に竹管文が巡るもの。(第 21 図 1)

b. 口唇部に刻み目を施し、口端部内面には半竹様の工具で列点を押引きするもの。(第 21 図 2)

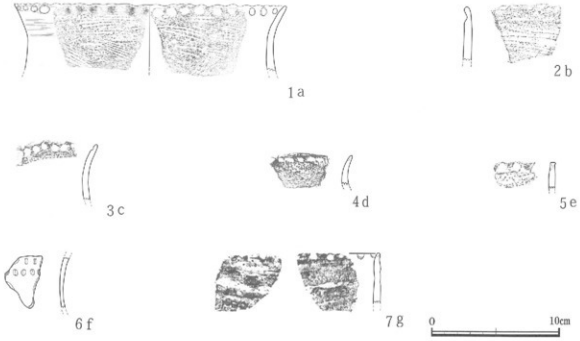
c. 口縁端部内面に列点が巡るもの。(第 21 図 3)

d. 口縁端部内面の口唇際に列点が巡るもの。(第 21 図 4)

e. 口縁端部内面に列点を施し、外面の口唇際にも押し引状の列点が巡るもの。(第 21 図 5)

f. 口縁端部内面に列点が少なくとも２列認められるもの。(第 21 図 6)

g. 口唇部に上方から列点を施したもの。(第 21 図 7)



第 21 図　１区出土縄文土器（孔列土器）実測図 S=1/3

⑤彩文土器（第 22 図）

彩文土器は、いずれも８層の黒色シルトから小片を含め４点が出土した。第 22 図１は水路跡の脇から出土したもので、壺形土器の口頸部である。口径は 13.5cm を測る。頸部はわずかに内傾して立ち上がる。口唇部は面取りが施され口縁下部に厚みをもたせて外方に屈曲する。調整は内外面ともミガキであるが、内面の肩部にかかる部位はナデとなる。胎土は、黒色の微砂粒に白色の微砂粒が混じる。土器様式では器形から北部九州系の夜臼Ⅰ～Ⅱａ式と考えられる。

外面の施文は、下地に黒漆を塗布した後、逆Ｃ字状の文様が現れるように文様以外の部分に赤漆が塗られている。口唇部にも点々と赤漆が付着する。内面にも口縁から頸部の中ほどにかけて赤漆が塗られている。内外面に塗られた赤漆は、ハケで塗られたような痕が認められる。

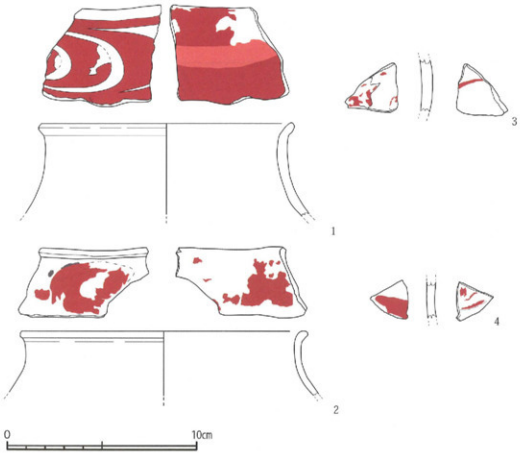
２は、１に比べて頸部が短く、器厚の薄いもので、１と同様、夜臼Ⅰ～Ⅱａ式の壺形土器である。口径は 15.2cm を測る。調整は内外面ともミガキであるが内面の一部にはミガキの粗い部分が見られる。肩部にかかる部位はナデとなる。胎土は、褐色の微砂粒に微細な長石が混じる。１のように外面全体に下地となる黒漆は塗られていない。施文は、一見すると楕円状の文様が赤漆で施文され

るが、文様の形態については赤漆が剥落しているため不明である。なお、施文の周囲の一部に黒漆が付着しており、施文部分のみ下地に黒漆が塗られていることがわかる。内面は、1と同様にハケ状の工具で赤色顔料が塗布される。

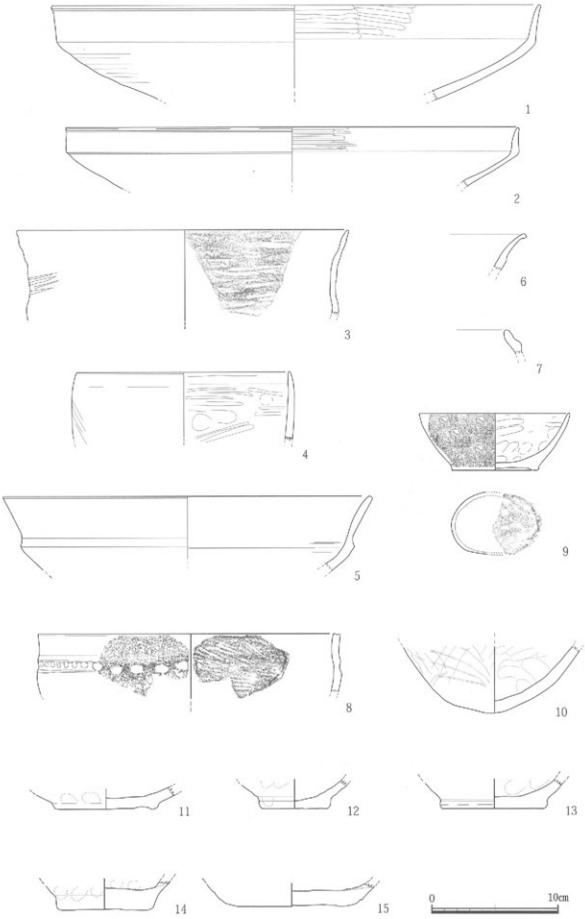
3,4は、いずれも小片である。2点とも内面に赤色顔料の塗布が認められることから、頸部の一部と考えられる

⑥その他の縄文土器（第23図）

第23図1、2は沢田式併行の浅鉢である。口縁の先端部を丸めて、わずかに外方に曲げ、稜をつくる。胎土に微細な石英を含み、色調は黒褐色を呈する。3は頸部がわずかに内傾する深鉢で外面全体に煤が付着する。5、6は浅鉢である。5は内外面ともミガキ調整され肩部に稜をもつ長頸浅鉢で、晩期Ⅲ期と見られる。6も肩に稜をもつ小形の浅鉢であるが時期はやや新しく晩期Ⅵ期と見られる。8は、粗製の深鉢で肩部に稜をもち、稜の下部に指頭の圧痕を一条巡らす。晩期Ⅲ～Ⅳ期と見られる。9は、平面形が楕円形の小形の浅鉢である。低部は外周を残して全面がわずかに上げ底となる。長軸側の口縁近くに径2mmの穿孔が認められる。10は深鉢と見られる丸底の底部である。外面調整はナデであるが一部に棒状工具による細線痕が認められる。11,12,13は浅鉢の底部で12、13は高台が付く。特に13は黒色磨研で丁寧なつくりとなっている。14は深鉢の底部である。14、15とも後期の範疇に入る可能性が高い。



第22図　彩文土器実測図　S=1/2



第23図　1区出土その他の縄文土器実測図 S=1/3

石器　（第 24・25 図）

石器は、平成 18 年度に行った弥生中期後半から古墳時代前半までの包含層と 19 年度に行った縄文晩期の水路跡周辺及びその排土中から出土した。これらの遺物についても一括して記す。

1 ～ 8 が縄文晩期の水路跡周辺とその排土中から出土したものであるが、調査面積が限定されていたため点数は少なかった。1 ～ 8 のように石器のほとんどが打ち欠きの石錘である。第 25 図 1 の凹基無茎の石鏃は排土中から出土したもので 1 点と少ない。また、図化はしていないが磨石が 2 点出土している。2 は黒曜石、3 が瑪瑙の剥片である。4、5、6 は弥生中期後半から古墳時代前半までの遺物とともに出土した砥石である。いずれも複数面が砥面に使われている。4、5 には溝状の削痕が認められる。7、8 は砂岩の紡錘車である。どちらも側面に鋸歯文状の細線が刻まれる。

水路跡及び水路縁出土遺物　（第 26 図）

木製品は、全て水路跡及び水路縁の堆積土である黒色シルト層から出土した。いずれも加工痕をもつものである。1 は、針葉樹の板材で、何らかの施設に使われた部材と見られる。全長 117.8㎝、幅 17.8㎝、厚さは最大で 2.3㎝を測る。側面の片側に幅 9.2 ～ 14.8㎝、深さ 4.8㎝の刳り込みが見られる。また、平坦面の 8 箇所に、楕円もしくは長方形の貫通口の痕が確認される。2 は長さ 50.5㎝、幅 12.1㎝、厚さ 2.3㎝を測る針葉樹の板材である。3 は長さ 29.5㎝、幅 16.5㎝、厚さ 3.6㎝を測る広葉樹の板目材である。片方は厚さが幾分薄くなり、欠損する。もう一方の片側側面は切断された可能性がある。4 は側面に加工痕をもつ広葉樹の芯持ち材である。法量は、長さ 43.0㎝、径は概ね 11.3㎝を測る。上下側とも折損しており、部材かどうかは不明であるが、中央よりやや下部と下方に方形の穿孔状の孔が見られる。このほか、水路跡内からはトチの実殻が相当量出土し、クリの実殻も出土した。

弥生土器　（第 27・28 図）

平成 18 年度の調査で出土した土器は、弥生中期後半から近世陶磁器までがある。割合としては古墳時代初頭から前期前半のものが最も多い。以下、器種ごとに時期を追って記すこととする。

第 27 図　1 ～ 6 は甕、壺である。1、2、は口唇の両端をわずかに拡張し、1 条から 2 条の凹線を入れる。また、頸部に突帯を貼付け、突帯に刻みを施す。複合口縁というより、くり上げ口縁状を呈する。3 も頸部に突帯を貼付け、突帯に刻みを入れるが口縁の拡張部は内傾せず上方に立ち上がる。時期としては 1、2 が弥生中期末頃と見られる。5、6 は壺である。5 は器厚の厚い口縁をまっすぐに立上げ端部を丸く納める。口縁外周にごく浅い凹線を 3 条巡らす。弥生後期前葉と見られ、同時期のもので図化できた土器はこの 1 点のみであった。6 は薄手の複合口縁をもつ壺で肩部をくの字状に屈曲させて稜を作り、口縁は逆ハの字状に大きく外方する。後期末葉と見られる。7 ～ 14 は甕の底部である。7、8、9、14 が体部、底面とも外面がミガキで他はミガキのちナデとなる。10 ～ 12 の底部はわずかに上げ底となる。これらの底部はいずれも中期後半と見られる。第 28 図 1 は甕の胴部で外面に 2 段の連続列点文を巡らす。内面の胴上半部は縦方向にハケ目のちナデが施される。2、3 は高坏の脚部と坏部である。2 は脚部の外面に凹線を 9 条巡らす。3 は体部を逆ハの字状に立上げ、口縁両端部を拡張させ、丸く納める。これらも中期後半であろう。

土師器　（第 29 図～第 32 図）

本遺跡から出土した土器の中で点数としては最も割合が高かった。また、弥生土器も含めて大き目の破片が出土していることは注目される。破面には摩滅が少ないことから元位置よりそれほど移動していないことが窺える。なお、出土した甕の調整のほとんどは内面の肩部以下がケズリ、口縁内面はナデで外面はハケ目が施される。

第 29 図、第 30 図は、複合口縁の甕、壷である。1、4 は口唇の内側をわずかに窪めて段をつくっている。2.3 は、口縁端部を外方に曲げる。2、3、4 は胴部が倒卵形になると思われるが 1 は球形になると見られ、やや時期差があるかもしれない。5、6 は口縁が大きく外傾する壷で頸部には羽状文が施される。6 の口唇部内面に窪みが巡る。

第 30 図 1 は厚めの口縁で口唇の内側をわずかに窪める。しっかりした稜をもち、肩部に 3 条の沈線を施す。2 は口唇部上面を平坦に調整し、体上部外面にハケ目を入れた後、肩部の一部に刃物様の工具で斜線が刺突される。3 は完形で出土した丸底壷である。低部の内面は丁寧なナデで胴部外面もミガキの後ハケ、ナデが施され、丁寧なつくりである。4 はの口唇部上面の中央に凹線が 1 条巡り、端部外面には櫛状の圧痕が見られる。第 29 図、第 30 図は古墳時代初頭から前半と考えられる。第 31 図と第 32 図 1 ～ 4 は単純口縁の甕である。31 図 1 ～ 8 は、口縁がくの字状に外傾する。このうち 1 は、頸部の器高と口縁端部を厚くし、端部を丸める。3 も分厚い頸部をもつが口縁に向かってすぼまる。口縁内面に緩い段を設ける。

第 31 図 9、10 と第 32 図 1 は口縁が外傾してまっすぐに立ち上がる。口縁は口縁を平坦に調整するもの（第 31 図 9)、先端をすぼめて丸く納めるもの（第 32 図 1) がある。第 32 図 2、3、4 は口縁が内湾ぎみに外傾する。また、口唇部に調整がなされ、2 は口唇が内側に向かって斜行し、端部を拡張する。また、肩部に 13 条以上の平行沈線が巡る。3 は口唇中央に凹線が巡り、4 は口唇部外側を拡張する。第 32 図 5 ～ 14 は甕以外の土師器である。5 は有段口縁小型鉢で口径は 20 ｃｍを測る。口縁部下方内面を肥厚させて段をつくる。調整は内面がミガキ、外面はミガキのちナデで内外面とも暗赤色の顔料が塗布される。布留 1 式に併行し、搬入品の可能性も考えられる。6、7 は直口壷としておく。7 は、胴部から口縁外面にかけて煤が付着する。8、9 は、小型丸底壷であるが 10 も同一器種であろう。8 の外面には櫛目状の状痕が認められる。以下、11、12 は　坏。13 は碗、14 は小型の坏である。11 は内面全体にハケ目状の状痕が残る。12、14 はミニチュア土器の可能性もある。

以上述べた土師器のうち、第 31 図 1 や 3 のように器壁の厚い甕は新しくなると思われるが概ね、古墳時代初頭から前半代のものと考えられる。

鼓型器台、高坏、低脚坏　（第 33 図）

1 ～ 4 は鼓型器台の受け部である。1 は受け部内外面とも丁寧なナデ、筒部の上下に明瞭な稜をもつ。内面はケズリとなる。2 は、厚めの器厚で外面は横方向のミガキの後、縦方向にもミガキが入る。4 は、受け部が 1 ～ 3 に比べてさらに広がる。受け部と台部の間隔も狭く時期差によるものと思われる。外面はナデのち縦方向のミガキを施す。5 ～ 10 は高坏である。5 は坏部の低部が内湾した後斜め外方に直線ぎみに立ち上がる。6 は体部が内湾して立ち上がり、口縁端部が外反する。やや深めの坏部である。8 は脚部のみ完形で出土した。脚底部内面に粗いハケ目痕が残る。脚部外面は縦方向のミガキを施す。11 ～ 14 は低脚坏である。11 は坏部は浅めで緩く内湾して立ち上がり、

口縁端部は平坦とする。坏部外面に放射状のミガキが認められる。12はやや深めの坏部で低脚部の内面内側に「ノ」の字状の連続刺突文が巡る。時期についても古墳時代前半と考えられる。

須恵器　（第34図）

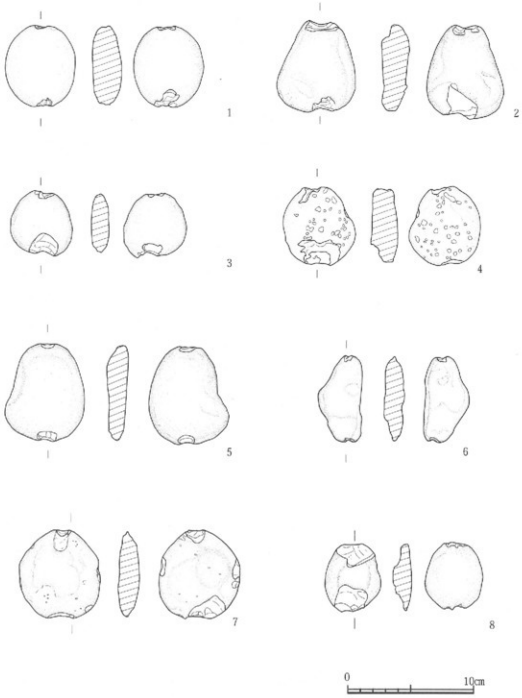
第34図は須恵器をまとめた。小片が多いため図化したものはそう多くはない。1～8は坏蓋である。1は天井部全面がヘラケズリで肩部に沈線が2条入り、口縁は肩部から下垂する。2、3は天井部がヘラ削りで体部は肩部から屈曲して下降する。肩部には凹線による稜をつくる。2はほぼ完形で坏に転用され、内面には漆が残存する。1が出雲3期、2、3は出雲4期と見られる。5は天井部がヘラケズリのちナデ、肩部から体部は回転ナデ。口径は12.4ｃｍとやや小型になり、出雲6期になろう。7、8は、輪状つまみの坏蓋である。8は一見すると高台付坏の底部に見える輪状つまみで、つまみの径は7.2ｃｍを測る。9も同様に輪状つまみをもつものでいずれも出雲6～7期である。10～16は、坏身である。10は身全体が薄手でかえりはわずかに内傾して立ち上がる。出雲3～4期と見られる。12は重ね合わせて焼成されたと見られ、上器が重なった部分以外に自然釉がかかる。15、16は、かえりの又部が大きく開くもので特徴的な須恵器といえる。特に16は、口縁部が分厚く在地で生産された可能性も窺える。11～14が出雲5期、15、16は、出雲6期と考えられる。17～22は、高坏である。このうち17、18は脚基部が残存するのみであるが脚部が外傾せずにほぼまっすぐ下降すると見られることから長脚高坏の可能性もある。すかしはいずれも2方向で17は三角形、18は方形である。出雲3～4期と見られる。19は、長脚高坏の脚基部で3方に切れ込みが入る。出雲3～4期であろう。20～22は、低脚高坏である。20は脚部のすかしが省略され、2方向に切れ込みが入る。脚端部は外面が面取りされ、上端部が突出する。出雲6期であろう。21は2方向に方形の透かしが入るもので出雲4期と見られる。

土製品　（第35図）

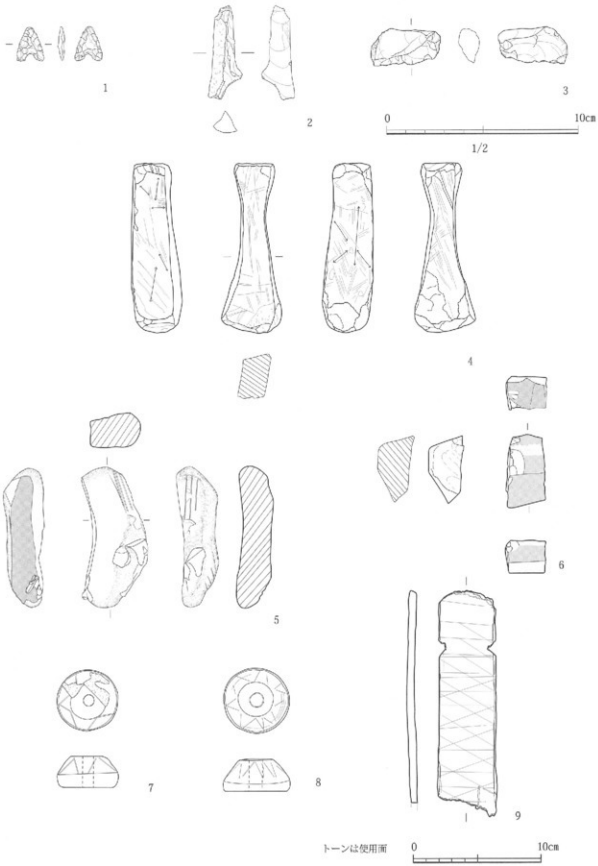
1、2は、土製支脚、3は、土製支脚の支え部先端である。1は、外面に板状工具の調整痕が見られる。胎土に長石を多く含む。4～8は、甑の把手である。つまみ窪み部の最大径が4ｃｍを超えるもの(5.6)。3ｃｍ前後を測るもの(4.8)。形状が扁平なもの(7)がある。10は、竈の焚き口近くの破片であろうか。11は、断定できないが竈の天井部近くの破片かと思われる。外面に板状工具のナデ痕が見られる。同様に12も竈の基部の可能性が考えられる。

その他の出土遺物　（第36図）

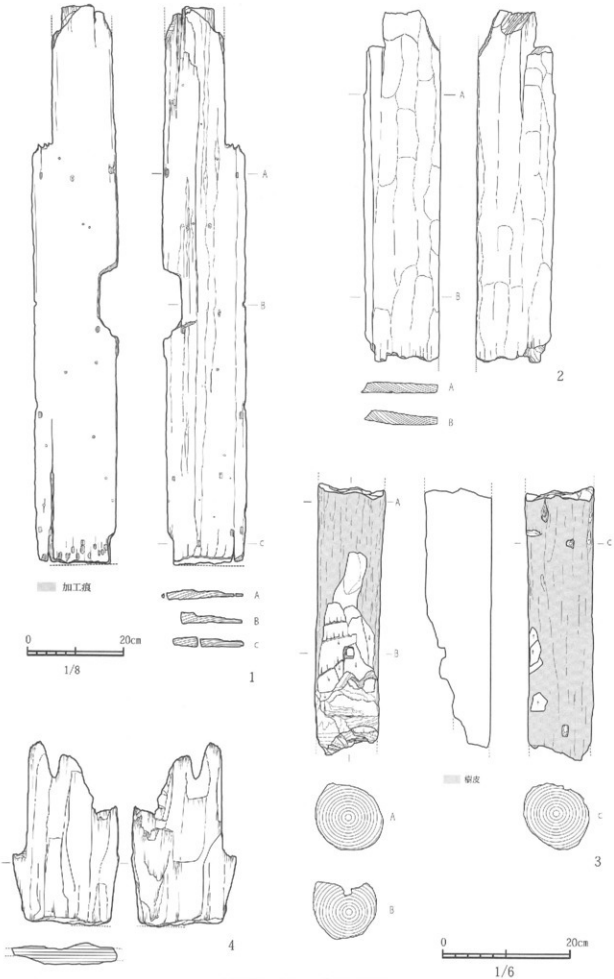
1は、柱状高台皿の高台部である。高台底部は凸レンズ状に膨らむ。皿部は大きく外傾して拡張する。2.3は、高台付坏である。2は、高台がハの字状に開く。体部は碗状に内湾して立ち上がるものと思われる。4は、底部に糸切痕をもつ坏である。体部は逆ハの字状に外傾して直線的に立ち上がるものであろう。これらは、いずれも土師質であり11～12世紀頃のものと見られる。5は、白磁の碗で、底面と体部、高台の外面に線文が描かれる。19世紀前半頃のものと見られる。6は、陶器の片口鉢である。内面のみに釉がかかり、外面全体に煤が付着する。明治後半頃のものであろうか。7は、磁着力をもたない鉄滓の破片である。形状が平円状か碗形になるものと見られる。鍛冶滓と考えられる。



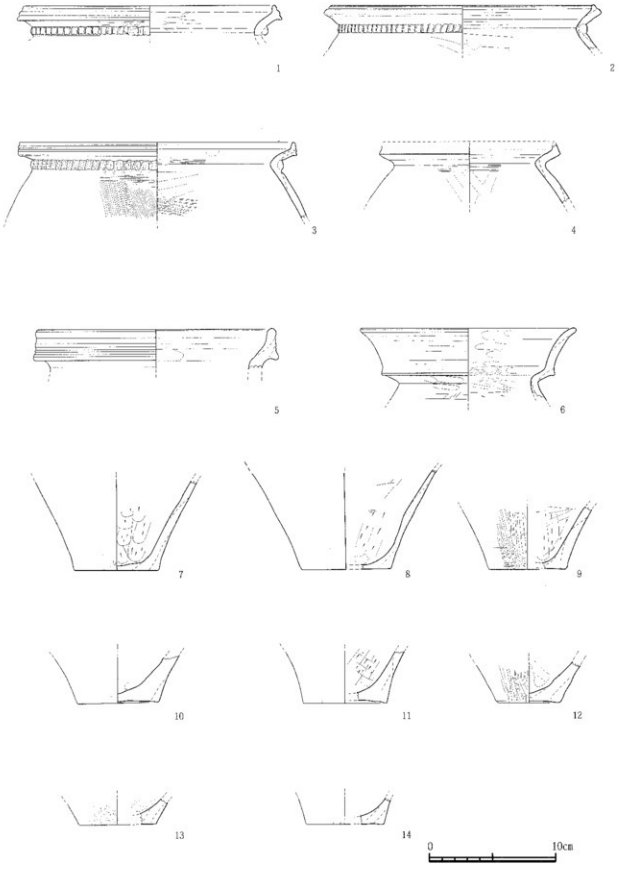
第24図　1区出土石鏃実測図　S=1/3



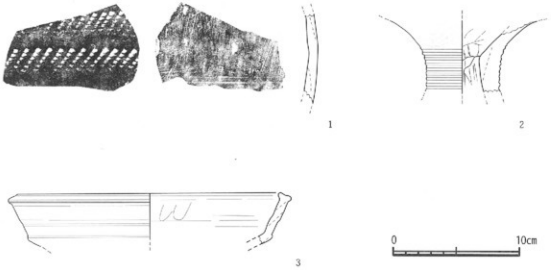
第 25 図　1 区出土石製品・木器実測図 S=1/3



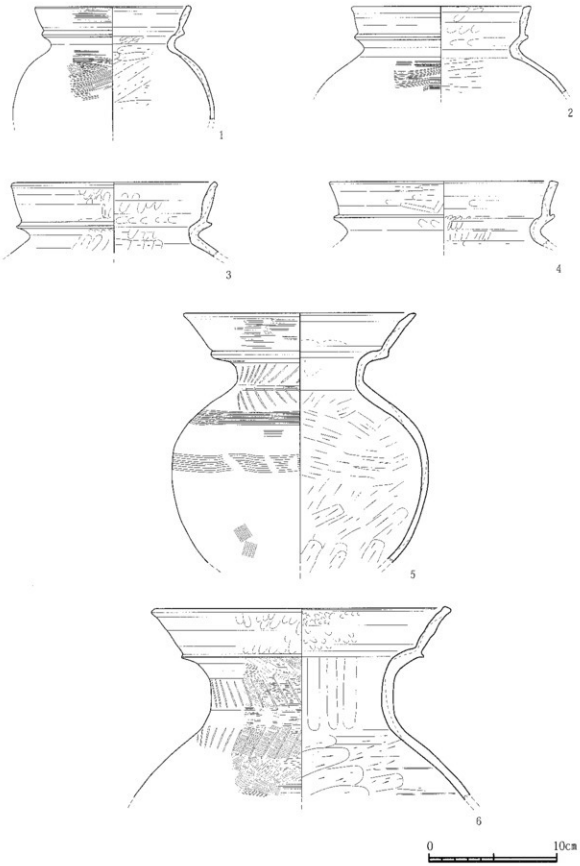
第 26 図　1 区出土木質遺物実測図



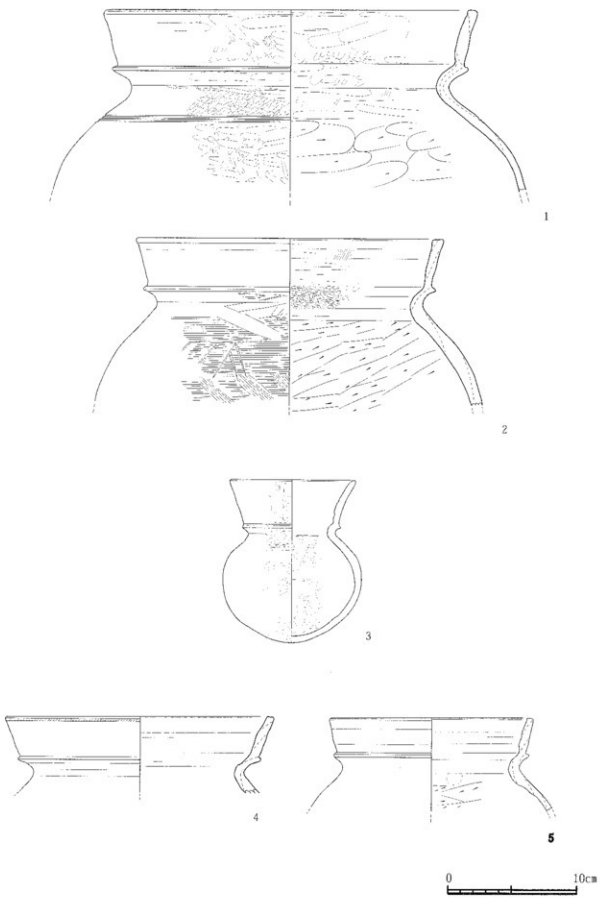
第27図　1区出土弥生土器実測図1　S=1/3



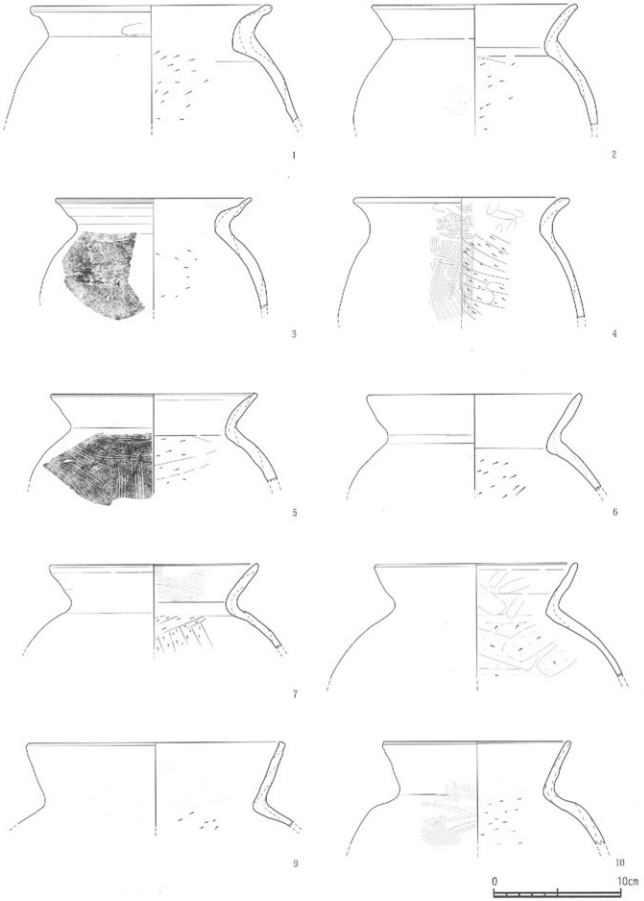
第28図　I区出土弥生土器実測図2　S=1/3



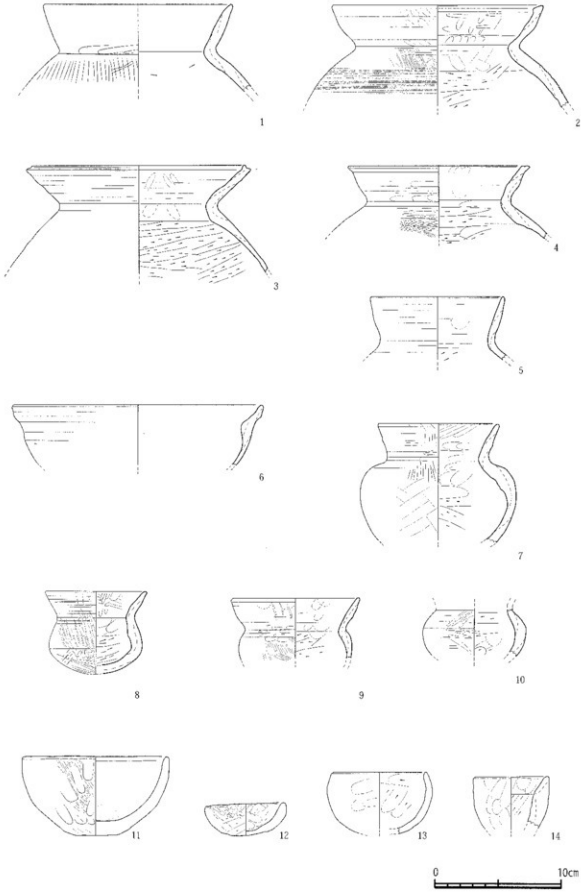
第 29 図　1 区出土土師器（複合口縁）実測図 1　S=1/3



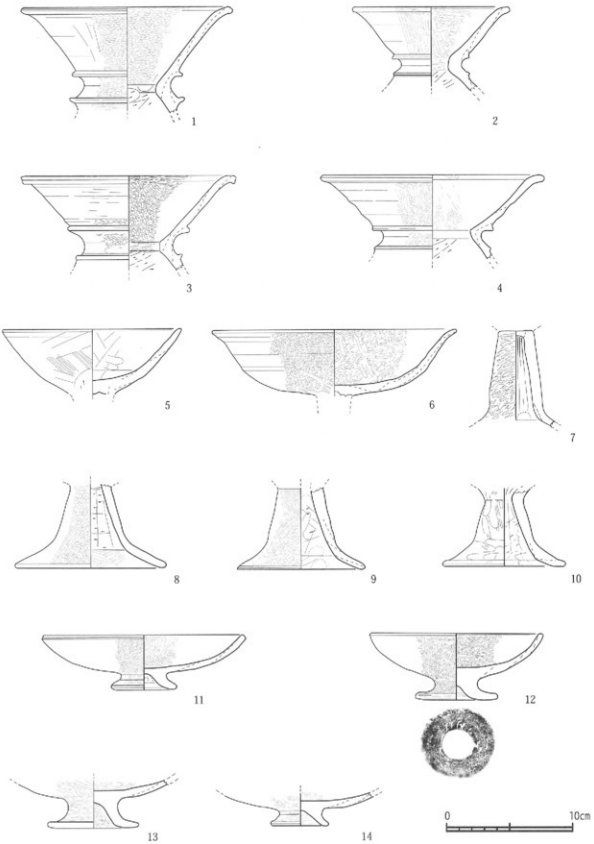
第30図　1区出土土師器（復合口縁）実測図2　S=1/3



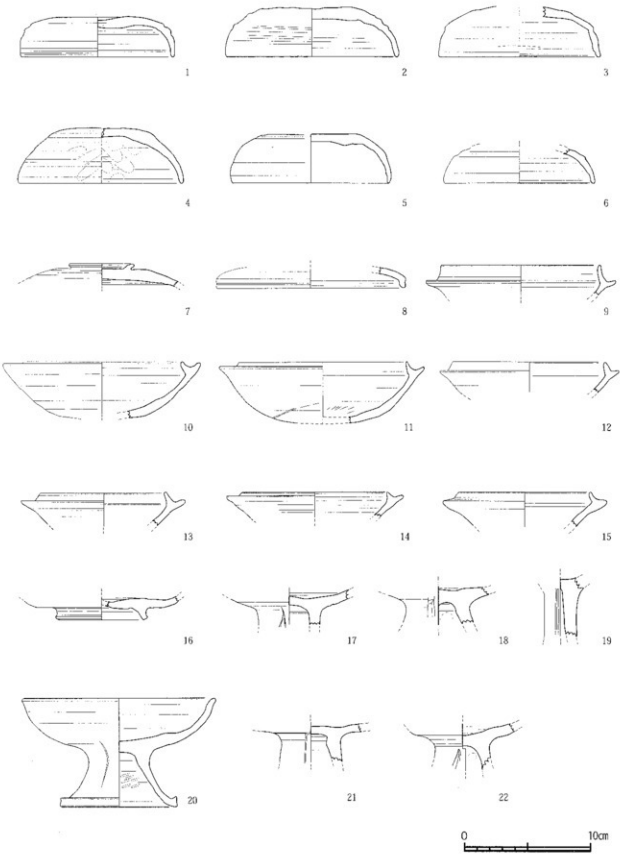
第31図　1区出土土師器（単純口縁）実測図3　S=1/3



第 32 図　1 区出土土師器実測図　S=1/3

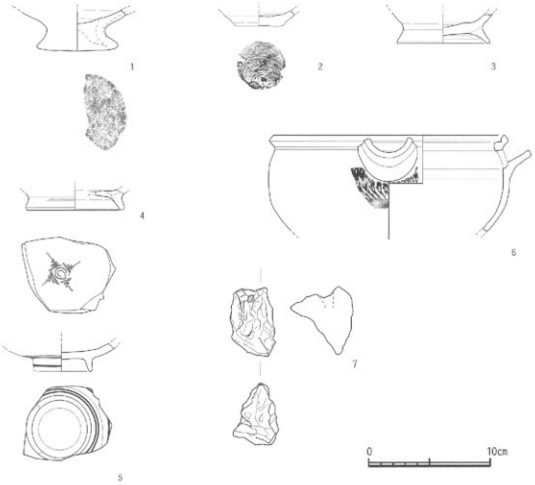


第33図　1区出土鼓型器台・高坏・低脚坏実測図　S=1/3



第 34 図　1 区出土須恵器実測図　S=1/3

第35図　1区出土土製品実測図 S=1/3



第36図　1区出土その他の遺物実測図 S=1/3

出土遺物観察表

写真図版	挿図番号	遺物番号	出土位置	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	色調	調整	形態・文様の特徴	備考
9	15	1	黒色シルト層	縄						内 黒褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁端部に刻目縁帯文を施し口辺部に2条の凹線を施す	布勢式縄文後期前葉
9	15	2	表採	縄	深鉢					内 明褐色 外 明褐色	内 ナデ 外 ナデ	縁帯文土器片	
9	15	3	黒色シルト層	縄						内 黒色 外 褐色	内 ナデ 外 ナデ	沈線文	布勢式　縄文後期
9	15	4	表採	縄	深鉢				0.8	内 褐灰色 外 褐灰色	内 ナデ 外 磨消縄文		
9	15	5	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢				0.8	内 黒褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 縄文沈線文	縄文地に沈線文	
9	15	6	12G シルト中層	縄	深鉢				0.8	内 黒褐色 外 明赤褐色	内 ナデ 外 ナデ	口唇部に2条の凹線	
9	15	7	黒色シルト層	縄	深鉢				1.1	内 にぶい橙色 外 明褐灰色	内 ナデ 外 磨消縄文	凹線文	赤色顔料付着
9	15	8	14G シルト中層	縄	深鉢				0.7	内 黒褐色 外 にぶい褐色	内 ナデ 外 磨消縄文		
9	15	9	黒色シルト層	縄	深鉢				1	内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	内 ミガキ 外 丁寧なナデ	口縁部に S 字状の貼り付け文帯（縄文）	
9	15	10	14G シルト中層	縄	深鉢				0.9	内 褐灰色 外 褐灰色	内 ナデ 外 磨消縄文		
9	15	11	表採	縄	深鉢				0.7	内 褐灰色 外 褐灰色	内 ナデ 外 縄文	結節縄文	後期山式
9	15	12	試掘トレンチ	縄	深鉢	24.5			0.8	内 褐灰色 外 褐灰色	内 ナデ 外 縄文	口縁と頸部以下縄文	
9	15	13	褐色砂礫土溝状遺構	縄	壺	13			0.6	内 暗褐色 外 黒褐色	内 丁寧なナデ 外 ミガキ		
9	15	14	14G シルト中層	縄	浅鉢	17.3		10	0.5	内 にぶい褐色 外 にぶい褐色	内 ケズリ・ナデ 外 縄文	胴部に段を持つ	
9	15	15	褐色砂礫土溝状遺構	縄	浅鉢	20			0.6	内 黒褐色 外 黒褐色	内 丁寧なナデ 外 丁寧なナデ	縄文補修浅鉢	
9	16	1	黒色シルト層	縄	深鉢	26			0.7	内 灰褐色 外 黒褐色	内 貝殻条痕 外 貝殻条痕	口唇部にキザミ目を入れる	
9	16	2	黒色シルト層	縄	深鉢	28.4			0.5	内 暗褐色 外 暗褐色	内 ナデ 外 ナデ　煤付着	口縁と突帯にキザミ目	
9	16	3	黒色シルト層	縄	深鉢	28			0.5	内 暗褐色 外 暗褐色	内 ナデ　指頭圧痕 外 ナデ	口唇と突帯にキザミ目	
9	16	4	褐色砂礫土溝状遺構	縄	深鉢	23			0.7	内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	口唇にキザミ、口縁部に突帯文（キザミ）頸部に山形の沈線文	
9	16	5	黒色シルト層	縄	深鉢	28.5			0.4	内 暗褐色 外 黒褐色	内 貝殻条痕 外 貝殻条痕	D字状の刻目突帯文を口縁部に施す 口唇部のキザミを入れる	
9	16	6	黒色シルト層	縄	深鉢	29			0.5	内 黒褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁部に刻目（平面菱形）	
9	16	7	黒色シルト層	縄	深鉢				0.5	内 にぶい褐色 外 にぶい褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁外側にツメ形状を付ける突帯文を施す。口唇部に刻目を入れる	
9	16	8	砂礫土層	縄	深鉢				0.6	内 にぶい褐色 外 にぶい褐色	内 ナデ 外 ナデ	口唇にキザミ、口縁部に突帯文（キザミ）頸部に山形の沈線文	
9	16	9	砂礫土層	縄	深鉢				0.6	内 暗褐色 外 にぶい褐色	内 ナデ 外 ナデ	口唇にキザミ、口縁部に突帯文（キザミ）頸部に山形の沈線文	
9	16	10	褐色砂礫土溝状遺構	縄	深鉢				0.6	内 にぶい褐色 外 にぶい褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁にキザミ、口縁部に突帯文（キザミ）頸部に山形の沈線文	
9	16	11	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢	34			0.7	内 黒褐色 外 黒褐色	内 貝殻条痕後ナデ 外 貝殻条痕	突帯部および口唇部に平面菱形の刻目を入れる	
9	16	12	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢				0.7	内 黒褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 貝殻条痕	口縁・突帯部に刻目	
9	16	13	砂礫土層	縄	深鉢				0.6	内 褐色 外 褐色	内 ナデ　指頭圧痕 外 ナデ	口縁・突帯部に刻目	
9	16	14	黒色シルト層	縄	深鉢				0.4	内 灰褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁刻目突帯文　口唇部にキザミ	
9	16	15	褐色砂礫土溝状遺構	縄	深鉢				0.5	内 黒褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ	刻目突帯文　口唇部に円形刺突文	
9	16	16	黒色シルト層	縄	深鉢				1.5	内 黒褐色 外 黒色	内 ナデ 外 ナデ	やや内向する口縁	

写真図版	挿図番号	遺物番号	出土位置	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(cm)	色調	調整	形態・文様の特徴	備考
9	16	17	砂礫上層	須	深鉢				0.5	内 暗褐色 外 暗褐色	内 ナデ 外 ナデ	突帯の位置が下がり口唇部を平坦に作る	
10	17	18	砂礫土層	弥	深鉢				0.5	内 灰褐色 外 灰褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁・突帯部に刻目	
10	17	19	黒色シルト層	縄	深鉢				0.5	内 暗褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ	刻目突帯文（板状工具による）口唇部刻目（板状工具による）	
10	17	20	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢				0.8	内 黄褐色 外 黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁と突帯部に円形の刺突	
10	17	21	表採	縄	深鉢				0.7	内 にぶい黄橙色 外 にぶい黄橙色	内 ナデ 外 ナデ	口縁外側と突帯にD字状の刺突文	
10	17	22	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢	34			0.6	内 黒褐色 外 黒褐色	内 貝殻条痕後ナデ 外 貝殻条痕	口唇部面取り、平面菱形状の刻目、突帯部は口縁部と一体になるように施す	
10	17	23	砂礫土層	縄	深鉢	27			0.5	内 黄褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ	刻目突帯文・口縁に刻目を施す。突帯は口縁よりやや下がった位置にある	
10	17	24	砂礫土層	縄	深鉢	13			0.6	内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	口唇と突帯に凹長のキザミ	
10	18	25	褐色砂礫溝状遺構	縄	深鉢	26			0.7	内 暗褐色 外 黒褐色	内 ナデ　指頭圧痕 外 ナデ	口辺部に刻目突帯文（右方向からの刻み）を施し口縁端部は平坦となる	
10	18	26	褐色砂礫溝状遺構	縄	深鉢	38			0.6	内 暗褐色 外 暗褐色	内 ナデ 外 ナデ	刻目突帯文	
10	18	27	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢	32			0.7	内 黒褐色 外 黒褐色	内 ケズリ後ナデ 外 強いナデ	断面三角形の刻目突帯文	
10	18	28	黒色シルト層	縄	深鉢	18.4			0.6	内 黄褐色 外 黄褐色	内 ナデ 外 強いナデ	刻目突帯文	
10	18	29	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢	13.8			0.7	内 暗褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ煤付着	刻目突帯文を頸部に施す突帯文は隆で波状となる	
10	18	30	黒色シルト層	縄	深鉢				0.5	内 褐色 外 褐色	内 ナデ 外 ナデ	刻目突帯文とキザミ口縁	
10	18	31	表採	縄	深鉢				0.5	内 にぶい黄褐色 外 にぶい黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	刻目突帯文	
10	18	32	表採	縄	深鉢				0.6	内 にぶい褐色 外 にぶい褐色	内 ナデ 外 ナデ	刻目突帯文	
10	18	33	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢				0.6	内 灰褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 強いナデ	刻目突帯文　口唇部が細くなる	
10	18	34	表採	縄	深鉢				0.5	内 にぶい橙色 外 にぶい橙色	内 ナデ 外 ナデ	刻目突帯文	
10	18	35	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢				0.5	内 褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ	断面四角形の突帯に棒状工具で刻目をいれる	
10	18	36	表採	縄	深鉢				0.4	内 黄褐色 外 黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	刻目突帯文	
10	18	37	砂礫土層	縄	深鉢				0.4	内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	刻目突帯文	
10	18	38	灰褐色土層	縄	深鉢				0.5	内 黒褐色 外 黒褐色	内 丁寧なナデ 外 ナデ	突帯部の位置がやや下がっている	
11	19	39	灰黒色砂礫土層	縄	深鉢				0.7	内 黒褐色 外 暗褐色	内 条痕文 外 ナデ	胴部に刻目突帯文	
11	19	40	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢				0.7	内 黒褐色 外 にぶい橙褐色	内 条痕文 外 ナデ	胴部に刻目突帯文	
11	19	41	灰黒色砂礫土層	縄	深鉢				0.7	内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	頸部に刻目突帯文	
11	19	42	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢				0.5	内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	内 丁寧なナデ 外 ナデ	口唇部面取り　突帯部は断面三角形の突帯	
11	19	43	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢				0.7	内 褐色 外 黒褐色	内 強いナデ 外 ナデ	板状の工具で深く刻目の入った断面四角形の突帯文を施す	
11	19	44	砂礫土層	縄	深鉢				0.5	内 褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ	口唇に接する突帯、突帯の作りは雑	
11	19	45	表採	縄	深鉢	19.5			0.7	内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁に接する無刻目突帯文	
11	19	46	表採	縄	深鉢	16.5			0.5	内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	内 貝殻条痕後ナデ 外 ナデ	口縁に接する無刻目突帯文	
11	20	1	褐色砂礫土溝状遺構	縄	深鉢	25			0.8	内 黒褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 貝殻条痕後ナデ	口唇D字状のキザミ	

写真図版	挿図番号	遺物番号	出土位置	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底厚(cm)	色調	調整	形態・文様の特徴	備考
11	20	2	褐色砂礫土溝状遺構	縄	深鉢				0.4	内 暗褐色 外 暗褐色	内 ナデ 外 条痕 ナデ	口縁0字状のキザミ	
11	20	3	砂礫土層	縄	深鉢				0.7	内 灰黄褐色 外 灰黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁0字状のキザミ	
11	20	4	砂礫土層	縄	深鉢				0.4	内 暗褐色 外 暗褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁0字状のキザミ	
11	20	5	砂礫土層	縄	深鉢				0.7	内 暗褐色 外 暗褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁V字状のキザミ	
11	20	6	褐色砂礫土溝状遺構	縄	深鉢				0.5	内 褐色 外 褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁V字状のキザミ	
12	21	1a	褐色砂礫土溝状遺構	縄	深鉢	21.2			0.5	内 暗褐色 外 暗褐色	内 貝殻条痕 外 貝殻条痕	内面に円形の刺突文　外面口辺部は内面からの刺突のため膨らむ	a類
12	21	2b	砂礫土層	縄	深鉢				0.6	内 黒褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ	内面に刺突文	b類
12	21	3c	褐色礫土層	縄	深鉢				0.5	内 褐灰色 外 褐灰色	内 ナデ 外 ナデ	外反して立ち上がる口縁で内面に刺突文	c類
12	21	4d	砂礫土層	縄	深鉢				0.5	内 にぶい黄褐色 外 にぶい黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	内面に刺突文	d類
12	21	5e	砂礫土層	縄	深鉢				0.5	内 にぶい黄褐色 外 にぶい黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	内面に刺突文	e類
12	21	6f	砂礫土層	縄	深鉢				0.3	内 にぶい黄褐色 外 にぶい黄褐色	内 ナデ 外 ナデ	内面2列の刺突文	f類
12	21	7g	黒色シルト層	縄	深鉢				0.5	内 黄灰色 外 黄灰色	内 ナデ 外 強いナデ	内面に刺突文	g類
13	22	1	黒色シルト層	縄	壺	13.5			0.6	内 黒褐色 外 赤褐色（漆）	内 ナデ・ミガキ 外 ナデ・ミガキ	C字文　彩文土器	赤漆
13	22	2	黒色シルト層	縄	壺	15.2			0.4	内 黒褐色 外 赤褐色（漆）	内 ナデ・ミガキ 外 ナデ・ミガキ	彩文土器	赤漆
13	22	3	黒色シルト層	縄	壺				0.6	内 黒褐色 外 赤褐色（漆）	内 ナデ・ミガキ 外 ナデ	彩文土器	赤漆　小片
13	22	4	黒色シルト層	縄	壺				0.5	内 黒褐色 外 赤褐色（漆）	内 ナデ・ミガキ 外 ナデ	彩文土器	赤漆　小片
14	23	1	黒色シルト層	縄	浅鉢	30			0.5	内 黒褐色 外 黒褐色	内 貝殻条痕後ナデ 外 貝殻条痕後ナデ		
14	23	2	黒色シルト層	縄	浅鉢	36			0.5	内 黒褐色 外 黒褐色	内 貝殻条痕後ナデ 外 貝殻条痕後ナデ		
14	23	3	黒色シルト層	縄	深鉢	26			0.5	内 黒褐色 外 黒褐色	内 ナデ 外 ナデ		
14	23	4	灰褐色砂礫土層	縄	深鉢	16.8			0.5	内 にぶい褐色 外 灰黄褐色	内 条痕後ナデ 外 丁寧なナデ		
14	23	5	黒色シルト層	縄	浅鉢	28.5			0.6	内 灰褐色 外 灰褐色	内 ミガキ 外 ミガキ	口部に段を持つ	
14	23	6	14G	縄	浅鉢				0.5	内 褐色 外 褐色	内 ナデ 外 ナデ	口部に段を持つ	
14	23	7	砂礫土層	縄	浅鉢				0.8	内 灰褐色 外 灰褐色	内 ナデ 外 ナデ	口縁内傾き　口縁直下に段	
14	23	8	褐色砂礫土溝状遺構	縄	深鉢	23.5			0.6	内 灰褐色 外 灰褐色	内 ナデ　指頭圧痕　頸部に指頭圧痕文帯　口縁端部を平坦に作る。 外 ナデ		
14	23	9	黒色シルト層	縄	浅鉢	11.8	6.8	4.5	0.6	内 灰褐色 外 黒褐色	内 ナデ　指頭圧痕　底部構円形の土器。底径長軸径6.8cm短軸径5cm 外 ナデ　指圧痕		
14	23	10	灰褐色砂礫土層	縄	底部				0.9	内 明灰黄褐色 外 暗褐色	内 ナデ 外 ナデ		
14	23	11		縄	底部		7.8		0.7	内 黒褐色 外 黄褐色	内 ナデ 外 ナデ		底部破片
14	23	12		縄	底部		5.2		0.6	内 黒色 外 黒色	内 ミガキ 外 ミガキ		底部破片
14	23	13		縄	底部		7.8		0.7	内 黒褐色 外 灰黄褐色	内 ナデ 外 ナデ		底部破片
14	23	14		縄	底部		7.5		1.7	内 灰褐色 外 にぶい黄褐色	内 ナデ 外 ナデ		底部破片
14	23	15		縄	底部		8.8		1.3	内 灰黄褐色 外 にぶい黄褐色	内 ナデ 外 ナデ		底部破片

図版番号	挿図番号	遺物番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）口径	底径	器高	調整・技法 外面	内面	形態・文様の特徴	備考
18	27	1	1G	弥	甕	20.0			口縁端部：凹線文（2条） 頸部：突帯（刻み目）	口縁部：ナデ（ヨコ）	頸部：突帯（貼り付け）	外面に煤付着
18	27	2	6G	弥	甕	21.0			口縁端部：凹線文（1条） 口縁部：ナデ 頸部：突帯に刻み目　体部：ナデ	口縁部：ナデ（ヨコ）、指圧痕 体上部：ナデ（ナナメ）、指圧痕	頸部：突帯（貼り付け）	
18	27	3	1G	弥	甕	21.8			口縁端部：凹線文（3条） 頸部：突帯に刻み目 体部：ハケ（ナナメ）後ナデ（ヨコ）	口縁部：ハケ（ナナメ）、ナデ（ヨコ）、指圧痕 体上部：太いハケ（ナナメ）後ナデ（ヨコ、ナナメ）、指圧痕	頸部：突帯（貼り付け）	内外面に煤付着
18	27	4	1G	弥	甕				口縁部：ナデ（ヨコ） 体部：ナデ（ヨコ、ナナメ）	口縁部：ナデ（ヨコ） 体部：ナデ（ヨコ、ナナメ）		外面に煤付着
18	27	5	1G	弥	特殊壺（?）	19.0			口縁部：凹線文（3条?） 頸部：ナデ（ヨコ）	口縁部：ナデ、ミガキ 頸部：ナデ	複合口縁	外面に煤付着
18	27	6	1G	弥	甕	17.0			口縁～頸部：ナデ（ヨコ）	口縁～頸部：ナデ 体部：ケズリ		外面に煤付着 風化気味
18	27	7	1G	弥	甕（底部）		7.0		ミガキ	ケズリ（ナナメ）ナデ、ミガキ（ヨコ）、指圧痕（底面）	底部：平底	内外面に煤付着
18	27	8	1G	弥	甕（底部）		6.6		ミガキ	ケズリ（タテ、ナナメ）後ミガキ（上方）	底部：平底	内外面に煤付着
18	27	9	1G	弥	甕（底部）		6.0		ミガキ（ナナメ、ヨコ）	ケズリ（ナナメ）後ナデ、指圧痕	底部：平底	内外面に煤付着
18	27	10	1G	弥	甕（底部）		6.4		ミガキ後ナデ（ヨコ）	ナデ（ナナメ）、指圧痕	底部：平底	弥生中期後半 内外面に煤付着
18	27	11	1G	弥	甕（底部）		6.6		ミガキ	ケズリ（ナナメ）後ナデ		外面に煤付着
18	27	12	1G	弥	甕（底部）		5.0		ミガキ、指圧痕 底部：ナデ	ナデ、指圧痕	底部：ほぼ平底	外面に煤付着
18	27	13	1G	弥	甕（底部）		6.0		ミガキ	ナデ、指圧痕	底部：平底	外面に煤付着
18	27	14	1G	弥	甕（底部）		6.2		ミガキ後ナデ 底部：ナデ後ミガキ	ナデ、ミガキ		弥生中期後半 内外面に煤付着
19	29	1			甕	12.2			口縁部：ナデ（ヨコ） 体部：ハケ（ヨコ、ナナメ）	口縁～頸部：ナデ（ヨコ） 体部：ケズリ（ヨコ、ナナメ） 指圧痕	複合口縁	
19	29	2	8G		甕	14.2			口縁部：ナデ（ヨコ） 体部：ナデのち細いハケ	口縁部：ナデ（ヨコ） 体部：ケズリ（ヨコ）のちナデ	複合口縁	内外面に煤付着
19	29	3	13G		甕	16.4			口縁～頸部：ナデ（ヨコ） 指頭様ナデ	口縁部：ナデ（ヨコ） 頸～体部：ケズリ	複合口縁	
19	29	4	13G		甕	19.8			口縁～頸部：ナデ（ヨコ） 指頭様ナデ	口縁～頸部：ナデ（ヨコ）ミガキ 体部：ハケ（上方）、ケズリ（下方）	複合口縁 器壁：やや厚目	外面に煤付着
19	29	5	10G		壺	18.4			口縁～頸部：ナデ（ヨコ）（ミガキ様） 頸～肩部：無軸羽状文（ハケ状工具） 肩～体部：ハケ（ヨコ）、ナデ	口縁～体上部：ナデ 体部：ケズリ	複合口縁	
20	29	6	10G		壺	23.6			全体的にミガキ 頸～肩部：無軸羽状文（櫛状工具）	口縁部：ナデのちミガキ 頸部：ナデのちミガキ、指ナデ 体部：ケズリのちナデ	複合口縁	
20	30	1	14G		甕	29.2			口縁部：ナデ（ミガキ様）→ナデ（指頭様）頸部：（ミガキ様）→ナデ（指頭様）　体部：ナデ（ミガキ様）、平行沈線（3条）ナデ（ハケ工具）	口縁～頸部：ナデ（ミガキ様） 体部：ケズリ	複合口縁	外面に煤付着 内外面に赤色顔料
20	30	2	12G		甕	24.0			口縁部：ナデ（ヨコ） 体部：ハケ（ヨコ）後連続刺突文	口縁部：ハケ（ナナメ）後ナデ（ヨコ） 頸部：ミガキ、ナデ 体部：ケズリ（ヨコ、ナナメ）	複合口縁 口縁部：沈線(2条)	
21	30	3	12G		直口壺	9.8			口縁部：ミガキ（タテ） 頸部：ミガキ（ヨコ） 体部：ミガキ、ハケ、ナデ	口縁～頸部：強いナデ（ナデ痕沈線状残） 体部：ケズリ、ミガキ、一部ナデ	複合口縁 体部は扁球系丸底	外面に煤付着
21	30	4	10G		甕	21.0			口縁部：ナデ（ヨコ）、指圧痕 頸部：ナデ（ヨコ、ナナメ） 体部：ケズリ（ヨコ）	口縁～体部：ナデ（ヨコ）	複合口縁 口縁端部：浅い凹線	
21	30	5			甕	16.0			口縁部：ナデ、ミガキ 体部：細かいハケのちミガキ	口縁部：ナデ（ヨコ）、指圧痕 頸部：ミガキ 体部：ケズリ、指圧痕	複合口縁	外面に煤付着
21	31	1	8G		甕	19.0			口縁部：ナデ（ヨコ、ナナメ） 体部：ナデ（ヨコ）	口縁部：ナデ（ヨコ）、指頭様ナデ痕 体部：ケズリ（ナナメ）	単純口縁	外面に煤付着
21	31	2	8G		甕	16.2			口縁部：ナデ（ヨコ）、指圧痕 体部：ナデ（ヨコ、ナナメ）	口縁部：ナデ（ヨコ）、指圧痕 体部：ナデ（上方）、ケズリ（ナナメ）	単純口縁	内外面に煤付着
21	31	3			甕	15.4			口縁部：ナデ（ヨコ） 体部：ハケ（ナナメ）後ナデ	口縁部：ケズリ（ヨコ）、指圧痕 体部：ケズリ（ナナメ）後ナデ	単純口縁	外面に煤付着
21	31	4	10G		甕	17.0			口縁部：ミガキ、ナデ 体部：ハケ（ナナメ）後ナデ	口縁部：ナデ（ヨコ、ナナメ）、指頭様ナデ痕　体部：ケズリ（ナナメ）	単純口縁	外面に煤付着
21	31	5	10G		甕	16.2			口縁部：ナデ（ヨコ） 体部：ハケ（ヨコ、タテ、ナナメ）後ナデ	口縁部：ナデ（ヨコ）、指圧痕 体部：ケズリ（ナナメ）	単純口縁	

図版番号	押図番号	遺物番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）口径	底径	器高	調整・技法 外面	内面	形態・文様の特徴	備考
21	31	6	8G		甕	17.0			口縁部：ナデ（ヨコ）鋸形：ナデ、一部ミガキ 体　部：ハケ（ナナメ）	口縁部：ナデ（ヨコ） 体　部：ケズリ	単純口縁	
21	31	7	8G		甕	16.4			口縁部：ナデ（指頭押圧） 体　部：ハケ後　ナデ	口縁～頸部：ナデ、一部ハケ指圧痕 体部：ケズリ（ナナメ）後ナデ	単純口縁	
21	31	8	8G		甕	16.0			口縁～頸部：ナデ（ヨコ）、一部ミガキ横ナデ 体部：ハケ（ナナメ）後ナデ	口縁部：ナデ（ヨコ）指頭痕ナデ 体部：ケズリ	単純口縁	外面に煤付着
21	31	9	8G		甕	20.4			口縁部：ハケ後ナデ（ヨコ、ナナメ） 体　部：ハケ後ナデ（ヨコ、ナナメ）	口縁部：ナデ（ヨコ、ナナメ） 体　部：ケズリ	口縁部付近に小さく折り込み 単純口縁	外面に煤付着
21	31	10	8G		甕	14.8			口縁部：ナデ（ヨコ、ナナメ）、指圧痕 底　部：ハケ後指圧痕 体　部：ハケ（ナナメ）後ナデ	口縁～頸部：ナデ（ヨコ、ナナメ） 指頭痕ナデ痕 体部：ケズリ（ナナメ）		内面に煤付着
22	32	1	8G		甕	17.0			口縁部：ナデ（指頭痕ナデ痕ヨコ） 頸～体部：強いハケ（ナナメ）	口縁部：ナデ（指頭痕ナデ痕ヨコ） 頸～体部：ケズリ後ナデ	単純口縁	外面に赤色顔料
22	32	2	8G		甕	16.8			口縁部：ナデ（指頭痕ナデ痕ヨコ） 体　部：ハケ（ナナメ）後ナデ 平行沈線（13条以上）	口縁部：ナデ（指頭痕ナデ痕ヨコ） 体　部：ナデ（指頭痕ナデ痕ヨコ～上方）、ケズリ（ナナメ、ヨコ）、指圧痕	単純口縁 口縁端部は内側に小さく肥厚	内外面に煤付着
22	32	3	8G		甕	17.8			口縁部：ナデ（ヨコ） 体　部：ハケ（ナナメ）後ナデ	口縁部：ナデ（指頭痕ナデ痕ヨコ） 頸　部：ナデ後指圧痕　体部：ケズリ（ナナメ）	単純口縁 口縁端部に溝	外面に煤付着
22	32	4	8G		甕	13.8			口縁部：ナデ（指頭痕ナデ痕ヨコ） 体　部：ハケ（ヨコ、タテ、ナナメ）後ナデ	口縁部：ナデ（指頭痕ナデ痕ヨコ） 体　部：ケズリ後ナデ（ヨコ、ナナメ）		内外面に煤付着
22	32	5	8G		鉢	20.0			ミガキ、ナデ	ミガキ		外面に煤付着 内外面に赤色顔料
22	32	6	10G		直口壺	10.6			口縁～体上部：ナデ（ヨコ）	口縁部：ナデ（ヨコ、ナナメ）指圧痕 体　部：ケズリ（ナナメ）	単純口縁	外面に煤付着
22	32	7			甕	9.6			口縁部：ハケ（タテ）後ナデ（ヨコ） 体　部：ハケ後ナデ（上方）、ナデ	口縁部：ナデ（指頭痕ナデ痕ヨコ、ナナメ） 体　部：粗いナデ（ヨコ、ナナメ上方）、ケズリ（ヨコ、ナナメ）	単純口縁 体部は扁球状	
23	32	8	14G		小型丸底壺	8.0	2.0	6.7	口縁部：ナデ（ヨコ） 頸～体部：ハケ、ナデ（ヨコ）	口縁部：ナ　デ後指圧痕　体部：ケズリ	平坦口縁 シャトルコック状 体部：扁球状	
23	32	9	10G		小型丸底壺	10.2			口縁部：ナデ（ヨコ）、指圧痕 体　部：ハケ（ナナメ）後ナデ、指圧痕	口縁部：ナデ（ヨコ）、指圧痕 体　部：ケズリ（ナナメ）、指圧痕	単純口縁	
23	32	10	8G		小型丸底壺				体　部：ナデ、ミガキ（ヨコ、ナナメ）	ケズリ（ヨコ、ナナメ）、指圧痕	体部は扁球状	外面に煤付着
23	32	11	12G		杯	11.6	3.2	6.3	ハケ（ヨコ、ナナメ）、ナデ	ハケ（ナナメ）、指圧痕		
23	32	12	14G		ミニチュア	6.4		2.65	ミガキ、ケズリ後ナデ（下方）	ナデ、指圧痕		内面に煤付着
23	32	13	10G		小椀	7.6			ナデ（？）	ナデ（？）		
23	32	14	10G		坩	6.0			ナデ	口縁部：ナデ、指圧痕 体　部：ケズリ（ナナメ）		外面に煤付着
24	33	1	10G		鼓形器台	16.8			ミガキ	受部：ミガキ 台部：ケズリ、指圧痕		
24	33	2	14G		鼓形器台	12.4			受部：ミガキ（ヨコ）後縦文状のミガキ（タテ） 脚部：ナデ（ヨコ、ミガキ後かき「ノ」字状のヘラ描き　台部：ナデ（ヨコ）	受部：ミガキ（ヨコ）、太いミガキ（タテ） 脚部：ミガキ		
24	33	3	10G		鼓形器台	17.0			受部：ナデ（ヨコ） 脚部：ミガキ、ナデ（ヨコ）	受～脚部：ミガキ、ナデ 台部：ケズリ（ナナメ）後ナデ	口縁端部：垂直面 浅い沈線	
24	33	4	10G		鼓形器台	17.8			受～脚部：ミガキ後ナデ（ヨコ）	受部：ミガキ後ナデ 台部：ケズリ（ナナメ）		
24	33	5	10G		高杯	14.0			ハケ（ナナメ）後ナデ	ナデ（ナナメ）、指圧痕	円盤充填法	
24	33	6	13G		高杯	19.4			ミガキ（タテ） 底部付近：ハケ後ミガキ、ナデ（ヨコ）	ミガキ（タテ）、鳴皮状のナデ	円盤充填法	
24	33	7	8G		高杯				ミガキ（？）	シボリ痕後ナデ、指圧痕	円盤充填法	
24	33	8			高杯脚部		11.7		ミガキ	脚部：ケズリ（ヨコ）、ナデ 脚部：粗いハケ後ナデ	円盤充填法	
24	33	9	12G		高杯脚部		10.2		脚上部：ハケ（ナナメ）後ナデ 脚中～脚部：ミガキ	脚部：ケズリ後ナデ（ナナメ） 脚部：ナデ（ナナメ、ヨコ）、指圧痕		内外面に赤色顔料
24	33	10	10G		高杯脚部		9.8		坏下部：ハケ（ナナメ）後ナデ 脚　部：ハケ（ナナメ）後ナデ（ヨコ、ナナメ） 一部ミガキ、指圧痕	坏下部：シボリ痕、縦方向 脚　部：ケズリ（ナナメ）後ナデ、指圧痕 裾　部：ナデ、指圧痕		外面に赤色顔料
24	33	11	14G		低脚杯	16.2	5.2	4.4	坏部：ミガキ 脚部：ミガキ、ナデ	坏部：ミガキ 脚部：ナデ、指圧痕	口縁端部に沈線（1条）	

図版番号	挿図番号	遺物番号	出土地点	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法 外面	内面	形態・文様の特徴	備考
24	33	12	13G		低脚杯	13.8	6.4	5.3	ミガキ（タテ）、ナデ	ミガキ（タテ） 脚部：ナデ、一部ミガキ、「ノ」字状の連続刺突文		
24	33	13	10G		低脚杯		7.4		ミガキ	ミガキ		
24	33	14	13G		低脚杯		4.4		ミガキ 脚底部：ナデ	ミガキ		風化
26	34	1	14G		蓋	12.2		3.2	天井部：ケズリ 体部：回転ナデ	天井部：回転ナデ後ナデ、指圧痕 縁　体部：回転ナデ	天井部と体部との境に凹線(2条)	
26	34	2	10G		蓋	13.7		4.0	天一翼部：ケズリ 体部：回転ナデ	天井部：回転ナデ後ナデ 体　部：回転ナデ	天井部と体部との境に凹線(3条) 内面に漆付着	
26	34	3	13G		蓋	13.0			回転ナデ	回転ナデ	天井部と体部との境に段	
26	34	4	12G		蓋	13.0		4.5	回転ナデ後ナデ 天井部に条痕	回転ナデ後ナデ、指圧痕	体部に段	
26	34	5	8G		蓋	12.6		4.0	強い回転ナデ	強い回転ナデ		
26	34	6	10G		蓋	12.0			回転ナデ	回転ナデ	体部に段	
26	34	7	6G		蓋	5.0			回転ナデ	回転ナデ後ナデ	輪状つまみ付	
26	34	8	10G		蓋	15.0			回転ナデ	回転ナデ	輪状つまみ付か？	
26	34	9	2G		杯	12.6			回転ナデ	回転ナデ		外面に自然釉
26	34	10	10G		杯	15.0			回転ナデ	回転ナデ 底部：回転ナデ後ナデ		
26	34	11	12G		杯	16.0		5.0	回転ナデ	回転ナデ 底部：ハケナデ	重ね痕跡 杯身と高脚部片方付着	外面に自然釉
26	34	12	10G		杯	14.2			回転ナデ	回転ナデ		
26	34	13	10G		杯	13.0			回転ナデ	回転ナデ		
26	34	14	9G		杯	14.0			回転ナデ	回転ナデ		
26	34	15	10G		杯	13.0			回転ナデ	回転ナデ		
26	34	16			杯			7.0	回転ナデ	回転ナデ	高台付き	
26	34	17	10G		高杯				回転ナデ	回転ナデ	前後に透かし（長三角形）	
26	34	18	12G		高杯				ナデ	坏部：回転ナデ後ナデ 脚部：回転ナデ後指圧痕	前後に透かし	
26	34	19	8区		高杯 脚部				ナデ	ナデ	3ヵ所に透かし（貫通せず）	
25	34	20	12G		高杯	15.4	9.2	8.6	ナデ	ナデ 脚部：ナデ（ミガキ状）	透かしの切り込み	
26	34	21	8G		高杯				回転ナデ	坏部：回転ナデ後ナデ 脚部：回転ナデ	2ヵ所(対面的)に透かし(長台形)	
26	34	22	10G		高杯				回転ナデ	坏部：回転ナデ後ナデ 脚部：回転ナデ、指圧痕	前後に透かし（高三角形状）	
25	35	1		土師器	支脚				ナデ	ケズリ		
25	35	2	8G	土師器	支脚				ナデ	ケズリ	牛角状	
25	35	3	10G	土師器								
25	35	4	10G	土師器	支脚				ナデ、指圧痕			外面に煤付着
25	35	5	1G表採	土師器	把手				ナデ	ケズリ	牛角状	外面に煤付着

図版番号	押図番号	遺物番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）口径	底径	器高	調整・技法 外面	内面	形態・文様の特徴	備考
25	35	6	11G	土師器	肥手（脚）				ハケ、ナデ		牛角状	
25	35	7	11G	土師器	肥手				ナデ		牛角状	外面に煤付着
25	35	8	9G	土師器	肥手				ナデ	ケズリ	牛角状	外面に煤付着
25	35	9	8G	土師器	肥手（？）				ナデ			
27	35	10	12G	土師器	カマド				ナデ	ナデ		内外面に煤付着
27	35	11		土師器	カマド				ナデ	ナデ		
27	35	12	12G	土師器	カマド（？）				ナデ	ケズリ		
27	36	1	10G	土師器	柱状高台皿		6.5		ナデ	ナデ		平安時代
27	36	2	9G	土師器	杯		3.8		ナデ	回転ナデ		
27	36	3	1G	土師器	坏		7.6		ナデ	回転ナデ		赤色顔料
27	36	4	9G	土師器	坏		8.0		ナデ	回転ナデ		赤色顔料
27	36	5	4G	白磁	碗		5.0				線文	
27	36	6	2G	陶器	片口鉢	19.0				回転ナデ		近代
27	36	7	10G	鉄滓	鍛冶滓？							工具痕付き

図版番号	押図番号	遺物番号	出土地点	種類	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
16	25	1		石鏃	安山岩	1.8	1.5	0.35		凹基無茎式
16	25	2		剥片	黒曜石	5.0	1.6	0.6	4.0	表面：自然面残る・裏面：主要剥離面か
16	25	3	9G	石核か		2.0	3.6	1.1	9.0	自然か一部残る
16	25	4	12G	砥石		13.5	4.7	3.6	242	4面使用、線状痕、太い沈線状の擦条痕
16	25	5	9G	砥石				11.2	185	3面使用
16	25	6	13G	砥石						
16	25	7	10G	紡錘車			（底径）4.8	（厚さ）2.4	47	台形、細線銘刻文
16	25	8	10G	紡錘車			5.2	2.5	58	台形、細線銘刻文
16	25	9		木製品		18.1	4.5	0.6		

図版番号	押図番号	遺物番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）口径	底径	器高	調整・技法 外面	内面	形態・文様の特徴	備考
19	28	1	5G	弥生土器	甕				ミガキ・ナデ	ハケ・ナデ	連続刺突文2段	
19	28	2	1G	弥生土器	高坏				ミガキ	ナデ	凹線9条以上	
19	28	3	9G	弥生土器	高坏	22.4			ナデ	ケズリ		外面に煤付着

図版番号	押図番号	遺物番号	出土地点	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
16	24	1		石剣	6	5.2	2.2	123	
16	24	2		擦丸上	6.7	6	2	162	
16	24	3		黒色シルト	4.5	4.8	1.3	67	
16	24	4		黒色シルト	5.8	5.4	2	154	
16	24	5		黒色シルト	7.2	6.1	1.6	97	
16	24	6		黒色シルト	6.4	3.2	1.6	57	
16	24	7			6.8	5.8	1.5	101	
16	24	8		黒色シルト	5.2	4.4	1.2	63	

自然科学分析

第４章　自然科学分析

第１節　万場Ⅰ遺跡出土土器 ^{14}C 年代測定

国立歴史民俗博物館年代測定研究グループ　小林謙一 1)・坂本稔 2)・藤尾慎一郎 3)
1)　中央大学文学部
2)　国立歴史民俗博物館研究部

はじめに

本報は万場Ⅰ遺跡の発掘調査に伴って出土した土器の付着物の年代分析を、国立歴史民俗博物館年代測定研究グループが行った結果の報告である。万場Ⅰ遺跡は、島根県雲南市木次町東日登に所在する。奥出雲町横田の船通山を源として宍道湖に注ぐ斐伊川の中流域に属し、斐伊川の支流である久野川に形成された低位河岸段丘に位置している。

雲南市万場Ⅰ遺跡（図 18 － 25 水路跡出土）土器付着物の加速器を用いた ^{14}C 年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料は雲南市教育委員会が提供した資料から藤尾慎一郎が採取したもので、測定は (株) パレオ・ラボによるものである。測定結果は計測値 (補正) とともに実年代の確率を示す較正年代値を示す。

1 試料と炭化物の処理

万場Ⅰ遺跡の資料は、出雲市内遺跡群の試料採取と同時に行ったため、出雲市内の試料採取に用いた歴博試料番号である SMIZ の符号を用いて資料番号とした。. 測定を試みた試料は褐色砂礫土溝状遺構出土突帯文土器片の内外面付着物 (SMIZ32) と漆膜 (SMIZUl) である。土器は突帯文土器の胴部外面 (SMIZ-32b) と同一破片の口縁部外面 (SMIZ-32d) 付着物で、濱田竜彦氏の濱田編年Ⅱ期 (口酒井式併行) に相当する。濱田氏は山陰地方東部の因幡・伯耆地域の突帯文土器を検討してⅠ～Ⅲ期の３期区分を提示し、その中でⅡ期以降、２条突帯の非一般化、砲弾形器形の盛行、粗い擦痕の残るナデ調整の多用などに強い地域性を確認して、Ⅲ期新段階は弥生前期前葉の出雲原山式と併行するとしている (濱田 1999)。測定した土器は、良好に付着物が遺存していたが、特に外面に顕著に付着しており、胴部部分 (b) と口縁部突帯文部分 (d) とを区分して採取した。

漆 (SMIZ-U1) は遠賀川系土器である壷形土器に塗られていた漆の塗膜を剥いで試料としたが、結果的に炭素量が少なく年代測定はできなかった。

試料は、パレオ・ラボ杜で前処理として AAA 処理 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム lN, 塩酸 1.2N)、二酸化炭素化燃焼を行った。(註 1)。SMIZ-32b は 78mg の採取試料から 56mg を AAA 処理し、6.95mg 回収した。4.73mg の試料を燃焼し 1.79mg 相当の CO_2 を回収した。SMIZ-32d は 27mg を AAA 処理し、4-51mg 回収した。3.21mg の試料を燃焼し 1.62mg 相当の CO_2 を回収した。漆である SMIZ-U1 については、1mg の試料を前処理した結果、ほとんどが融解し炭素が回収できる見込みがなかったため、燃焼は保留した。

2 測定結果と暦年較正

AMS による ^{14}C 測定は、パレオ・ラボの AMS(測定機関番号 PLD) で測定した。

測定結果は、同位体効果を補正し、IntCa104 を用い、RHC3.31 によって較正年代を算出した (図)(註 2)。横に示す % が、それぞれの２σの範囲での較正年代値と確率 (合計すると 95.4%) である。なお、$\delta^{13}C$ 値 (‰.) は加速器による同位体補正効果のための測定値であり、必ずしも $^{14}C/^{13}C/^{12}C$ 比を正確に反映しないこともあるため、() で参考として付す。

試料番号	機関番号	^{14}CBP 誤差	δ ^{13}C(AMS)	較正年代 calBC
SMIZ-32b	PLD-11936	2515 ± 25	(－25.3 ± 0.26)	790-725(24.3%)
				690-655(17.2%)
				655-540(53.9%)
SMIZ-32d	PLD-11937	2465 ± 25	(－24.8 ± 0.20)	755-680(29.6%)
				670-485(57.1%)
				465-445(3.1%)
				445-455(5.6%)

3 まとめ

較正結果を見ると、土器付着物内外面ともに測定誤差 1 σで重なり、ほぼ同じ年代を示すと評価できる。いわゆる「2400 年問題」と呼ばれる、弥生時代前期に相当する前 750 ～ 400 年頃の、過去の大気中の ^{14}C 濃度が異常なために較正曲線が横に寝る時期に当たり、実年代は絞りにくいが、その中でも 2400 年問題の前半、すなわち前 700 ～ 550 年の間に含まれる可能性がやや高い結果である。弥生時代前期遠賀川系土器が伴わない中国地方日本海側の突帯文土器の年代としては矛盾はない年代といえる。

平成 19 年度科学研究費補助金 (学術創成研究)「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」(研究代表 西本豊弘 課題番号 16GS0118) の成果である。暦年較正については今村峯雄の方法に従う。本稿は、小林謙一が記した。

注 1 下記の方法で処理した。

(1) 前処理 = 酸・アルカリ・酸による化学洗浄

AAA 処理として、80℃、各 1 時間で、希塩酸溶液 (1N・HC1) で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去 (2 回) し、さらにアルカリ溶液 (1N-NaOH) でフミン酸等を除去する。

(2) 二酸化炭素化と精製 = 酸化銅により試料を燃焼 (二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化 : 鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。年代データの ^{14}CBP という表示は、西暦 1950 年を基点にして計算した ^{14}C 年代 (モデル年代) であることを示す。^{14}C 年代を算出する際の半減期は、5,568 年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差 (ユ標準偏差、68% 信頼限界) である。AMS では、グラファイト炭素試料の ^{14}C/^{13}C 比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した ^{13}C/^{12}C 比により、^{14}C/^{13}C 比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}C/^{12}C 比は、標準体 (古生物 be1emnite 化石の炭酸カノレシウムの ^{13}C/^{12}C 比) に対する千分率偏差 δ ^{13}C(パーミノレ .%。) で示され、この値を -25%。に規格化して得られる ^{14}C/^{12}C 比によって補正する。補正した ^{14}C/^{12}C 比から、^{14}C 年代値 (モデル年代) が得られる。

測定値を較正曲線 IntCa104(^{14}C 年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004 年版)(Reimereta1.2004) と比較することによって暦年代 (実年代) を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計 1 数理的に扱う方がより正確に年代を表玩できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラム RHCa1(OxCalProgram に準じた方法) を用いている。統計誤差は 2 標準偏差に相当する、95% 信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 calBC または calAD で示す。() 内は推定確率である。

＜参考文献＞

濱田竜彦 1999「因幡・伯耆地域の突帯文土器と遠賀川式土器」『土器持寄会論集突帯文と遠賀川』

Reimer, Paula J. et a1 .2004 IntCal04 Te1 Testrial Radiocarbon Age Calibration 0-26 ca1 kyr BP Radiocarbon 46(3). 1029-1058

M.sakamoto.M.Imamura.J van der Plicht. T.Mitsutani.M.Sahara 2003 Radiocarbon Calibration For Japanese Wood Samples Radiocardon.45(1).81-89

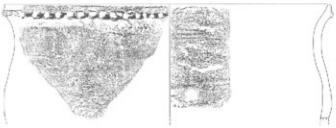
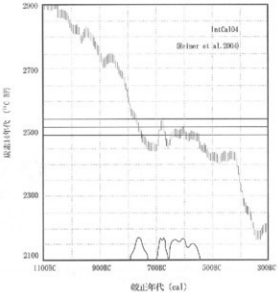


図 18 － 25（水路跡出土土器）

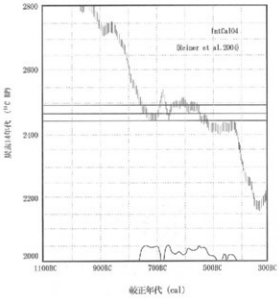
測定対象土器（SMIZ － 32）



試料番号　SMIZ-32b
機関番号　PLD-11936
炭素14年代　2515 ± 25 ^{14}CBP
較正年代　790calBC － 725calBC　24.3%
690calBC － 655calBC　17.2%
655calBC － 540calBC　53.9%

95.3%

中央値　640calBC
最頻値　670calBC



試料番号　SMIZ-32d
機関番号　PLD-11937
炭素14年代　2465 ± 25 ^{14}CBP
較正年代　755calBC － 680calBC　29.6%
670calBC － 485calBC　57.1%
465calBC － 445calBC　3.1%
445calBC － 415calBC　5.6%

95.4%

中央値　620calBC
最頻値　650calBC

第１図　万場Ⅰ遺跡測定資料の較正年代確率分布

第2節　万場Ⅰ遺跡漆塗土器の分析

井上美知子（財）元興寺文化財研究所

1. 分析対象

漆塗り土器

2. 分析内容

・黒色と赤色塗膜の顔料分析
・黒色と赤色塗膜の成分分析
・赤色塗膜の断面観察

3. 使用機器と分析条件

・エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (XRF)(セイコーインスツルメンツ㈱製 SEA5230) 試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

黒色塗膜：塗膜に含まれると予想される元素が周期律表でカリウム (K) より軽いため真空雰囲気で分析を行った。コリメータφ 1.8㎜・励起電圧 15kV・300 秒間照射した。

赤色塗膜：塗膜に含まれると予想される元素が周期律表でカリウム (K) より重いため大気圧で分析を行った。コリメータφ 1.8mm・励起電圧 45kV・300 秒間照射した。

・全反射フーリエ変換型赤外分光光度計 (ATR-FTIR)(SENSIR　TECHNOLOGIES 製 Travel　IR)

試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物を同定する。全反射方式により、透過法では測定できない固体試料に適する。

検出器 T S C を用い、分解能 4cm $^{-1}$ で測定した。

・マイクロスコープ (㈱キーエンス VHX-200)
・ミクロトーム (㈱日本ミクロトーム研究所)
・生物顕微鏡 (㈱オリンパス BX50)
・金属顕微鏡 (㈱オリンパス BH2 － UMA)

写真1　黒色塗膜の採取箇所

4. 方法

現地で頂いた赤色塗膜と彩文土器より微量採取した黒色塗膜を分析試料とした (写真 1,2)。それぞれの塗膜に含まれる顔料を調べるため XRF で元素分析を行なった。また、それぞれの塗膜に漆が含まれるかどうか調べるため、ATR-FTIR で成分分析を行った。

つぎに、赤色塗膜の層構造を調べるため、漆膜をエポキシ樹脂で包埋後、ミクロトームを用いて薄い塗膜断面の切片を切り出し、永久プレパラートを作製した。生物顕微鏡と金属顕微鏡 (落射・暗視野) で層構造を観察し写真撮影を行った。(黒色塗膜の上に赤色塗膜が塗布されていたため、黒色塗膜の断面観察は行わなかった)

a　赤色面（表面）　　b　黒色面（裏面）

写真2　赤色塗膜破片

5. 結果

・顔料分析

黒色塗膜と赤色塗膜をXRFで分析を行なった結果、黒色塗膜からはケイ素(Si)、鉄(Fe)、アルミニウム(A1)、リン(P)、カルシウム(K)、チタン(Ti)が検出された(図1、表1)。一方、赤色塗膜からは水銀(Hg)と鉄(Fe)が検出された(図2、表2)。

・成分分析

黒色塗膜と赤色塗膜をATR-FTIRで分析を行なった結果、黒色塗膜は2920.2860.1640.1450.1260.1020㎝⁻¹付近に吸収ピークが見られることから漆が含まれている可能性が高いと考えられた(図3)。赤色塗膜は2930.2860.1710.1590.1450.1270.1040㎝⁻¹付近に吸収ピークが見られることから漆が含まれている可能性が高いと考えられた(図4)。

・塗膜の断面観察

厚みの薄い塗膜断面のプレパラートを生物顕微鏡で観察したところ、光を通す透明な層は見られなかった。(写真3)金属顕微鏡で観察した結果、下層の黒色塗膜の上に水銀朱を混入した約30μmの塗膜層が1層観察された(写真4)。

6. 考察

黒色塗膜は、顔料分析では土壌成分に由来する可能性が高い元素が検出され、黒色系の顔料を推定することはできなかった。しかし、断面観察で透明な層が見られなかったことより油煙や松煙のようなカーボン系の黒色物質を漆に混ぜたものと考えられた。

赤色塗膜に含まれる顔料は、分析で水銀が検出されたことより水銀朱(HgS)と考えられた。鉄は、比較的量が少なく土壌由来によるものと思われる。水銀朱を漆に混ぜたものを1層塗布したものと考えられた。

図1

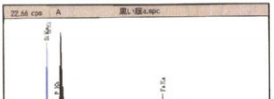


表1　黒色塗膜のXRF分析結果

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (kev)
13	A1	アルミニウム	K α	44.130	1.36- 1.61
14	Si	ケイ素	K α	122.180	1.61- 1.87
15	P	リン	K α	39.714	1.88- 2.15
20	Ca	カルシウム	K α	61.123	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	73.404	4.35- 4.66
26	Fe	鉄	K α	158.778	6.23- 6.57

図2

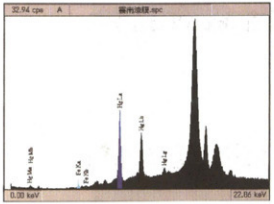
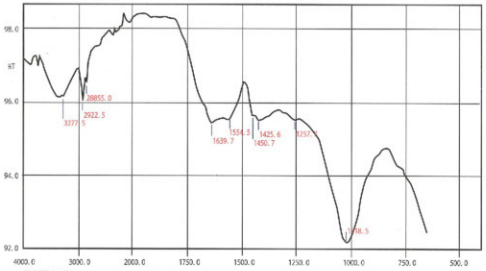


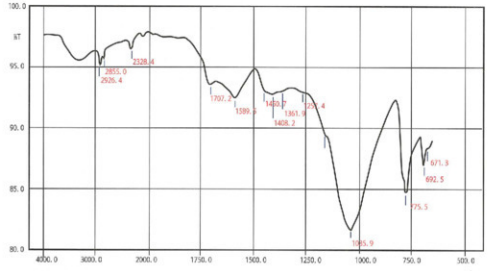
表2　赤色塗膜のXRF分析結果

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (kev)
26	Fe	鉄	K α	21.712	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L α	166.072	9.79-10.17



測定番号 1. IR5:
日付：　24.03.08
Type：　Imported
横座標：　1/cm
最小波数：　650.09
データ点数：　1738
時刻：　17.58.00
ユーザー：　S Search
縦座標：　%T
最大波数：　4000.87
データ間隔：1.92806
波数間隔：　1/cm

図3　黒色塗膜のATR－FTIRスペクトル



測定番号 2. IR5:
時刻：　16.27.00
日付：　18.03.08
ユーザー：　S Search
Type：　Imported
縦座標：　%T
横座標：　1/cm
最大波数：　4000.87
最小波数：　650.09
データ間隔：1.92806
データ点数：　1738
波数間隔：　1/cm

図4　赤色塗膜のATR－FTIRスペクトル

写真3　塗膜断面の生物顕微鏡写真（透過光）

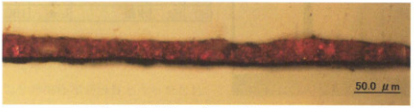


写真4　塗膜断面の金属顕微鏡写真（落射・暗視野）

第3節　万場Ⅰ遺跡出土木製品樹種同定及びAMS年代測定

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）・古野　毅（同）

はじめに

本報は、「万場Ⅰ遺跡」の発掘調査に伴って検出された遺構の年代を明らかにし、また遺構より出土した木質遺物の樹種を判定する目的で、雲南市教育委員会が文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した樹種同定及びAMS年代測定業務の報告書をまとめ直したものである。

調査位置（発掘地点）

雲南市木次町東日登地内（図1）

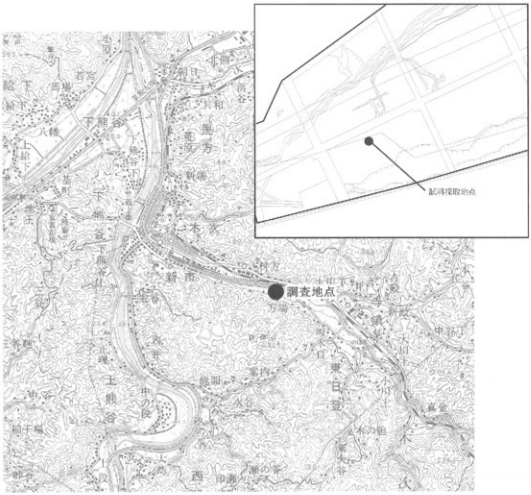


図1　万場Ⅰ遺跡の位置

分析資料について

雲南市教育委員会より提供を受けた原図をもとに、断面図を作成した。樹種同定及びAMS年代測定のため分析試料として雲南市教育委員会により採取・保管されていた木質遺物4点を御提供いただいた。

試料採取地点

図2試料採取地点の断面図を示す。分析試料（木質遺物）は16層中の斜線部分で採取された。また出土土器から、分析試料はすべて縄文時代晩期後半の遺物と推定されていた。

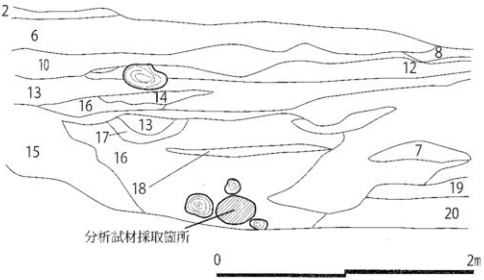


図2 試料採取層準

2 褐灰色微砂層　6 黄褐色粗砂層（灰色微砂が縞状に堆積する）　7 褐灰色粗砂層
8 灰褐色砂質土（軽石を少量含む）　10 褐灰色礫（灰色微砂が縞状に堆積する）　12 灰白色粗砂　13 灰白色砂質土　14 灰褐色微砂　15 黒色土（遺物包含層）　16 黄灰色砂礫　17 褐色シルト層　18 淡黒褐色微砂
19 黒色シルト層（無遺物層）　20 青黒シルト（無遺物層）

分析方法

樹種同定方法

(1) 原理

木々は、その発生学的な理由により、種あるいは属、科ごとに独自の形態をとる。その形態の違いは、樹形、葉形にとどまらず、生殖細部である花粉や、木々を直接形作る幹の木部組織にも及んでいる。木材樹種鑑定とは、対象とする木材（試料）の木材解剖学的な特徴を明らかにするとともに、既知の資料との比較検討から試料の樹種を同定することである。

(2) 観察方法

木部組織が軸方向に配列する細胞と、髄から放射状に配列する細胞（放射組織）とから構成されていることから、木材の横断面（木口面）、放射断面（まさ目面）、接線断面（板目面）の3断面を光学顕微鏡下で観察する。

①プレパラート作成

木質考古遺物にはその重要性から、切片作成にあたりできるだけ損傷を少なくする必要のあるものが少なくない。このため、ミクロトームによる切片作成（特に前処理としての試料整形）は避けるべきであり、剃刀による手作業が必要となる。従来行われていた、試料整形ミクロトームによる切片作成「破壊を前提としたプレパラート作成法」に対し、切片作成作業を全て剃刀による手作業で行い、できるだけ遺物に損傷を与えないようにする方法を、便宜上「非破壊法」と呼ぶことにする。光学顕微鏡下での観察を行うため、プレパラートを作製する手順を図3のフローチャートに示す。

②顕微鏡による観察および記載

上記の手順で作製したプレパラートを、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で観察、記載する。記載に当たっては3断面の顕微鏡写真を付け、用語などは基本的には島地ほか(1985)に従う。記載は同定した種類別に、同定した個体を網羅する形で行う。顕微鏡写真は、最も特徴的な個体についてのみ行う。

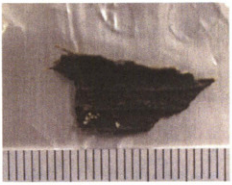
③樹種の同定

樹種の同定に当たっては、現生標本および資料との顕微鏡下での比較を基本とする。

年代測定試料

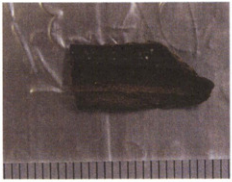
年代測定試料（USD-1)

試料の概要
試料名 :USD-1(No1)
記載 :16 層
重量 :0.2573g
試料の種類 : 木片



年代測定試料 (USD-2)

試料の概要
試料名 :USD-2(No2)
記載 :16 層
重量 :0.1336g
試料の種類 : 木片

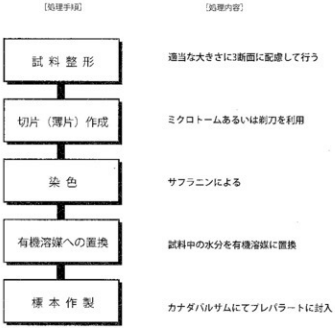


年代測定試料 (USD-3)

試料の概要
試料名 :USD-3(No3)
記載 :16 層
重量 :0.1391g
試料の種類 : 木片

年代測定試料 (USD-4)

試料の概要
試料名 :USD-4(No4)
記載 :16 層
重量 :0.1343g
試料の種類 : 木片



樹種鑑定用プレパラート作成フローチャート（破壊法）

図3 フローチャート

AMS 年代測定方法

(1) 原理

大気圏上層で熱中性子化した宇宙線が、窒素原子と原子核反応 ($^{14}N+^{n} \rightarrow {}^{14}C+H$) を起こして放射性炭素 ($^{14}C$) が生成される。この放射性炭素 ($^{14}C$) は、$CO_2$ として炭素リザーバー (大気 1.6%、腐植 2.6%、生物圏 0.8%、浅海 2.0%、深海 93%) に貯蔵され、一方では 5568(5730) 年の半減期で β^- 壊変をおこす。光合成等の生命活動を通じて生物体に固定される。

^{14}C の初期量は、それぞれの生命活動の行われたリザーバーにおける ^{14}C の平衡状態における量と同じと考えられ、生物体の死滅とともに、閉じた系の中で減衰していくと考えられる。つまり、生物遺体中の ^{14}C 濃度を測定し、現在の ^{14}C 濃度とくらべることにより、その生物が死んでから現在 (ただし、1950 年を現在とみなす) までの経過年数がわかる。

(2) 前処理及び測定方法

1) 前処理

塩酸による酸洗浄 (試料により、水酸化ナトリウムによるアルカリ処理)。

2) 試料の調整

酸化銅とともに加熱し、二酸化炭素を生成。
精製ラインにおいて水、二酸化硫黄などの不純物を除去。
精製した二酸化炭素を水素と鉄とともに加熱し、グラファイトに調整。
アルミ製ターゲットホノレダ」にプレス圧入

3) 測定

AMS(加速器質量分析) 法による。
タンデム型イオン加速器を用い ^{14}C 濃度を測定する。

4) 年代計算

年代計算を行う際には、^{14}C の半減期を 5568 年として行う。

5) 補正計算

$\delta^{13}C$ を測定・算出し、4) で得られた年代値を補正する。

6) 暦年代較正

oxcalver4.05(http://c14.arch.ox.ac.uk/embed.php?File=oxcal.htm1) を用い、INTCAL04 データ (Reimer et al.2004) を利用して算出する。

分析結果

樹種の同定結果と記載

分類群毎に記載を行った。下の表に同定結果を示した。また、下線試料の顕微鏡写真を巻末に掲載した。

(1) サワグルミ Pterocarya rhoifolia Sieb.et Zucc.

試料 No.1(W08091005)、2(W08091006)、3(W08091007)

記載：比較的大きい道管が単独あるいは放射方向２～４個複合して、年輪内に均等に分布する散孔材である。晩材部では道管の大きさが減じている。道管せん孔は単せん孔で、側壁の壁孔は交互状である。道管内腔にチロースが顕著に発達している。軸方向柔組織は短接線状ないし線状で目立ち、網状柔組織を形成して特徴的である。ターミナル柔組織も認められる。。放射組織はほとんど平伏細胞からなる同性で、１～２細胞幅であり、高さは低い。

以上の組織上の特徴からサワグルミと同定した。

(2) クリ Castanea crenata Sieb.et Zucc.

試料 No.4(W08091008)

記載：円形ないし楕円形の道管がほとんど単独で多列 (4 ～ 5) に配列する環孔材である。年輪の内側の道管は非常に大きく、孔圏部の幅は広い。孔圏外の幅は狭く、薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する傾向がある。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔にチロースがよく発達している。孔圏道管のまわりに周囲仮道管が存在している。軸方向柔組織は周囲状の他に短接線状が孔圏外において顕著に認められる。放射組織は単列同性で、大部分が 15 細胞高以下で低い。

以上の組織上の特徴から、クリと同定した。

試料 No.	修理番号	樹種名	出土地点（層位）	推定年代
1	W08091005	サワグルミ	16 層	縄文晩期後半
2	W08091006	サワグルミ	16 層	縄文晩期後半
3	W08091007	サワグルミ	16 層	縄文晩期後半
4	W08091008	クリ	16 層	縄文晩期後半

AMS 年代測定結果

AMS 年代測定結果を下の表に示す。また、巻末資料に暦年較正結果を示す。表には、4 種類の年代と、δ^{13}C 値を示してある。

測定年代は、従来は実年代として用いられてきた値である。^{14}C 濃度が環境、時代にかかわらず常に一定であるという仮定の下に、リビーの半減期 (5568 年) を用いて計算した値である。

補正 δ^{14}C 年代は、^{14}C 濃度が環境により変動することから、δ^{13}C を測定し、δ^{13}C= － 25% に規格化した ^{14}C 濃度を求め、年代値を算出したもの (暦年較正用年代) を 5 年単位で丸めた値である。

上記の年代は、いずれも西暦 1950 年からさかのぼった年代値で示してある。一方暦年代は、時代 (時間) とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の ^{14}C 濃度を、樹木の年輪や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた暦年代較正データ (MKI － 1 ～ 4 は INTCAL04、海洋性試料の MKI-5、6 は Marine04) を用いて較正したものである。較正には OxCcal ver.3.1 を用いている。また、較正に必要な補正年代値として補正 δ^{14}C 年代ではなく、暦年較正用年代を用いた。

試料			δ 13C	補正 13C	暦年較正用年代	暦年較正年代		測定番号
No.	層序	状態	(‰)	(yrBP)	(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	(PLD －)
1 (USD － 1)	16 層	木片 乾燥	28.27 ＋ 0.22	2700 ± 24	2701 ± 21	BC894 － 873(22.4%) BC894 － 814(45.8%)	BC900 － 809(95.1%)	11343
2 (USD － 2)	16 層	木片 乾燥	－ 27.85 ± 0.23	2682 ± 24	2682 ＋ 24	BC842 － 806(68.2%)	BC896 － 802(95.4%)	11344
3 (USD － 3)	16 層	木片 乾燥	－ 28.38 ± 0.19	2753 ± 24	2753 ± 24	BC919 － 890(31.6%) BC881 － 1844(36.6%)	BC974 － 957(5.1%) BC939 － 831(90.3%)	11345
4 (USD － 4)	16 層	木片 乾燥	26.32 ± 0.20	2390 ± 23	2399 ± 23	BC509 － 438(54.0%) BC421 － 404(14.2%)	BC716 － 694(3.1%) BC540 － 398(92.3%)	11346

測定年代について

図４に示したように、大きく２つのグループ（試料 No1 ～３と試料 No4）に分かれる。試 No1 ～３はおよそ 2700yrBP(BC974-802:2 σ）の年代を示し、誤差の範囲で一致する。これらの樹種は「サワグルミ」と同じ事から、同じ木が折れたものである可能性も指摘できる。一方試料 No4 は 2400yrBP(BC716-398) の年代を示し、100 年以上新しい値を示す。

出土遺物（土器）から分析した試料は縄文時代晩期後半という年代が推定されていた。今回得られた年代のうち、試料 No4 で得られた年代が同時期に相当する。

以上のことから、16 層から得られた４試料の内、「サワグルミ」は一次堆積したものである可能性が高い。また、「クリ」は土器とともに縄文時代晩期後半に堆積したものと推定できる。

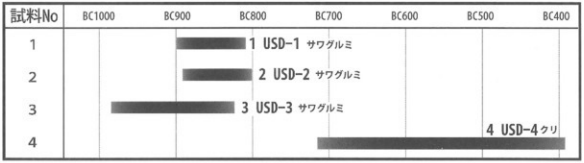


図４　年代測定値の分布

まとめ

万場Ⅰ遺跡発掘調査に伴って検出された自然流路埋土である 16 層から得られた４点の木質遺物の樹種同定、年代推定を行った結果、以下のことが明らかになった。

樹種は、３点が「サワグルミ」、１点が「クリ」であった。「サワグルミ」から得られた年代測定値が３点ともほぼ同じであったことから、同じ木が折れたものである可能性が指摘できる。

年代測定値は２つのグループに分かれたが、いずれも縄文時代晩期を示す値であった。このうち新しい年代値 (2400 ± 25yrBP:BC716-BC398) は出土土器から推定された縄文時代晩期後半を示し、自然流路の時期を表す可能性が高い。

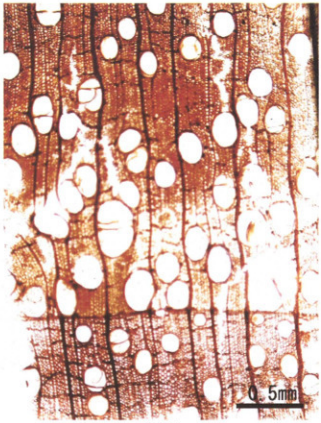
引用文献

Paula J Reimer, Mike G L Baillie, Eaouard Bard, Alex Bayliss, J Warren Beck, Chanda J H Bertrand, Paul G Blackwell, Caitlin E Buck, George S Burr, Kirsten B Cutler, Paul E Damon, R Lawrence Edwards, Richard G Fairbanks, Michael Friedrich, Thomas P Guilderson, Alan G Hogg, Komad A Hughen, Bernd Kromer, Gerry Mc Cormac, Sturt Manning, Christopher Bronk Ramsey, Ron W Reimer, Sabine Remmele, John R Southon, Minze Stuiver, Sahra Talamo, FWTaylor, Johannesvander Plicht, Constanze E Weyhenmeyer,2004,IntCal04terrestrial radiocarbonagecalibration,0-26calkyrBP,Radiocarbon 46, 1029-1058.

藤地謙・佐伯浩・原田浩・塩倉高義・石田茂雄・重松佩生・須藤彰司 (1985) 木材の構造 .276p 文永堂 , 東京

サワグルミ　Pterocarya rhoifolia Sieb. et Zucc.

試料 No1(W08091005)



断面図

接線断面

放射断面

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.

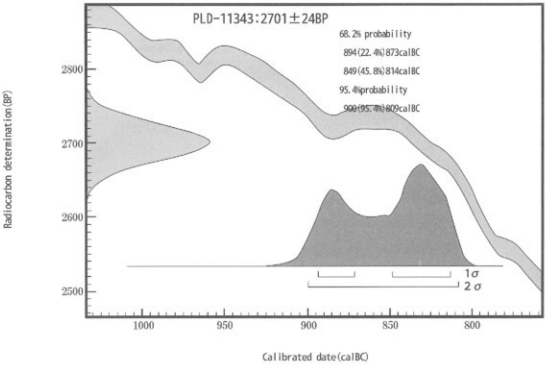
試料 No4(W08091008)

断面図

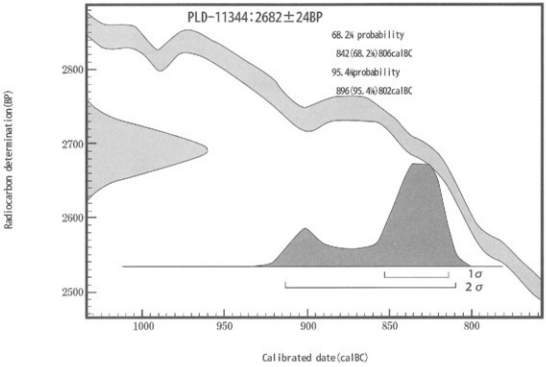
接線断面

放射断面

暦年較正結果

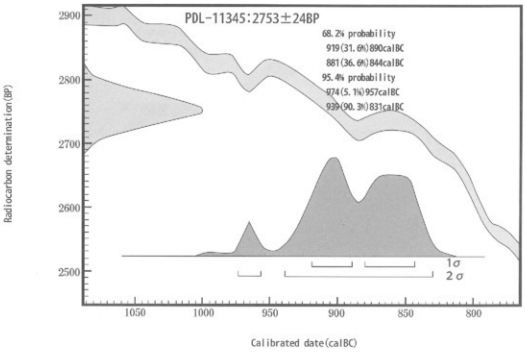


暦年較正結果：1　(USD－1)

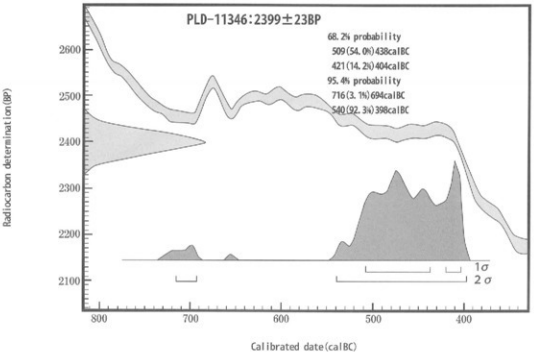


暦年較正結果：2　(USD－2)

暦年較正結果



暦年較正結果：3 （USD－3）



暦年較正結果：4 （USD－4）

第5章　まとめ

第1節　周辺の遺跡

万場Ⅰ遺跡では湧水や調査面積の制約などで遺構面の確認はできなかった。しかし、縄文時代晩期の彩文土器や木製部材の出土は斐伊川中流域の縄文文化をあらためて検討する好資料になったと言える。以下、調査をとおして検討したことについてまとめてみたい。

1．原始・古代における万場Ⅰ遺跡周辺の様相について

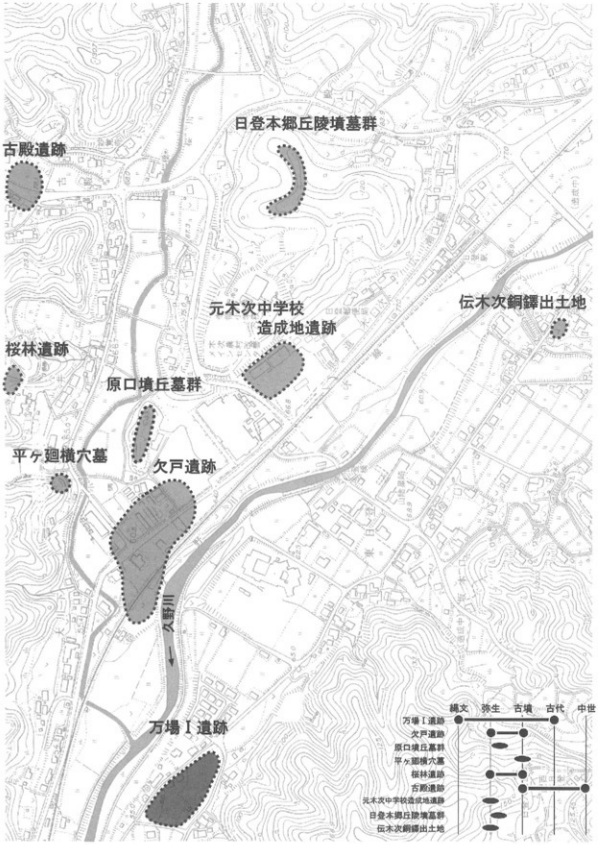
本遺跡は、久野川左岸の低河岸段丘下流部の裾に位置している。直線にして50 mほど後背には山丘が迫っていて、立地的には決して良好な生活空間とはいえない。また、本遺跡の北東わずか40 mには久野川が西北に向かって流れているが、調査により縄文土器を含む黒色シルト層が検出されたことから当時、本遺跡は久野川の縁辺あたりに位置していたとも推察される。久野川沿いでの縄文遺跡の発見は本遺跡が初例であり、出土した土器から少なくとも後期初頭には縄文人の暮らしがあったと考えられる。本遺跡から南東に向かって山越えすると斐伊川本流に突き当たり、ここでは北原本郷遺跡をはじめとした縄文、弥生遺跡が広がっている。この遺跡群との中間にある谷間には縄文中期の土器あるいは弥生中期から後期の集落跡が発見された垣ノ内遺跡をはじめとした縄文、弥生土器散布地が点在する。

本遺跡が所在する地域を流れる久野川の左岸は東日登、右岸は寺領となっている。いずれも低河岸段丘が広がる生活には好適な地形である。今のところ東日登地内では本遺跡のほかに、伝木次銅鐸出土地があるのみだが、右岸の寺領地内となると、欠戸遺跡や桜林遺跡など河岸段丘や山丘斜面に弥生後期の土器散布地が広がる。また、この一帯が見渡せる丘陵上には弥生後期から古墳時代初頭の地域の首長墓とみられる原口墳墓群や日登本郷丘陵墳墓群が所在し、弥生時代後期には寺領本郷一帯に集落が広がっていたことがわかる。なお、古墳時代後期になって、祭器と考えられる金銅装刀子が出土した平ヶ廻横穴墓も近辺に所在する。

本遺跡の土器包含層からは、弥生中期後半から後期の土器のほか、古墳時代初頭の土師器も出土した。古墳時代の土器には完形のものが含まれている。遺跡近くの在住者によると、かつて本遺跡地内で圃場整備が行われた際にも完形の壺が出土したとの情報を得た。発掘調査で出土した完形の小形壺は、この時の圃場整備の際に移動したものとみられ、その際、遺構面は削られてしまった可能性も考えられる。とすれば、弥生中期後半から古墳時代初頭ころに所在したと見られる集落は、本遺跡の間じかに営まれていたと推察される。

このように、寺領本郷周辺では、縄文遺跡の所在は本遺跡に限られ、続く弥生時代でも前期から中期前半にかけての暮らしのあとは今のところ確認されていない。しかし、寺領本郷周辺の南側には、前述したように外縁付鈕式Ⅱ式の「伝木次銅鐸」出土地が所在している。この銅鐸出土について、新修木次町誌によれば、明治24年頃、阿井街道の改修工事の際、旧日原社（現大森神社）境内から土器も併せて出土したとされている。とすれば、弥生中期の段階でも低河岸段丘地帯の一角に集落が存在していたことが窺われる。

弥生後期に入ると前述したように飛躍的に遺跡が拡大する。この時期、人の流れに画期があったのかもしれない。斐伊川本流に近いことや久野川両岸に広がる低河岸段丘の地形環境が大きく影響していることが考えられる。



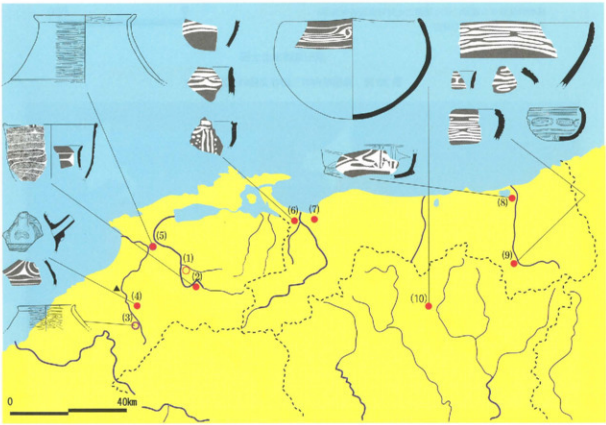
第37図　万場Ⅰ遺跡周辺の遺跡

第2節　東日本系の土器について

2．東日本系の土器について

近年、中・四国地方では東日本系土器の出土例が増えつつある。山陰地方に限ってみると、島根県では、三田谷遺跡（出雲市）、槻屋Ⅲ遺跡（飯南町）、原田遺跡（奥出雲町）などがあり、鳥取県では智頭枕田遺跡や目久美遺跡など7遺跡で報告されている。このうち、三田谷遺跡や原田遺跡など、縄文晩期後葉の遺跡には、縦位に施文された数条の短沈線と、横位に展開する三角形または三叉状の刺込文で構成される文様をもつ、三田谷文様と呼ばれる東日本系の土器が散見されている。斐伊川流域では、本遺跡のほか、原田遺跡（奥出雲町）でも出土しており、このころ東日本の土器文化が直接、間接的に山陰地方にも浸透したことが窺われる。

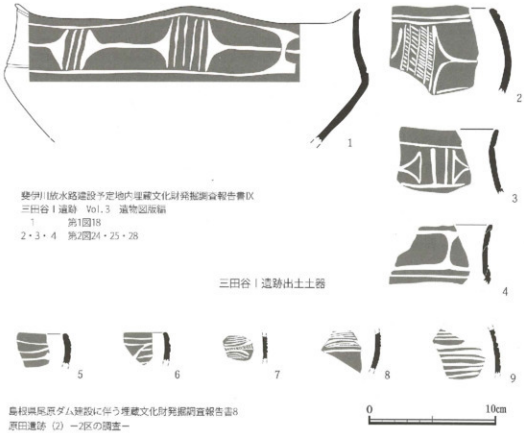
このように山陰地方では、三田谷文様のほかに亀ヶ岡系、安行系、浮線文系といった東日本系の土器が確認されているが、これまでに出土した土器はいずれも有文土器である。一方、本遺跡から出土した土器は、顔料を用いて文様が描かれた彩文土器で、東日本系の彩文土器としては山陰でも初例となった。本遺跡では、晩期Ⅳ～Ⅵ期の突帯文土器も出土しており、時期幅はあるが、彩文土器の形式と編年的には矛盾はないと思われる。



山陰の東日本系土器・夜臼系土器出土遺跡

(1) 万場Ⅰ遺跡　(2) 原田遺跡　(3) 森Ⅲ遺跡　● 東日本系土器出土遺跡
(4) 槻屋Ⅲ遺跡　(5) 三田谷遺跡　(6) 目久美遺跡　○ 夜臼系土器出土遺跡
(7) 河原田A遺跡　(8) 古海遺跡　(9) 智頭枕田遺跡　▲ 下山遺跡（東北地方から搬入されたとみられる土偶が出土）
(10) 久田堀ノ内遺跡

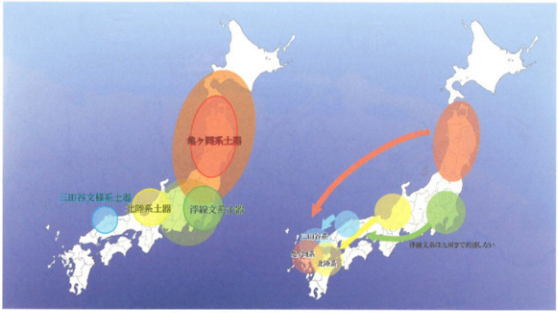
第38図　山陰地方の東日本系土器出土遺跡



斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ
三田谷Ⅰ遺跡　Vol.3　遺物図版編
1　　第1図18
2・3・4　第2図24・25・28

島根県尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8
原田遺跡（2）－2区の調査－
5～9　第72図62～66

第 39 図　島根県内の三田谷文様の土器 S=1/3



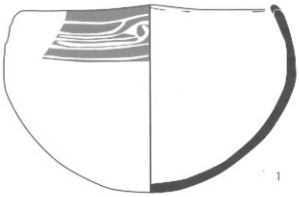
夜臼Ⅱa式/板付Ⅰa式一大洞C2式新相/大洞A式古相

西日本では大洞 B-C 式期に東日本系（亀ヶ岡系）土器の出土が増加し、東西交流が活発化する。しかし続く大洞 C_2 式の時期になると、西日本における亀ヶ岡系土器の出土例は急速に減少し、前段階に行われた活発な交流活動は一旦停滞するようである。

大洞 C_2 式段階で停滞した交流は、次段階の大洞 C_2 式－大洞 A 古段階で再び活発化し交流は西日本全体に広がり遠くは奄美大島まで到達する。この段階で西日本に広がった東日本系の土器は亀ヶ岡系土器の他に関東地方の浮線文系土器（安行式）や北陸系土器、三田谷系土器である。このうち浮線文系の土器は九州地方までその分布を拡大しないようである。

新弥生時代のはじまり第２巻　縄文時代から弥生時代へ
西本豊弘編（雄山閣）板付Ⅰ式土器成立における亀ヶ岡系土器の演与（浜栗博己・小林青樹）

第 40 図　東日本系土器の分布と展開



大洞Ｂ－安行Ⅲａ式

三田谷文様系土器

三田谷文様系土器

浮線文系土器

三田谷文様系土器

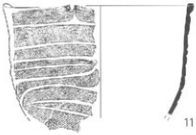
浮線文系土器

北陸系（長竹式）
三田谷文様系土器

大洞Ａ式

浮線文系土器

三田谷文様系土器



大洞Ｂ－安行Ⅲａ式

三田谷文様系土器

大洞Ｂ－安行Ⅲａ式

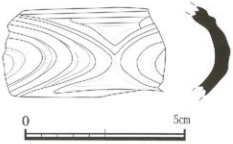
大洞Ｂ－安行Ⅲａ式

1久田堀ノ内遺跡　2古海遺跡　3～7智頭枕田遺跡
8～10目久美遺跡　11・12原田遺跡　13・14板屋Ⅲ遺跡

第41図　山陰地方出土の東日本系土器 S=1/3

本遺跡から出土した２点の彩文土器の形式は、いずれも北部九州の夜臼系の壺形土器であり、夜臼Ⅰ～Ⅱａ式とみられる。つまり、壺形土器は北部九州系のものでありながら、意匠は、東北日本の亀ヶ岡式土器に見られる彩文が施されていることになる。亀ヶ岡式土器に代表される東日本系土器のほとんどは、肩部から体部にかけて施文あるいは彩文が施されるが、本遺跡出土の彩文土器は口縁から頸部に彩文が施されている。施文個所が似る例として、福岡市、野多目遺跡群から出土した晩期末葉とみられる夜臼式の小形壺に口縁から肩部にかけて彩文が見受けられるものがある。

野多目遺跡出土彩文土器（1/3）



雀居遺跡 SD003 出土彩文土器（原寸）

第 42 図　北部九州出土彩文土器実測図

本遺跡から出土した彩文土器の文様は、C字状の文様が左右対称に施文されていると考えられ、いわゆるC字文と呼ばれている。この文様が漆塗りで施された有文の亀ヶ岡式土器が福岡市、雀居遺跡から出土している。このことから、東北日本系の有文土器も含めて、縄文晩期には東北日本から土器文化あるいは漆塗りの技術が中国地方の山間部を含め、広く西日本、狭義ではまで伝わっていたことが窺われる。

本遺跡から出土した彩文土器は、東北日本から直接運ばれた可能性は少ない。当地での、縄文時代の赤色顔料としては、ほとんどがベンガラである。ところが、本遺跡の彩文土器に用いられた赤色顔料は、科学分析により水銀朱であることが判明した。近年行われた尾原ダム建設に伴う発掘調査により、斐伊川中流域に所在する北原本郷遺跡、原田遺跡などからも赤色塗彩土器や土製品に水銀朱が使われていることがわかった。北原本郷遺跡は縄文後期後葉、原田遺跡が晩期前葉と制作年代に時期幅はあるが、在地で水銀朱を調達することは困難であり、外地からの搬入が想定されている。これらの水銀朱がどのような過程、例えば水銀朱が単独で持ち込まれたのか、あるいは東北日本の漆を用いた彩文技法などとともに出雲の山間部まで伝わったのかは不明である。

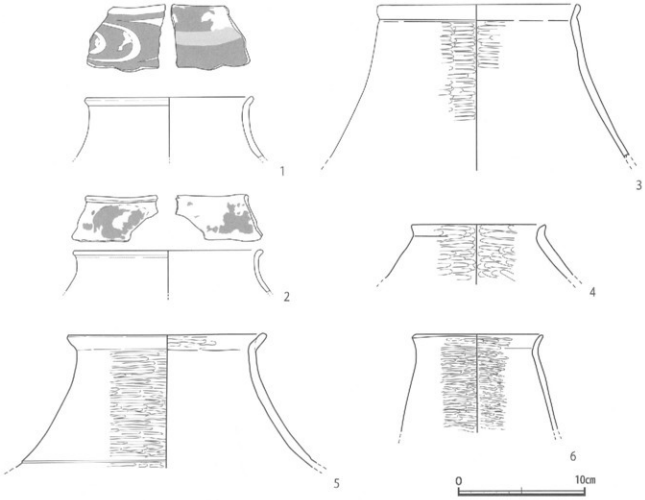
第 43 図　万場Ⅰ遺跡出土彩文土器の成立過程

第３節　夜臼系壺形土器について

３．夜臼系壺形土器と突帯文土器について

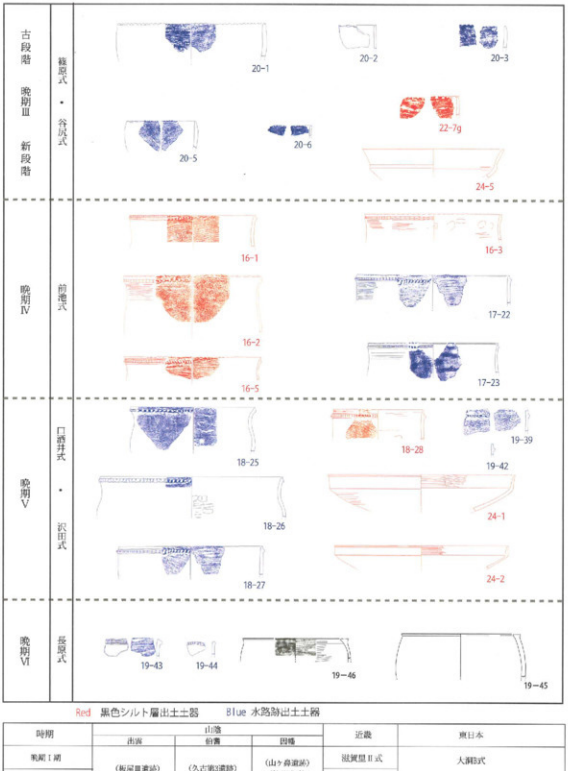
縄文晩期後半から弥生前期初頭に位置付けられる北部九州の土器形式の一つである夜臼式土器は、突帯文系土器群に属しているが、器種には壺も含まれ、福岡県の板付遺跡や野多目遺跡出土の壺と近似の壺形土器が神戸川水系の三田谷Ⅰ遺跡と森Ⅲ遺跡からも出土している。今のところ、壺形土器は出雲郡でしか確認されていない。三田谷Ⅰ遺跡では複数の土器が出土しており、搬入されたものと見られている。このころには北部九州から山陰出雲郡、さらにその山間地へも交流が活発に行われていた可能性が考えられる。

なお、本遺跡では縄文晩期から弥生初頭の編年に用いられる突帯文土器も出土している。第21図に示すように、山陰地方における晩期の編年のうちⅣ期からⅥ期までが含まれると考えられる。このうち突帯文土器全体の出土点数は少ないものの、比率としては晩期Ⅳ期が最も多く、次いでⅤ期が多かった。夜臼系壺形土器は夜臼Ⅰ～2a式で、この編年に当てはめればⅣ期に当たると考えられる。さらに、彩文土器の文様についても亀ヶ岡系の大洞C2～A1式と見られ、時期との矛盾はないと思われる。弥生時代の開始については、地域によって時期が分かれるところであるが、東の彩文文化と西の土器様式との融合は、縄文晩期後半、いわゆる弥生時代の幕開け前夜には人々の交流が活発に行われていた可能性を示しているのかもしれない。



1・2万場Ⅰ遺跡　3・4森Ⅲ遺跡　5・6三田谷遺跡

第44図　島根県内の夜臼系壺形土器実測図　S＝1/3



Red　黒色シルト層出土土器　　Blue　水路跡出土土器

時期		出雲	山陰 伯耆	因幡	近畿	東日本	
晩期Ⅰ期		（板屋Ⅲ遺跡）	（久古第3遺跡）	（山ヶ鼻遺跡） （桂見遺跡）	滋賀里Ⅱ式	大洞B式	
晩期Ⅱ期					滋賀里Ⅲ式	大洞BC式	
晩期前期	古	（原川遺跡）	（井手殿遺跡）	（桂見遺跡） （入船川遺跡）	篠原式 古	大洞BC式	
	中	（神原Ⅱ遺跡）			篠原式 新		
晩期Ⅳ期		（＋）	（＋）	（桂見遺跡）	滋賀里Ⅳ式	大洞C2式	
晩期Ⅴ期	古	（三田谷Ⅰ遺跡）	（井手殿遺跡）	（桂見遺跡）	口酒井		
	新	沢田式	古市河原田式	（＋）	船橋式	女鳥羽川式	大洞A式
晩期Ⅵ期	古	（船塚第Ⅰ遺跡）	（＋）	古海式	長原式	離山式	
	新	Ⅰ－1　越敷山式	Ⅰ－1　長瀬高式	（＋）	（水走）第Ⅰ様式	氷Ⅰ式 古 中 新	
弥生前期		Ⅰ－2 Ⅰ－3	Ⅰ－2 Ⅰ－3	Ⅰ－2 Ⅰ－3			大洞A′式

第16回　中四国縄文研究会　縄文晩期の山陰地方発表資料集より

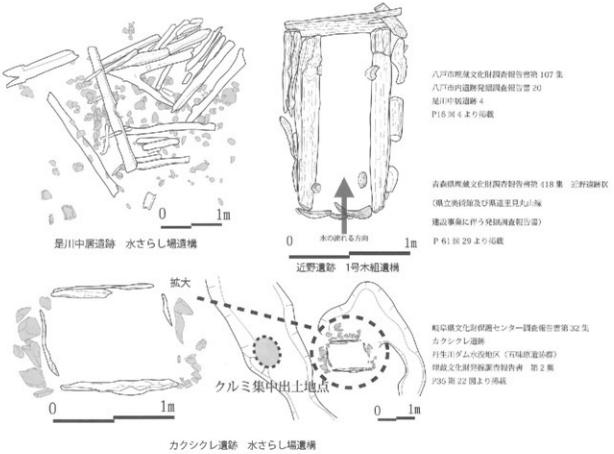
第45図　万場Ⅰ遺跡出土縄文晩期土器の変遷と広域編年対応表

第4節　木質部材について

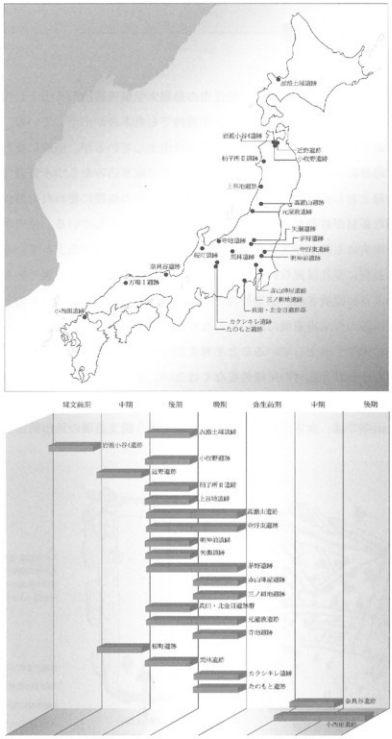
4．木質部材について

縄文時代の木器については、これまで松江市の島根大学構内遺跡から出土した丸木舟や舟の櫂などのほか、出雲市の三田谷遺跡、益田市の沖手遺跡でも丸木舟が出土している。また、松江市、西川津遺跡出土の銛形木製品のように何らかの製品は出土しているが、施設に使われた部材の出土は例が少ない。水路跡縁から出土した板材の縁の中ほどに縁り込みをもつ木質遺物は、板材の両側につなぎのための紐とおし孔と思われる搾孔があり、何らかの施設に使われた部材と見られる。

この部材に似た板材が青森県八戸市、是川中居遺跡から出土している。是川中居遺跡から出土した板材にも縁の中央にも抉りが入れられ、水路に直交するかたちで出土している。しかし、本遺跡のように部材の両側に穿孔は見られない。報告書によると、この部材は刳り込み部を上側にして水路をせき止めるように設置され、水量の調整や流水の経路を決めるためのものとされ、食料加工や木材の貯蔵など水辺の作業用遺構に用いられたものと考えられている。万場Ⅰ遺跡でも、水路跡からトチやクルミの実殻が出土していることを考え合わせると、これらの堅果類をアク抜きするための水さらし場に設けられた部材の可能性もなくはない。その一方で、板材をつなぎ合わせるためと思われる穿孔や刳り込み部が丁寧に面取りされていることから考えると別の部材である可能性も否定はできない。山陰では、水さらし場を含めた水路を伴う縄文遺構の検出例は少なく、今後の調査を待ちたい。



第46図　全国各地の縄文時代の水さらし場遺構



第47図　水さらし場遺構検出遺跡とその年代

写真3　万場Ⅰ遺跡水路跡出土トチ・クルミ

【参考文献】

・島根県教育委員会 2006『原田遺跡 (2)』『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 8』
・島根県教育委員会 2007『北原本郷遺跡 2』『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9』
・島根県教育委員会『城台Ⅰ遺跡 尾台Ⅱ遺跡 家ノ船Ⅱ遺跡 3区 川平Ⅰ遺跡』『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1』 2003
・島根県教育委員会『家の後Ⅰ遺跡・苗ノ内遺跡』『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
・柴崎恭子 2008「原閉遺跡ならびに北原本郷遺跡から出土した土器に付着した赤色顔料について」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 12 一原出遺跡 (4)』
・島根県教育委員会 1998『板屋遺跡』『志津美ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 5』
・小林青樹・岡田直、・下江健太 2000「三出谷Ⅰ遺跡出土縄文・弥生移行期土器群の諸問題」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－三出谷Ⅰ遺跡 Vol.3』
・仁多町教育委員会『常乗寺古墳』1985
・木次町教育委員会『斐伊中山古墳群－古文群』『木次町文化財調査報告書第 2 集』 1993
・仁多町教育委員会『日ヤケたたら跡』『芝原遺跡』『富田小学校建設予定地内発掘調査報告書』 1994
・木次町教育委員会『平田遺跡、木次町文化財調査報告書第 4 集』 1997
・木次町教育委員会『家の上遺跡・石屋遺跡』『尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1』 1998
・木次町教育委員会『下廻内たたら跡・北原Ⅰ遺跡・新屋の原遺跡』『尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2』 1999
・木次町教育委員会『平出遺跡第Ⅱ調査区』『斐伊川広域一般河川改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 2000
・仁多町教育委員会『殿ヶ迫横穴墓群』『西尾社遺跡』『亀ヶ谷遺跡』『シベロ遺跡』『時仏遺跡』『時仏山横穴墓』『尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 2001
・木次町教育委員会『下布施横穴墓群・常久寺遺跡』『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4』 2002
・木次町教育委員会『家ノ前遺跡・谷口遺跡・宮サコ遺跡』『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5』 2003
・小林達雄 1994『縄文土器大観 4』小学館
・酒田竜彦 2006「中国地方における縄文・弥生移行期の東日本系土器」『考古学ジャーナル 549』ニュ－サイエンス社
・『日本の美術 12』第 499 号縄文土器晩期 至文堂
・新弥生時代のはじまり第 2 巻 縄文時代から弥生時代へ 西本豊弘編（雄山閣）板付Ⅰ式十器成立における亀ヶ岡系土器の関与（設楽博己・小林青樹）
・中四国縄文研究会 2005『第 16 回中四国縄文研究会 －縄文時代晩期の山陰地方発表資料集』
・福岡市教育委員会 1987「野多目遺跡群－穂積期の水田遺跡の調査」『福岡市埋蔵文化財発掘 調査報告書第 159 集』
・八戸市教育委員会 2004『是川中居遺跡 4』『八戸市内遺跡発掘調査報告書 20』
・青森県教育委員会 2006『近野遺跡Ⅸ』『県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』
・岐阜県文化財保護センター 1997「カクシクレ遺跡」『荊牛川ダム水没地区（五味原遺跡群）埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集』
・『木次町誌』 1972
・『三刀屋町誌』 1982
・『加茂町誌』 1984
・『仁多町誌』 1999
・『横田町誌』 1968
・『新修木次町誌』 2004
・加藤義成校注 『出雲国風土記』（改版 13 刷）1998 松江今井書店

写真図版

万場Ⅰ遺跡遠景（久野川下流より撮影）

万場Ⅰ遺跡遠景（久野川上流より撮影）

図版２

１区調査前風景

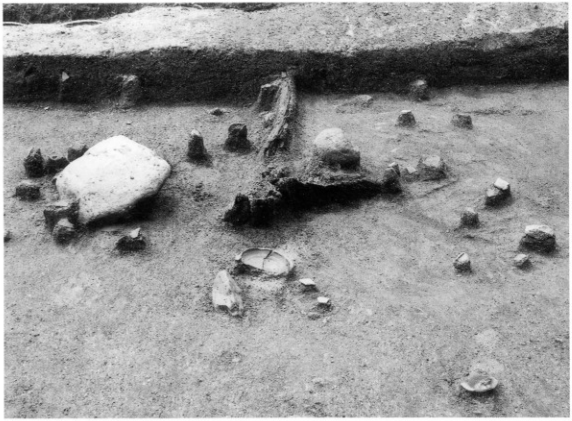
２区調査前風景

19 年度調査区近景南東より撮影

粗製縄文土器出土状況

9 グリッド東壁土層堆積状況

11 グリッド東壁土層堆積状況

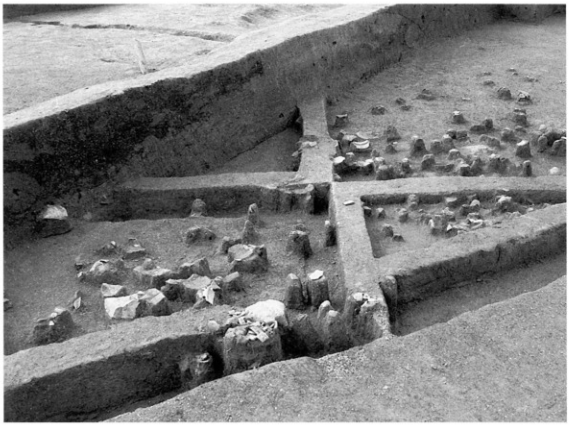


10 グリッド土器出土状況

14 グリッド土器出土状況

12 グリッド土器溜り　その 1

12 グリッド土器溜り　その 2



13 グリッド土器溜り　その 1

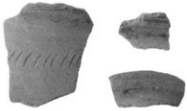
13 グリッド土器溜り　その 2

万場Ⅰ遺跡と周辺の遺跡

伝木次銅鐸

弥生土器

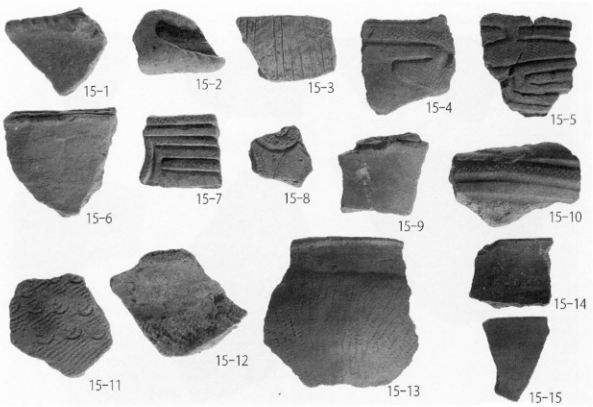
元木次中学校造成地遺跡出土遺物

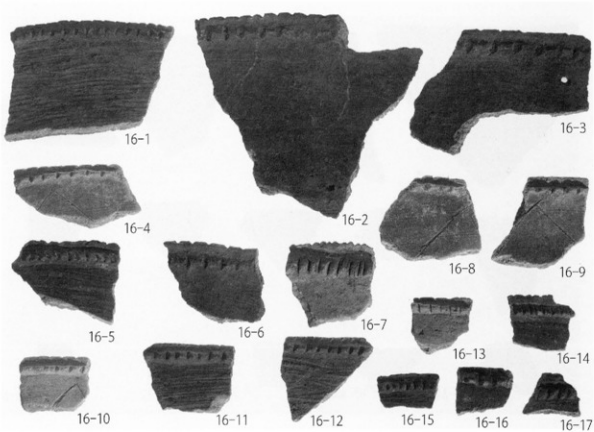


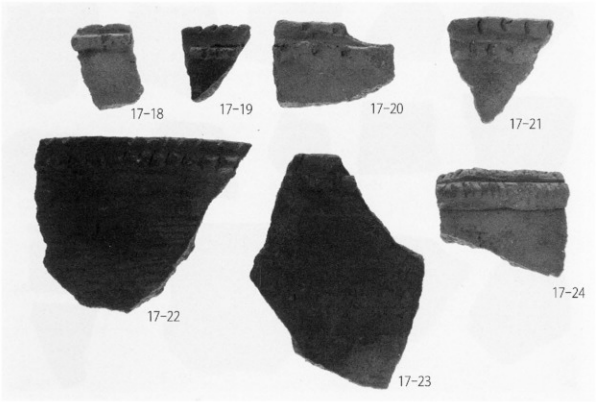
桜林遺跡出土土器

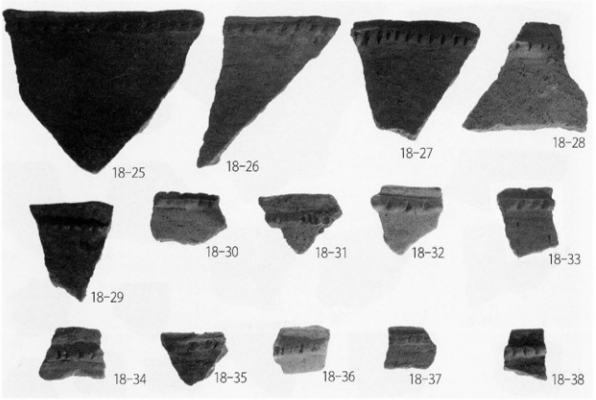
平ヶ廻横穴墓出土金銅装刀子

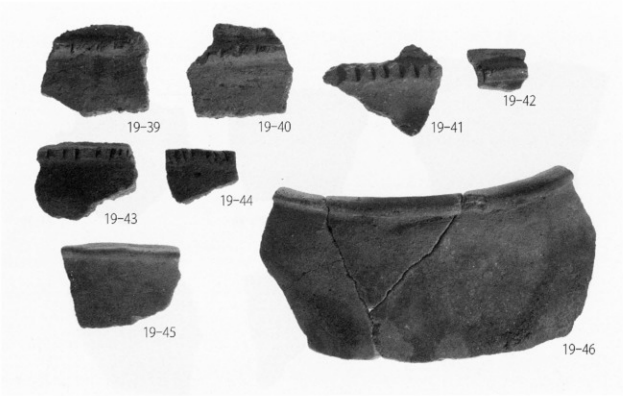
周辺遺跡の出土遺物

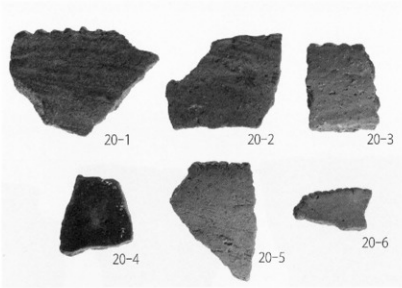

15-1
15-2
15-3
15-4
15-5
15-6
15-7
15-8
15-9
15-10
15-11
15-12
15-13
15-14
15-15

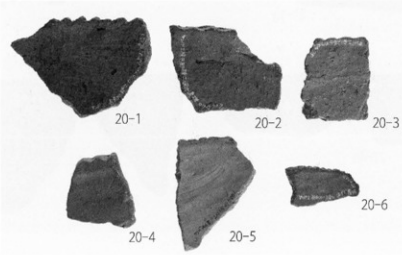

16-1
16-2
16-3
16-4
16-5
16-6
16-7
16-8
16-9
16-10
16-11
16-12
16-13
16-14
16-15
16-16
16-17

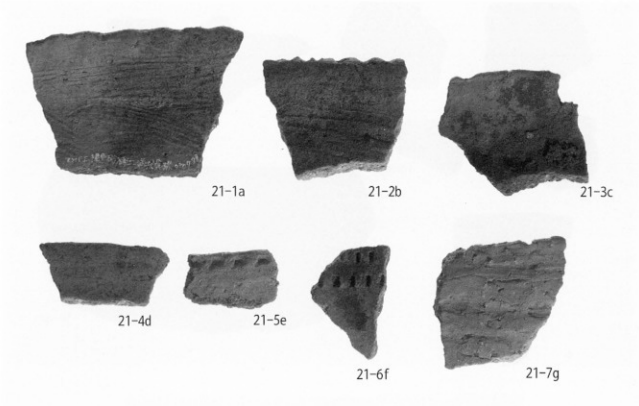

17-18
17-19
17-20
17-21
17-22
17-23
17-24

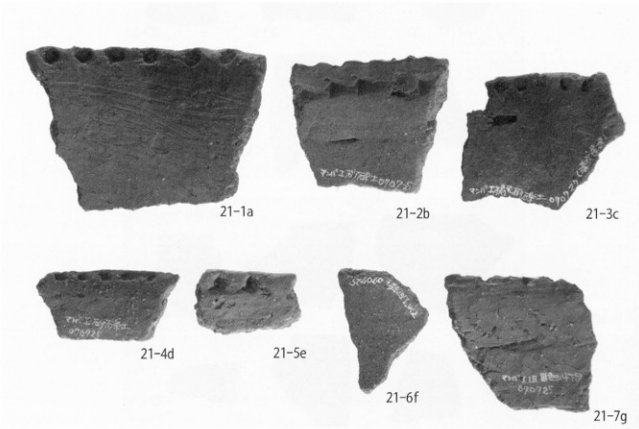

18-25
18-26
18-27
18-28
18-29
18-30
18-31
18-32
18-33
18-34
18-35
18-36
18-37
18-38

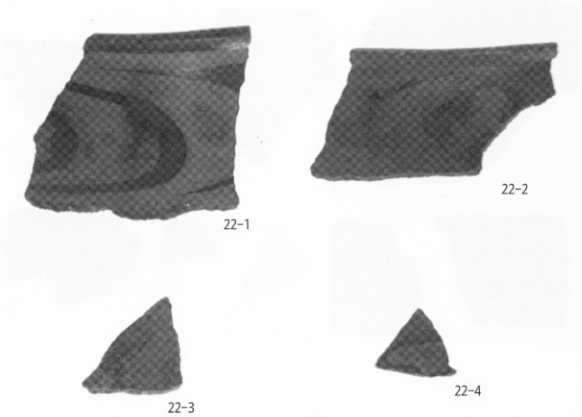

19-39
19-40
19-41
19-42
19-43
19-44
19-45
19-46

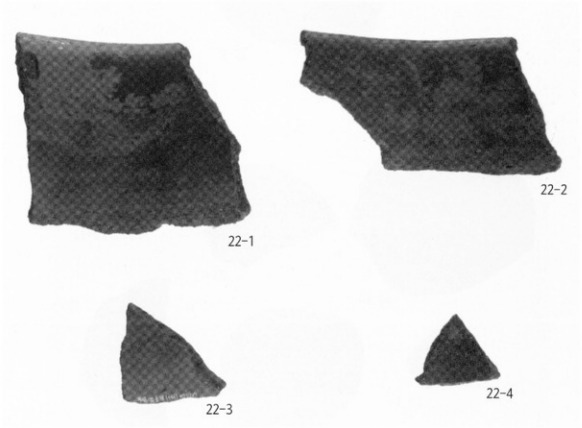

20-1
20-2
20-3
20-4
20-5
20-6

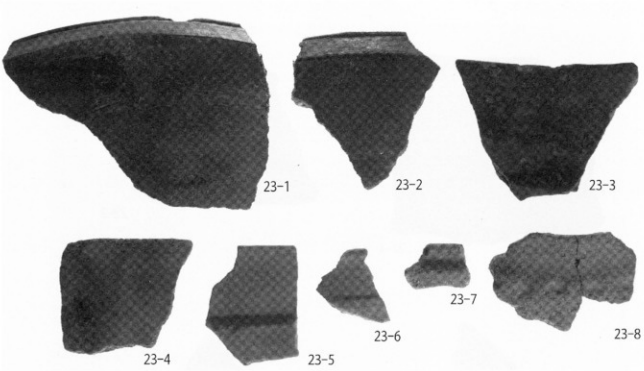

20-1
20-2
20-3
20-4
20-5
20-6

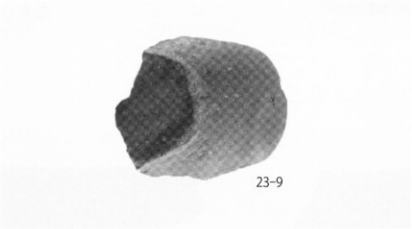

21-1a
21-2b
21-3c
21-4d
21-5e
21-6f
21-7g

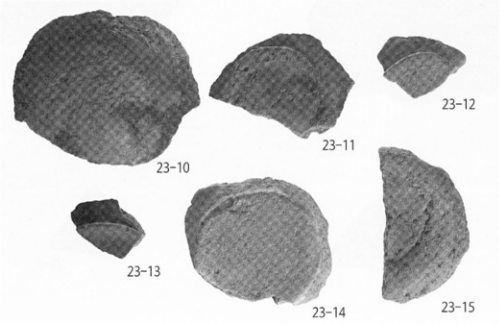

21-1a
21-2b
21-3c
21-4d
21-5e
21-6f
21-7g

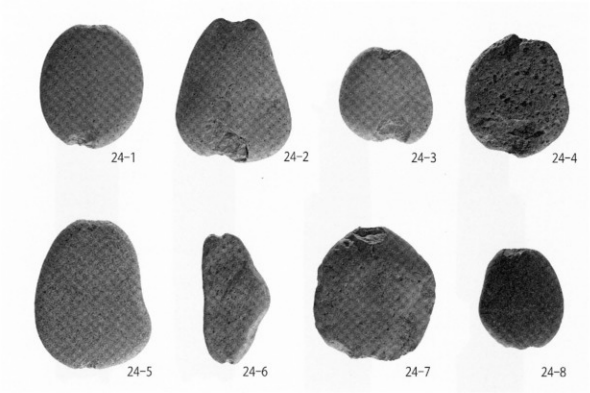

22-1
22-2
22-3
22-4

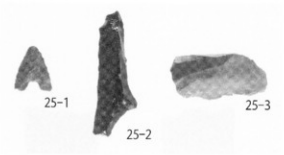

22-1
22-2
22-3
22-4


23-1
23-2
23-3
23-4
23-5
23-6
23-7
23-8

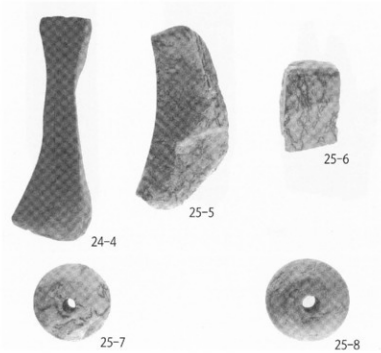

23-9

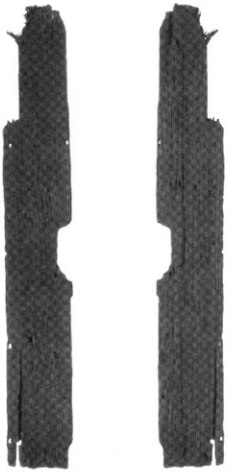

23-10
23-11
23-12
23-13
23-14
23-15


24-1
24-2
24-3
24-4
24-5
24-6
24-7
24-8

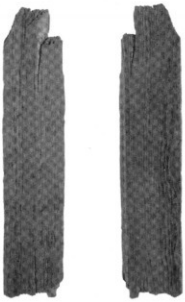

25-1
25-2
25-3

25-9

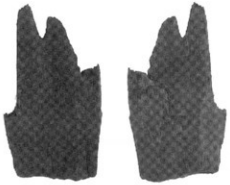

24-4
25-5
25-6
25-7
25-8



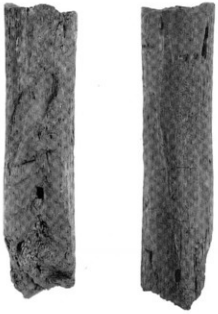
26-1



26-2

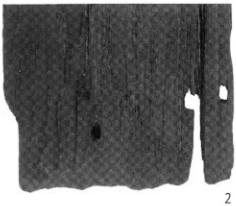


26-4

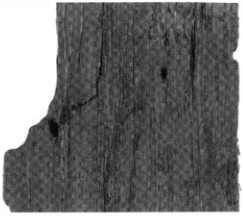


26-3

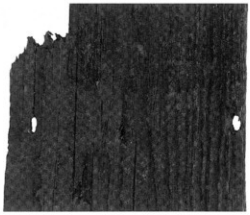
1



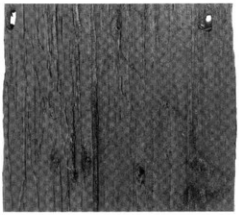
2



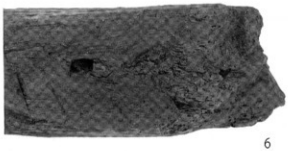
3



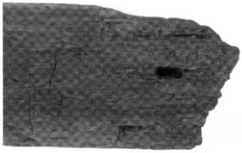
4



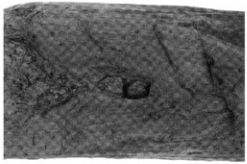
5



6

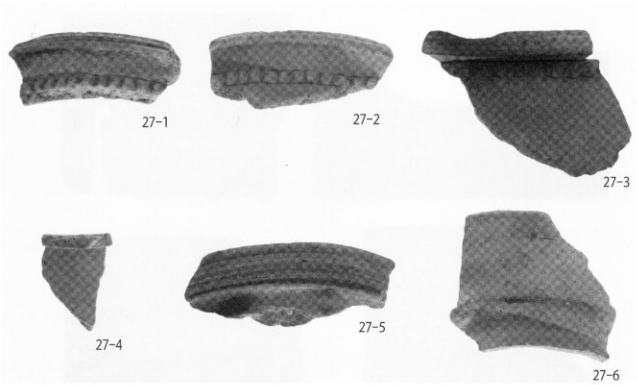


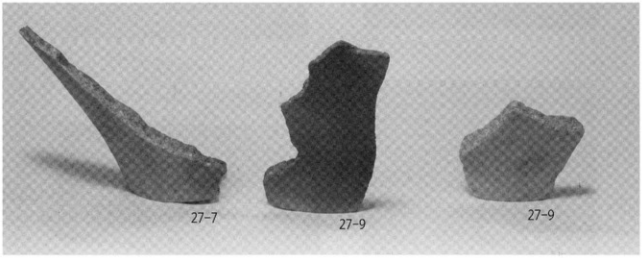
7

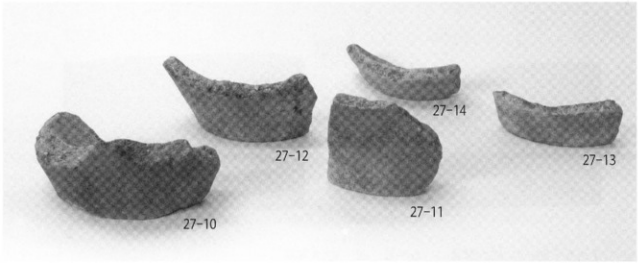


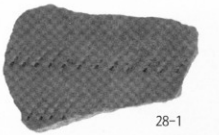
8

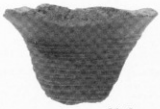
1～5　26－1　拡大写真　　6～8　26－3拡大写真


27-1
27-2
27-3
27-4
27-5
27-6

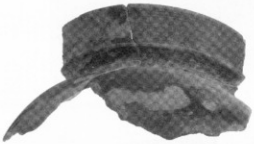

27-7
27-9
27-9


27-14
27-12
27-13
27-10
27-11


28-1

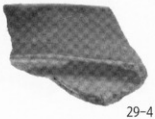

28-2

28-3


29-1

29-2

29-3


29-4

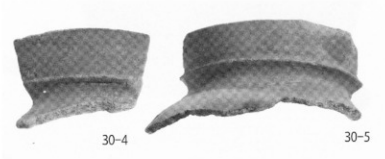
29-5

29-6

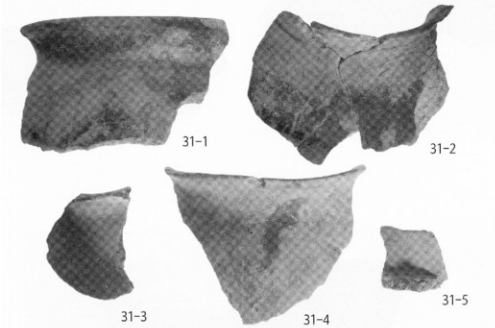
30-1

30-2

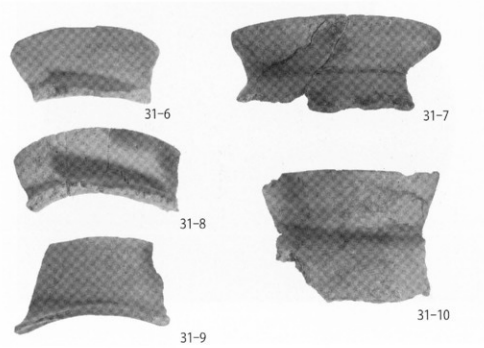
30-3



30-4　30-5



31-1　31-2　31-3　31-4　31-5



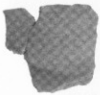
31-6　31-7　31-8　31-9　31-10

32-1

32-2

32-3

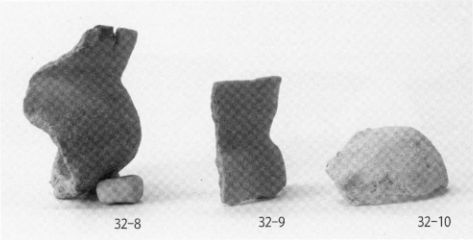
32-4



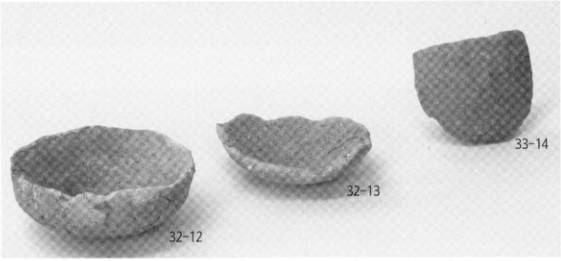
32-5

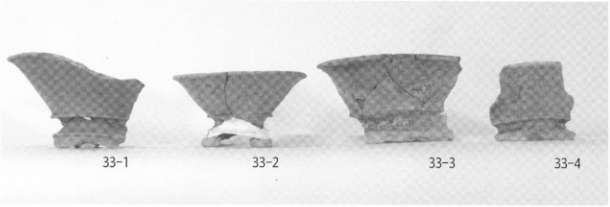
32-6

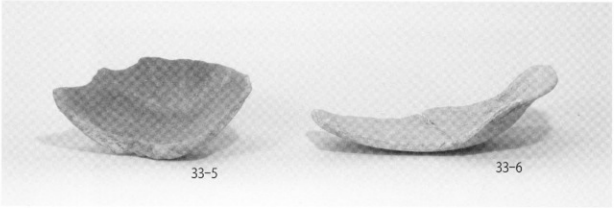
32-7

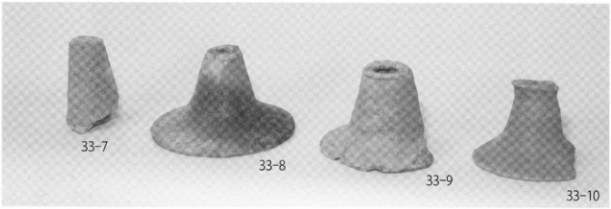

32-8
32-9
32-10

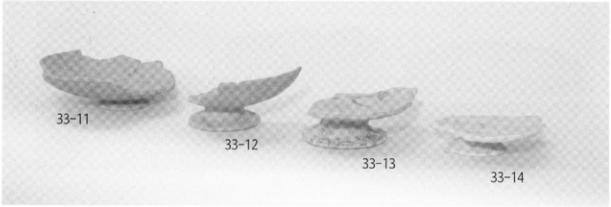
32-11


33-14
32-13
32-12

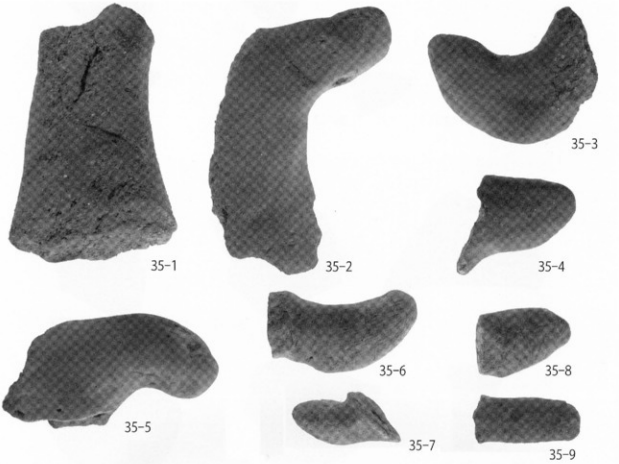

33-1
33-2
33-3
33-4

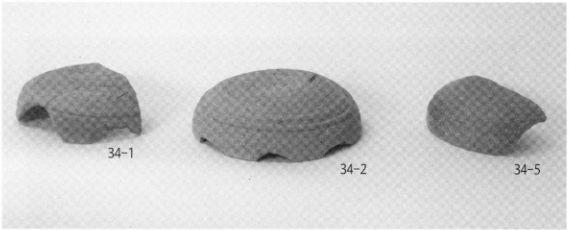

33-5
33-6

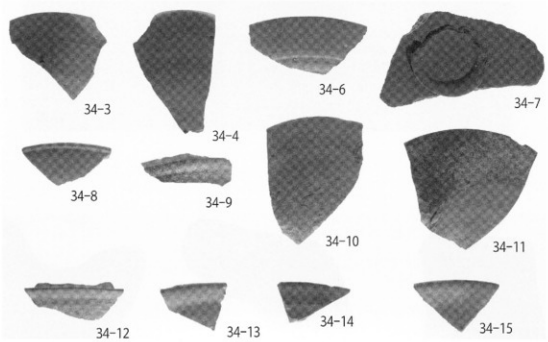

33-7
33-8
33-9
33-10

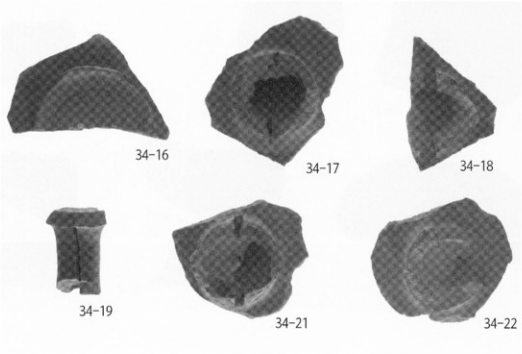

33-11
33-12
33-13
33-14

34-20

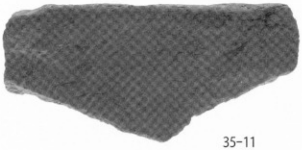

35-1
35-2
35-3
35-4
35-5
35-6
35-7
35-8
35-9


34-1
34-2
34-5

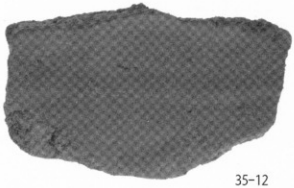

34-3
34-4
34-6
34-7
34-8
34-9
34-10
34-11
34-12
34-13
34-14
34-15


34-16
34-17
34-18
34-19
34-21
34-22

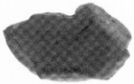
35-10



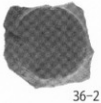
35-11



35-12



36-1



36-2

36-3

36-4

36-5

36-6

36-7

報 告 書 抄 録

ふりがな	まんばいちいせき
書名	万場Ⅰ遺跡
副書名	市道新市坂本口線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	雲南市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	4
編著者名	坂本論司・山崎　修・安川貴太
編集機関	雲南市教育委員会
所在地	〒699-1392　島根県雲南市木次町木次1013-1　TEL 0854-40-1073
発行年月日	2009（平成21）年3月

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	島根県 雲南市 木次町	32091	Q 95	35°16′54″	132°55′12″	20060802 ～ 20070731	1950㎡	市道新市坂本口線道路改良工事

種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	縄文時代	水路跡	彩文土器、木質遺物	

要約

木遺跡は、雲南市木次町寺領と東口登地内とを隔てる久野川に形成された低河岸段丘の山際に所在する遺跡である。平成18年度に行った発掘調査では水田下から弥生中期後半から古墳時代終末の土器が出土した。これらの土器の一部は上器溜りから出土したものや完形の壷も含まれている。しかし、水田は以前、圃場修備が行われたこともあり、土層は撹乱状態であったため、時期ごとに層位を分けることができず、遺物は一括して取上げざるを得なかった。翌、平成19年には、1区の一部をさらに掘り下げ、縄文時代晩期の水路跡を検川した。水路の脇では、東北日本の亀ヶ岡系の土器文様が施された彩文上器が出土し、縄文晩期、東北日本と山陰山間部との漆技術の交流があったことが窺われる貴重な資料となった。また、縄文時代では出土例の少ない何らかの施設の部材と見られる木質遺物も出土した。

雲南市埋蔵文化財発掘調査報告書4
万場Ⅰ遺跡

市道坂本口線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
2009（平成21年）3月
発行・編集
雲南市教育委員会
〒699-1392
島根県雲南市木次町木次1013-1

印刷　松栄印刷有限会社